

64  
384

傳聖三界古  
ㄅ ㄆ  
著編峯玉脇西

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始





9.1.27



64-384



子

西脇玉峯編

著正  
12.7 6  
内交



はしがき

徳は永とこしへに二千載の今に輝き、道は長く東亞の地を照らし、之を仰げば彌いよいよ高く之を望めば愈大なるもの、是れ豈に孔子の道徳にあらずや。

於お戲、千歳形を改めざるの山河は空しく語らず、永劫不盡の歲月は竟に謂はず。然れども孔子が嘗て潤削せし六經は今尙ほ儼として存在し、日夕之を伴とせば、その平明にして正大なる道徳は、炳焉として恒に吾人を照鑒するものあらむ。況んや魯論載する所の、その温容と謂ひ、將た聲咳と謂ひ、又その徳教と謂ひ、長く日月の若く、人をして適歸する所あるを知らしむるに至つては、豈に亦千歳不朽の盛事と謂はざるを得むや。

儒教が我が國に傳はりて、以よ還かた爰に千數百歳、其の間他の諸教と能く融合調和して、我が尊嚴なる國體の精華を助成せしは、今更謂ふを要せず。退いて之が祖たる孔子の人格を考ふるに至つて、吾人は轉たその博大にして、甚深なるを、仰がざらんとするも得ざる也。



今それ世界の聖者を索めんか。釋迦は言ふも更ら也。夫の基督と謂ひ、ソクラテースと謂ひ、將た韓圖と謂ひ、皆心靈界に於ける一大巨人にあらざるは莫く、従つてその人格の偉大なる敢て孔子に譲らずと雖も、その人格の完全にして、知情意の三方面均等齊一に圓滿なる發展を就し、而も平凡に陥らず、又枯淡に流れず、所謂人として殆ど瑕疵なき理想的圓滿の發達を爲せるものに至つては、恐らくは釋迦と謂ひ、基督と謂ひ、ソクラテースと謂ひ、將た韓圖と謂ひ、一籌を輸せざるものあらむ。

孔子はげに常識透徹の偉人也。その生まるゝや常識的にして、何等の奇蹟もある事なし。一家の嚴父としては、妻あり、子あり、その孫としては、子思子の若き偉大なる人物あり、社會の師表としては、彬々たる多士、濟々としてその門に聚まり、金鈴木鐸として一世に重きを爲す。よしその志、當代に暢る事能はざりしとは謂へ、千載その業を紹ぐもの續々として踵を接して起つものあり。所謂孔子は、仁を求めて、仁を得たるもの、又何をか怨まんやと、(述而)悠々然として、天を樂み、命に安んじて逝ける也。嗚呼、その死や、亦常識的なりしと謂ふべきか。

之をかの一生涯、郷國を出でざる偏固のものに比せむか。將た毒を仰いで囹圄の中に逝けるものに比せむか。將た又十字架上に磔殺せられて、非命の下に仆れしものに較べんか。或は又自ら世の血縁を斷ちて、家をも、世をも棄てしものに較べんか。あゝ孔子は何ぞ其れ平俗的にして、常識的なるや。

もとより釋迦の家と世とを棄てたる點に於いては、後世の人を憤起せしむるものなきにあらず。基督の十字架上に磔殺せられし事、亦敢て人をして悲憤慷慨せしむるものなきにあらず。ソクラテースの牢獄に毒を強いられ、而も夷然として逝けるは、肯てその徳を仰がしむるものなきにあらず。韓圖の莘々として勉め、刻々として厲み、生涯の中、一たびも足郷國を出でざる、その堅忍不拔の志業は、又肯て人をしてその學を想はしむるものなきにあらず。即ちその危険に際し、偏固に於いて、後世に偉大なる感化を與へざるにあらず。

然れども、こは元來偉人の事、常人の摸擬し得る所にあらず。然るに我が孔夫子に至つては、かゝる危険もなく、かゝる偏固もなく、將た斯かる非常識的の事もなく、徹頭徹尾、常識的にして、後の常人も學んで息まざれば、達し得むなりの



模範を示し、而も敢て平凡俗流に陥らず、能く非凡の域に造り、竟に百世道德の師となれるが若き、抑も亦欽仰すべきことにあらずや。

吾人の一に孔子を推尊して措かざる所以のものは、實に亦その常識透徹の偉人たるに存す。

吾人の本書を撰するや、言ふまでもなく、一に魯論なる論語に準據せり。此の外參酌したるものは、左氏、公羊、穀梁の三傳を始めとし、孟荀の二子、韓非、史記、禮記、家語等にして、まゝ亦莊列、淮南等の諸子をも交へ、尙ほ各代に於ける孔子に關する編著に依れり。

意ふに孔子に關して傳ふべきもの決して本編にて竭きたるにあらず。然りと雖も、今はその大處に就いて、僅に之を大觀したるのみ。蓋し孔子の學と徳との一斑は、尙ほ髣髴乎として、之を窺ふ事を得む乎。

昔者賴子成先生謂へるあり、眞は恒に新也と。孔子の學や、今の世に於いて、或は眞ならざるものあらむ。然れども、その徳に至つては、眞に永久に眞也。従つてその徳や、亦萬古恒に新なるものなくんばあらず。

抑も達人は能く達觀するもの也。若しそれ達人ならざるも、一部の魯論、二十篇十卷を執り來つて、或は淨几の上、或は綠蔭の下、朝に夕に、之を諷詠誦讀せば、恐らくは、心裏自ら頷くものありなむ。是れ吾人が敢て陳套の誦を辭せず、將た又誦才をも顧みず、主として魯論に依據して、此の編を爲したる所以也。

若しそれ之に據り、大聖夫子の徳教に浴する引ともならば、吾人の幸、何ものか之に如かんや。聊か思ふ所を叙して、本編の冠冕と爲す。



# 孔子

## 目次

春秋の時代	一頁
偉人と時勢	一
文武の盛業	二
周公の禮樂	三
造言の刑律	四
成康の治世	四
玉室の東遷	五
五霸の興起	七
春秋の思想	八
思想の潮流	一〇



二

法律思想の發達……………一二

兵農的尙武思想……………一七

尙武と法政思想……………一九

法政と超世思想……………二〇

禮樂と超世思想……………二一

孔子の成育……………二三

生誕……………二三

祖先……………二四

幼時……………二八

弱冠……………三〇

三

孔子の講學……………三二

好學……………三二

四

禮樂……………三五

垂帷……………三八

觀周……………四〇

孔子の遊齊……………四四

三桓の叛……………四四

景公……………四五

晏子……………四八

五

孔子の相事……………五八

陽虎……………五八

公山不狃……………六一

司寇……………六二

夾谷の會……………六六



六

毀三都……………六九  
 誅少正卯……………七四  
 挂冠……………七七  
 孔子の周遊……………七九

衛……………七九

陳……………八六

匡……………九二

宋……………九四

鄭……………九四

晋……………九五

葉……………九九

楚……………一〇〇

魯……………一〇一

七

孔子の交遊……………一〇五

鄭の子産……………一〇五

吳の季札……………一〇八

齊の晏嬰……………一〇九

衛の蘧伯玉……………一一〇

八

孔子と隱者……………一一三

隱者の諷刺……………一一四

孔子の態度……………一一八

門人の超世……………一二四

九

孔子の門人……………一二八

顔回……………一二九



子路……………一三四

子貢……………一三七

閔子騫……………一三八

冉伯牛……………一三八

仲弓……………一三九

冉有……………一四〇

宰我……………一四一

子游……………一四二

子張……………一四三

子夏……………一四四

曾子……………一四五

一〇 孔子の子孫……………一四七

伯魚……………一四七

子思……………一四九

一一 孔子の刪潤……………一五四

詩……………一五四

書……………一五六

禮……………一五七

樂……………一六八

易……………一六〇

春秋……………一六二

一二 孔子の聖人……………一六五

一三 孔子の終焉……………一六九

魯國の國老……………一六九

晩年の不幸……………一七一



孔子の終記.....一七二

一四 孔子の人格.....一七七

飲食衣冠.....一七八

容色動作.....一八一

知的方面.....一八四

情的方面.....一八七

道德的感情.....一八九

審美的感情.....一九三

宗教的感情.....一九八

意的方面.....二〇三

志.....二〇三

行.....二〇五

勇.....二〇九

超世脱俗.....二一三

一五 孔子の感化.....二一六

門人の孔子観.....二一六

孟子の孔子観.....二二一

一六 孔子の哲學.....二二三

道.....二二三

政治的原理.....二二六

倫理的原理.....二三一

根本的原理.....二四五

認識.....二五五

人性.....二五七

死生.....二五八



一七 孔子の倫理……………二六〇

三德……………二六〇

孝弟……………二六一

聖人……………二六四

君子……………二六五

一八 孔子の政事……………二六九

德治……………二六九

教化……………二七〇

一九 孔子の教育……………二七三

啓發主義……………二七三

特性教育……………二七五

二〇 孔子の文藝……………二七八

三世聖傳 孔子

春秋の時代

偉人と時勢

流水一たび巖石に迸り飛沫は散じて珠玉となるもその清なるもの益清となるにあらざるや偉人の世に於けるも亦此の如く社會の因陀心靈の懊悶と健闘勇戦して茲に偉人なる人格成る。

心靈的に將た社會的に靜穩平安なる單生涯に於いては人に何等の活躍的時機を與へず所謂武陵桃源の生涯を爲さしめ徒に醉生夢死に畢らしめざるも恐らくは平凡單調の生涯を送らしむるに過ぎず是れ名門勢家の後に俊傑の士の出でざる所以にして碌々たる庸材の徒空しくその跡を襲ふ所以のものならずんばあらず。



人苟も進修不息。發展向上の一念なからむか。社會的に將た心靈的に一大活躍を爲すこと能はざるや。論を俟たず。孟子の所謂憂患に生きて安樂に死するものは是れ也。(告子)是の故に有爲の士の起るや、多くは時艱に乗ず。蓋し艱難は實に偉人が有爲の秋なれば也。而して世界の至聖。人道の偉人たる孔子は正にかゝる時に世に生まれしもの也。

しかも孔子の世に生まるゝや、最も親切に人にして進修息まずんば、果して如何なる點まで向上發展すべきかの道程を、最も完全に、又最も圓滿に範を後昆に垂れしもの也。

以下少しく周代の大勢を概観して、孔子の時代を論せむ。

#### 文武の盛業

洋々乎として、竭きざる江流は、その淵源する所必ずや深くして長からざるを得ず。周八百載の基業は、それ猶ほ滾々として盡きざる長江の若きか。

蓋し周の基業は、古公亶父が狄人の入寇を避け、岐山に移りて國を周と號せしに、翦まり降つてその孫文王昌が、殷の紂王の時、西伯となり、能く父祖の業を

紹ぎ、専ら仁徳を敷いて、以て四方を風靡し、終に天下を三分して、その二を有ちたるに興れり。然れども文王は尙ほ殷の紂王に對し、敢て臣禮を失はざりしが、その子武王發に至つては、期せずして會せる八百諸侯の軍を率ゐ、紂王と牧野に會戦し、大に之を破り、紂王自ら鹿臺に上りて燔死せるより、天下周を宗とするに及びて大成せるもの也。

然れども武王即位の後、幾許ならずして崩せしかば、周の國礎未だ十分に牢からざりしものありしに、幸にこれが基礎を確立して、恰も泰山の重きを成さしめたるものは、實にその弟周公旦その人の力ならずんばあらざる也。

#### 周公の禮樂

成王、武王の後を襲ふや、年尙ほ幼にして、政を親らすること能はず。而も尙ほ殷の遺民の服せざるものあり。是に於いて周公、武王の弟、成王の叔父として、天子の事を攝行す。果せる哉。管叔、蔡叔、紂の子武庚を奉じて不軌を圖りしかば、周公三年にして之を征し、能く之が禍亂を鎮定し、爰に三公六卿の官を建て、天子を輔弼し、政務を分掌せしめ、更に魯衛晋の如き同姓を中原の要地に封じて



隱然周室の藩屏となし、該ねて又異姓の諸侯を監視せしむ。又大に禮を制し、樂を作りて民心を和らぐるを勤め、内外の政綱能く張り、周の八百載の盛業全く成り、その制度文物は燦然として四方を光被するに至りぬ。

造言の刑律

精細なる周公の禮を制するや、天下の諸事一途に出でしめんとして、大小巨細之が規定を設けざるは莫し、例へば服制を定めたるが若き、異言を禁じたるが如き是れ也。蓋し異言の禁之を造言の刑と云ふ。周禮に曰く、七に造言の刑、八に亂民の刑と、(地官)鄭氏之に註して曰く、造言とは訛言にして、衆を惑し、亂民とは名を亂し、改め作り、左道を執りて政を亂る也。此の如く周公は細大の儀禮を制して、治を圖りしかば、周初の治は大に見るべきものありて、極めて後世の稱する所となりしも、一得一失は數の免れざる所。後世周制の瓦解と與に、その煩文、縛禮の反動は、思想混亂、言論横議の素因を爲すに至りぬ。

成康の治世

吾人嘗て之を袁詭師に聞く、生氣旺盛なる草木は、百の害虫あるも、之を蠶す

ること能はずと、之を實驗に徵するに果して然り。今、それ周公に因り、國家の典禮就り、國家の基礎立ちし成王の世は、武庚管蔡あるも、何の爲す所あらんや。況んや、淮夷徐戎の叛をや、此れとても幾許ならずして、之を平定せられ、天下大に安寧なりき。成王崩じて、康王立つ。周召の二公尙ほ能く輔弼して、益文武の業を修めしを以て、史家その至治隆盛の績を稱して、成康の際刑措いて、用ひざるこゝと四十餘年と謂へり。是れ固より多少の誇張なきにあらざるも、亦以てその昇平無事の状を見るべし。之を周室極盛の時と爲す。

王室の東遷

物盛なれば必ず衰ふ。さしも光榮ありし文武周公が盛徳の業も、康王の後を受けし昭王に及びて始めて衰へ、それより一二の英王なきにあらざりしも、厲王の虐、幽王の淫により、内憂外患交も起り、先の用意周到なりし周制も、茲に至つて土崩瓦解し、諸侯は漫に四方に威凌し、天子は空しく堂を下つて諸侯を見るに至りぬ。是に至つて吾人焉ぞ南風競はざるの嘆なきを得むや。

初め武王殷に克つや、豊より鎬京に移りしが、成王の時、周公、武王の志を繼ぎ



洛邑を營み、鎬京を西都となし、洛邑を以て東都と號して、諸侯朝覲の所と爲せり。蓋し洛陽は天下の中央、四方の道路略ぼ均しきを以て也。然れども歴代の天子皆西都鎬に住せりしが、幽王の後を襲ひし平王は、王室の益衰へ、戎狄の愈強く、而してその都鎬京の戎狄に逼り、之を制すること能はざるを以て、その禍を避けんとて、茲に鎬京より洛陽に遷るに至りぬ。之を平王の東遷と云ひ、史家武王より幽王に至るまで十二王、三百六十二年間を西周の世と呼び、平王以後の世と分てり。

嗚呼、父祖幾代の間、據つて以て威を四方に傳へたる雄都、今や棄て、之を秦人に附して顧みず、而して自ら列強競争の渦中に投じ、空しく姑息の安を偷まんとす。周の徳亦衰へたりと謂ふべし。之を是れ前門の虎を禦げば後門の狼と謂ふべき哉。

西周に對し平王以後の世を東周と云ひ、又之を二期に分つ。即ち春秋、戰國の兩時代是れ也。

蓋し平王即位四十九年に魯の隱公立ちぬ。その後孔子大義亡び、王道の振は

ざるを慨し、夫の春秋を作つて以て名分を明にせるは實に此の年より始まる。爾後二百四十二年間、之を春秋の世と謂ひ、是れより後即ち周に在つては敬王魯に在つては哀公以後を所謂戰國の世と稱するもの也。

五霸の興起

微々として振はざるは東遷以後の周の王室なる哉。而して時は維れ、弱肉強食の春秋十二列國の季世也。蓋し十二の列國とは魯、衛、晉、鄭、蔡、燕、齊、陳、宋、楚、秦を云ふ。此の列國の中、最も強を争ひしものは所謂五霸にして、即ち齊の桓公、晉の文公、宋の襄公、秦の穆公、楚の莊王是れ也。蓋し覇とは伯也。長のこと也。諸侯伯の牛耳を執り、内は周室に朝して王事に勤勞し、外は夷狄を攘ひて中夏を安んずる謂ひなりしが、此は單に表面上の事のみ。されば孟子の如きは、力を以て仁を假るものは覇(公孫丑)と評せり。

元より一時は天子を助けて諸侯を制したることなきにあらざりしも、多くは小康をも保つこと能はず、従つて兵亂常に絶ゆることなく、孟子の所謂春秋の義心なき(盡心)暗黒時代なることを免れざりしかば、王室は空しく虚器を擁



するのみにして、禮樂征伐の權復た天子より出でずなりぬ。  
 上の好む所下焉れより甚しきものあり、舉世滔々として、權勢を維れ争ふ世、  
 既に周室に於ける鼎の輕重すら問へる楚の莊王の如きもの出づるに及び爰  
 に君臣の大義は蕩焉として、紊亂し父子の名分は茫乎として、失却し強は弱を  
 食み大は小を吞み世を擧げて權勢の外道義あるなし而して彼の覇を争へる  
 齊晋にも亦その君權を僭篡せんとするもの續々輩出するに至りぬ、即ち晋の  
 六卿齊の田氏その他魯の三桓の如き是れ也。  
 孟子の所謂奪はずんば鑿かざる(梁惠王)一世の風潮は單に此れのみ止ま  
 らず彼の大夫の家臣にも此の輩類々として出づるに至りぬ、即ち趙氏の家臣  
 たる晋の佛肸季孫の家臣たる魯の陽虎公山弗擾の如き是れ也かゝる徒輩交  
 も權勢を争へるは恰も我が室町氏の季世に似たりしこそ轉たてけれあゝ教  
 化の陵夷風俗の頽廢未だ嘗て此の時の如きはあらざる也。

春秋の思想

流水も壅塞せば之を堰止することを得む然れども混々として竭きざる長

江は永へに之を壅塞するを得べきか何時かは潰裂して横流汎濫せざらむや  
 周制を以て人事の總てを堰き止めし周の世は王室東遷してより爰に急轉直  
 下の勢を以て濁水浩蕩として禹域に汎濫せりき果然周制の瓦解と與に處士  
 横議して言論の自由は其處此處に起りぬ在傳に曰く鄭人郷校に遊び以て執  
 政を論ず然明子産に謂つて曰く郷校を毀ちて如何と子産曰く何ぞ爲さん夫  
 れ人朝夕より退いて遊び以て執政の善否を議す其の善とする所のもの吾れ  
 則ち之を行ひ其の惡とする所のもの吾れ則ち之を改めんこれ吾が師也之を  
 若何して之を毀たんや我れ忠善怨を損するを聞く威を作して恨を防ぐを聞  
 かす豈に遽れて止めざらんや然り猶ほ川を防ぐが若し大決せば犯す所人を  
 傷くること必ず多く吾れ救ふこと克はざる也小決して道かしまるに如かず  
 吾れ聞いて之を樂とするに如かざる也と襄公三十一年抑へんと欲しても抑  
 ふること能はざりし横流逆行の状見るべきにあらずや。  
 孟子當時の光景を説いて曰く世衰へ道微にして邪說暴行有た作る臣にし  
 てその君を弑するものあり子にしてその父を弑するものあり孔子懼れて春



秋を作ると。滕文公春秋當初の時勢や既に此の如し。是に至つて先きの亂民の刑も將た造言の律も共に世に何等の制裁を加ふること能はず。横議は滔々として百出し、邪説亦續紛として蜂起し、殆ど其の底止する所を知らず。此の時に當つて偉人豪傑の士起つて生民の塗炭を救濟し、習俗の頽廢を匡正し、思想の混沌を統一するにあらざれば、復た昔時の盛觀を恢弘すること能はずなりぬ。實に孔子は此の時勢に生れ、慨然として經世濟民を以て天の己に對する使命として活動せる一大至聖なりし也。然れども當時に於いて經世濟民の志を懷

きしもの決して孔子一人に止まれるにあらず。凡そ人文の事は複雑にして、一隅一端を以て揆すべからず。是れ偉人豪傑の士の續出せざるを得ざる所以にして、抑も亦齊の管仲、鄭の子産、秦の百里奚、陳の老子等が之を政治上、將た學藝上より、各その世界觀を以て樹ち、是を諸種の方面より經世せんと爲し、所以のものならずんばあらず。以下春秋に於ける思想界の光景を一瞥せむ。

#### 思想の潮流

齊しく是れ高山峻嶺に抵る道也。而も正路あり、間道あり、細路もあり、迂逕もあらん。當時經濟の志を懷きしものも交此の如し。齊の管仲と云ひ、鄭の子産と云ひ、是れ同じく濟世利民の志を懷抱して、當世に爲すありし人也。然れどもその爲せる所は決して同一にあらず。今當時に於ける其の最も重なる思想を尋釋攷覈するに、政治倫理の兩方面より之を觀察すれば、禮樂思想、法政思想、尙武思想及び超世思想の四者互に暗闘せるを見む。

蓋し禮樂思想と超世思想とは共に歴史的に淵源する所極めて深く、殊に禮樂思想は三代に於ける政教一致時代の根本思想なりしかば、春秋當初に於いて所謂習慣の惰力として、尙ほ多少の勢力を有せしも、周以後新に起りし法政思想即ち殊に齊國に於いて發展せる法政思想が當時を風靡するに至つて禮樂思想は政治上の勢力微々として振はず、唯僅に倫理上に於ける孤壘を守るに過ぎざるに至れり。而して超世思想は所謂黃老の恬淡無爲自然の主義にして、元來超人的思想のことなれば決して複雑にして活物たる當世の政治上に勢力あるべき筈なし。されば此の思想は唯倫理上及び學藝上に鮮からざる



影響を及ぼしたるのみ之に反し尙武思想は單に政治上に於ける思想として倫理上に影響の鮮きは反對の類似として夫の超世思想に相似たり。之を要するに政治倫理の兩方面に涉つて最も暗闘の甚しかりしものは法政思想と禮樂思想との二者にして而もその當代に於ける所謂最新思潮として滔天の勢ありしものは謂ふまでもなく法政思想のそれなりし也。似て非なるものは禮樂思想に對する法政思想のものなりき紫を惡むは朱を亂るを恐れて也是れ後世孟荀二子が力を竭くし口を極めて覇政を諷りし所以ならずや孟子曰く管仲は曾西すら爲さざる所也と公孫丑荀子曰く仲尼の門人五尺の童子も言五伯を稱するを羞ぶと仲尼是れ所謂法政思想の代表者たる覇者なるものが力を以て仁を假り陽に仁義を標榜して陰に功利を圖れるを惡めるが爲めならずんばあらず。

法律思想の發達

禮樂思想とは謂ふまでもなく周公の親親尊賢の思想に基き後世儒教として一大發展をなせるもの即ち孔子が春秋時代に於いて回瀾を既倒に翻さん

と爲しいもの也之に對する法政思想は即ち功利の主義にして春秋時代の特徵として政治上に於いては所謂覇政なるもの上に遺憾なく發揮せられたる也而してその淵源する所を尋ねるに遠く上代に發せる形跡なきにあらずるも近くは周初の大立物たる彼の周公と相並びし太公望呂尙が尊賢尙功の思想に發し長く齊國の國是と成り終に管仲に至りて大成すると同時に併せて法律思想の發達を催す素因を爲すに至れり。

蓋し法政思想なるものは齊國に於いて最も能く助成せられたるものなれどもその影響の及べる所は單に齊人を陶冶せしのみならず鄭と云ひ衛と云ひ晋と云ひ當時中原に國せるもの多くはその影響を蒙らざる莫く遂に春秋の一特徴を形作れるもの也且つそれ周制の崩解と共に風俗の頽廢教化の陵夷最も甚しきを加へしと雖も亦一面より見れば諸侯互に割據して覇を争ひ強を競ひし結果従つて人々思想の自由を得爰に人文大に發達して政教遂に分立し之と同時に亦法律の觀念大に發達するに至れるを見る。今それ春秋に於ける法律思想の發達を一瞥せんか左傳に曰く三月鄭人刑



書を鑄ると。杜預之に註して曰く、刑書を鼎に鑄て國の常法と爲せる也。時に晉の叔向、子産に書を論つて曰く、始め吾れ子に處ることあり。今は則ち已まん。昔先王事を議制して、刑辭を爲さざるは、民の争心あるを懼るれば也。今吾子鄭國に相として、封誦を作り、謗政を立て、參辭を制し、刑書を鑄將に以て民を靖ぜんんとす。亦難からずやと。子産復書して曰く、吾子の言の如きは、僑不才、子孫に及ぶと能はず。吾は以て世を救ふ也。既に命を承けざれども、敢て大惠を忘れんや。と。昭公六年、是に由つて之を觀れば、鄭人鑄刑書とは、子産が刑書を作り、鼎に鑄たるものと謂ふべし。又左傳に曰く、吾が先君文王、僕區の法を作る。曰く、盜の器を隱す所は、盜と罪を同じし。と。杜預の註に曰く、先君とは、楚の文王、僕區は、刑書の名と。之を以て觀るに、楚人は、夙に刑書を作りて、その國を治めし也。

又左傳に曰く、冬、晉の趙鞅、荀寅師を帥りて、汝濱に城き、遂に晉國に一鼓鐵を賦し、以て刑鼎を鑄。范宣子爲る所の刑書を著す。仲尼曰く、晉其れ亡びん乎。その度を失ふ。夫れ晉國は將に唐叔が受くる所の法度を守り、以て其の民を經緯せんとす。卿大夫序を以て之を守る。民是を以て能く其の貴を尊ぶなり。貴是を以

て能く其の業を守るなり。貴賤愆らざるは所謂度也。文公是を以て、執秩の官を作り、被盧の法を爲り、杜預註に曰く、僖二十七年、文公被盧に蒐し、唐叔の語を修む。と。以て盟主と爲る。今是の度を弃て、刑鼎を爲る。民鼎に在らん。何を以て貴を尊ばん。貴何の業をこれ守らん。貴賤序なければ何を以て國を爲めん。且つそれ宣子の刑は、夷の蒐也。晉國の亂制也。之を若何ぞ以て法と爲さんや。と。蔡史墨曰く、范氏中行氏其れ亡びん乎。中行寅、下卿と爲して、上令を干し、擅に刑器を作り、以て國法と爲す。是れ姦に法とす。又范氏に加へて、之に易へて亡す。其れ趙氏に及ば、趙孟も焉れに與る。然れども已むことを得ず。若し德あらば、以て免るべし。と。昭公二十九年、之を以て觀れば、晉國も亦法律を制定せるを見るべし。同時に、亦孔子が如何に、法政思想に對せし態度の一斑をも窺ふことを得ん。又左傳に曰く、鄭の駟黻、鄧析を殺して、其の竹刑を用ふ。と。定公九年、杜預の註に曰く、鄧析は鄭の大夫、鄭の鑄る所の舊制を改めんと欲し、君命を受けず。私に刑法を造り、之を竹簡に書す。故に竹刑と言ふ。と。而して左傳の作者は更に叙して曰く、君子謂へらく、子然駟黻の是に於て不忠也。苟も以て國家に加ふべき。



あらばその邪を棄て、可也。子然以て能を勸むるとなし。定公九年亦以て法律思想の駸々乎として發達し、かゝる大義を滅却し、名分を思はざる世に在りては、動機を主とせる政教一致の所謂禮樂思想の到底國政を刷新するに能はざりしは、子然が鄧析を殺して、而もこの竹刑を用ひたるを見て知るべく、又左傳の作者が隱然駟馱を非難して、鄧析を擧げたるを見ても、法政思想の如何に一世の大思潮なりしを知るべきにあらずや。

蓋し是れ、法政思想なるものが抑も當時を風靡したる所以にして、これより後、戰國に於いて、法家の徒頻りに管晏功利の主義を繼紹して、當時の君主に干せし所以のものならずんばあらず。

而して吾人が此の法政思想の系統を尋釋して、今に至つて最も痛快に堪へざるものあり、何ぞや、凡そ支那學術の總てを通じて保守的、退嬰的の傾向を有するに關せず、獨り法家の徒に至つては然らず、所謂法政思想の系統に屬せる當代の學者は、春秋たるを問はず、戰國たるを論ぜず、悉くその思想の進取的、活動的なると是れ也。彼等は過去の黄金時代を夢みず、古の世は猶ほ今の世の若

く、古は、今に如かず、今は、尙ほ、後の今に如かず、世は、駸々として開展、進歩、息まざるものなりとの思想を懷抱せりしが、こは洵に支那古今を通じて獨り法家の特占にして、戰國に於ける申不害、商鞅、殊に韓非の徒に於いて最も能く此の思想は發揮せられたり、吾人史を讀みて、より多く法家に同情する所以のものは、獨り此の進歩の主義を懷きし點に存せずんばあらざる也。

#### 兵農的尙武思想

兵は農の基礎あるにあらざれば、一日も存立すべからず。支那に於ける尙武の思想より生れたる兵農の主義は、之を現實にせるは春秋の時代にあらず、反つて之が次代たる戰國の世にして、即ち秦の商君、公孫鞅より勦まれるもの也。然りと雖もその淵源を尋ねるに、決して商君對秦の孝公時代に始まれるにあらず。今その素因とも認むべきものを見るに、周の東遷當初に於いて、これが發芽のあるあるを覺ゆ。

抑も犬戎の難に當り、秦の襄公は、王事に勤め、平王を救ひて功あり、平王因つて襄公を諸侯となす。次いで周室の洛陽に京遷するや、平王その故地を擧げて



秦に賜ふ。秦因つて悉く岐周の地を有す。蓋し岐周の地は後世の所謂關中の地にして、東は黄河を要し、南は渭水を遶らし、西北は山嶽連亘し、頗る形勝の地也。然るに、秦人由來尙武の氣象に富めり。今此の地を擁して、基業更に鞏きを加ふるものあり。その後世に於いて、帝業を就すに至れる所以のもの。豈に亦偶然なりとせむや。

爰に、秦人の如何に尙武の思想に富めりし、左券を求むるに、毛詩の序に曰く、小戎は襄公を美する也。その兵甲を備へて西戎を討つ、西戎方に強くして征伐休せず、國人則ち其の車甲に矜り、婦人能くその君子を閔むと、秦風鄭氏之に註して曰く、國人其の車甲の盛を夸大にするは、伐を樂むの意ある也。婦人其の君子を閔むは、恩義の至り也。作者外内の志を叙せるは、君が政教の功を美する所以なりと、その車甲武器に矜り、伐を樂む意あるは、以て秦人が如何に尙武の氣魄に富めりしかを見るべく、亦これと同時に、そのか弱き女性すら尙ほその君子を閔む熱烈なる涙に富めりしを見れば、秦人が男女を問はず、如何に勇邁の氣象に勝れたるやは、問はずして明かなるにあらずや。

秦戰國の時、上に英明なる孝公あり、以て山東諸國と與に鑿を列ねて、衛を中原に争はんとす。よし商君なしと雖も、その強兵の術たる兵農の主義なるもの起らざるを得むや。蓋し秦人が尙武の思想は、數世涵養の極、此に至らざるを得ざるは、洵に必至の勢なりしなれば也。况んや衛人公孫鞅の來つて、夫の英主孝公を相くるに於いてや。

尙武と法政思想

凡そ攻戰の國に於いて、最も必要なるものは、軍の紀律と民の服従と也。而して最も能く之を教ふるものは、法律の觀念也。蓋し法は必ず服従を強い、又能く紀律を重んずるものなれば也。是れ春秋時代に於いて發達せんとしたりし法家なるものが、次代の戰國の世に於いて、滔々として相率ゐて秦國に行き、その君主に干せる所以のものならずんば、あらず。夫の孝公に於ける衛の公孫鞅、始皇に於ける韓の韓非、是れ何れも法家の泰山北斗なるもの、而して齊しく秦に歸せし所以のもの、主として尙武思想の上に、城ける兵農主義と法政思想とが、能く根本的に相抱合すべき契機あるが爲めならずや。



## 法政と超世思想

儒家の説く所の三代は過去に於ける現實的社會也。道家の説く所の太古は過去に於ける理想的社會也。儒道の二家等しく太古の所謂黄金時代なるものを夢みるも、現實と理想との差あると此の如し。意ふに三代の政治に謳歌する儒家は勢大義名分を明にせざるを得ず。従つて懷舊の情、崇古の念、篤からざるを得ざる也。之に反して法家は進歩の主義を懐き、痛く上世の政治を非難し、今の世に應ずるには今の法を以てせざるべからざるを説く。然りと雖も、春秋戰國の世、その風尚は尙ほ時なる觀念に執着し、未だその保守の精神を脱却せず、されば一概に三代の政治を斥くべからざるものあり。是に於いてか理想的の太古を説ける超世思想たる道家の説は、法家がその説の立脚地として最も恰好のものなりし也。何となれば理想的の太古は既に業に時間を超越して、古は猶ほ今の如く、今は猶ほ古の如く、時勢に順應して法を制するを得べければ也。大道廢れて仁義ありと、老子是れ道家が超人間的思想として有しい見地也。此の見地や、法家に取りて以て三代の政を棄て、更に新法を制して富強を圖ら

んとせし所以のもの也。

若し、それ三代の禮樂に執着、拘泥すること、所謂儒家の如くならんか、焉ぞ能く政教を分離して所謂法家なるもの、旗幟を鮮明にすることを得んや、是れ法家が道家に參し、後韓非が解老、喻老二篇の著ありし所以也。且つ法家は法の外に必ず術なるものを説く。術とは君主が臣下を御するの方也。而も此の術なるものも亦資を道家に採れること鮮からず。

之を要するに法政思想と超世思想との混和融合は、一見甚だ奇なるが如きも、その實決して奇なるものにあらず。その間大に接近すべき理あり。蓋し法家は一方には、新に法を制する必要上より道家に參したるのみならず、亦法家の根本主義たるその君權を確立する術なるものを講ずるより資を道家に採りたる此の二點は、實に兩思想の密著なる關係を結びし主要なる原因ならざんばあらず。

## 禮樂と超世思想

堯舜を祖述し、文武を憲章せる孔子は、所謂義戰なき春秋の叔世に生れ、禮樂



思想の代表者として政治上には法政思想尙武思想と相對し、學藝上には超世的思想と相並んで馳聘せりき。

抑も學藝上に於いては、孔子壯年の比夫の超世思想と何等の干預する所のものなかりしが、その晩年の哲理として卓絶なる世界觀を構成するに至つて始めて密著なる關係を有するに至れり然れども吾人は夫の超世思想が孔子の學說に至大なる影響ありしと謂はんよりも寧ろ孔子がその偉大なる人格の上に於いて最も能く融合調和せられたるを認めんとするもの也。

而して政治上に於いては、孔子はその年齒三十有五より六十八歳に至る所の三十有三年の長き所謂孔席煖なるに違あらずとの諺の若く皇々乎として天下を周遊し以て夫の兩思想と健闘勇戰せりしも不幸にも遂に失敗に歸し了はんぬ。

然り雖の屈するは伸びんが爲め也孔子が政治上に於ける失敗はやがてそれが禮樂思想の立ち場として人道の上に永久に成功せるの謂ひなりし也。

## 二 孔子の成育

### 生誕

常識透徹の偉人たる孔子の生るゝや、何等の神奇怪蹟なく平凡にして常識的なることこそいと慕はしけれ。

凡て世の聖者と謂はれ偉人と謂はるゝもの、その生誕に際し多少の奇蹟を伴はざるもの寡し釋迦の降誕基督の誕生比々として皆然らざるは莫し獨り吾が夫子に至つては然らず元より二三の學者にしてその生誕に際し多少の奇蹟を附會せるもの絶對的に之なきにはあらず即ち劉勰の新論王嘉の拾遺記の如き是れ也然りと雖も後世の學者此等の奇蹟を、一も信ずるものあることなし是れ豈に孔子の精神たる怪力亂神を語らずの旨に契へるものにあらずや。

孔子、姓は孔名は丘字を仲尼と云ふ孔子若くは孔夫子と云ふはその尊稱の語也猶ほ老聃を稱して老子と云ふが若し。



父を叔梁紇と云ひ、母を顔徵在と云ふ。周の靈王二十年、魯の襄公二十一年、西曆紀元前五百五十二年十月陰曆八月二十一日に魯の昌平鄉陬邑に生る。

蓋し孔子の生年月日に就いては諸説紛々として、未だ嘗て定まる所なしと雖も、後世の學者多くは公穀二傳の説と史記の説とを信ず、史記に曰く魯の襄公二十二年にして孔子生まると。世家是れ史記の襄公二十二年の説也、公羊傳に曰く、十有一月庚子に孔子生まると、襄公二十一年穀梁傳に曰く、冬十月庚子に孔子生まると、襄公二十一年是れ公穀二傳の襄公二十一年の説也、而して公穀二傳は、年は同じきも、月を異にせり、唐の陸德明、その公羊傳音義に、唐代既に公羊傳の異本三種あり、その一は穀梁傳と月を同じうせるあり、と之を明にせり、されば公穀の二傳は、年も月も同一なりと謂ふべし、吾人は、今姑らく史記に比すれば、孔子の年代により、近き公穀二氏の傳に従ひ、魯の襄公二十一年の説を取れる也、蓋し公羊高穀梁赤の二子は、共に子夏に學びて、その春秋を傳へしものなれば也。

祖先

孔子の生誕には、他の聖者の如く、奇蹟を以て何等色彩するものなしと雖も、その祖先には、確かに純潔なる聖者の血を傳へしなり。左傳に曰く、孟僖子曰へらく、吾れ聞く、將に達者あらんとす、孔丘と云ふ、聖人の後也。昭公七年、蓋し孔子の祖先は、宋の濬公にして、濬公は實に周初宋に封ぜられたる般の微子啓の後なれば也、而も微子啓は孔子の所謂般の三仁の一人にあらずや、而して又般の微子啓は、是れ般の湯王の正しき苗裔なるにあらずや。

宋の濬公、弗甫何を生む。濬公卒して弟煬公立つ。濬公の子、鮒祀煬公を弑して、國を以てその兄にして、太子たりし弗甫何に授けんとす。弗甫何之を肯せず、是に於いて鮒祀立つ、之を厲公となす。左傳に曰く、弗父何有宋を以て厲公に授くと。昭公七年云ふもの、是れ也。以て孔子の祖、弗甫何の如何に、溫讓の心に富めりしかを見るべし。

弗甫何、宋父周を生み、宋父周、世父勝を生み、世父勝、正考甫を生む。而して正考甫は、恭儉の士也、身、宋の戴武、宣の三公に事へ、宋國の柱石となる。左傳に曰く、正考父、戴武、宣を佐け、三命茲に益共し、故に其の鼎銘に曰く、一命にして僂し、再命



にして、僞し三命にして、俯し、牆に循つて走る。亦余を敢て侮ると莫し。是れに、  
し、是れに、（昭公七年）其の恭敬なること、是の如し。その  
人と爲り、亦以て稀世の君子人たるを想ふべし。

正考甫、孔父嘉を生む。孔父嘉亦宋國社稷の臣也。左傳に曰く、宋の穆公疾あり、  
大司馬孔父を召して、（穆公） 殤公を屬して曰く、先君穆公の兄宣公與夷、宣公の子即ち  
殤公也。を捨て、寡人を立つ。寡人敢て忘れず。若し大夫の靈を以て首領を保ち  
て、以て没するを得む。先君若し與夷を問は、其れ將た何の辭か對へん。請ふ  
子之を奉じて、社稷を主とせば、寡人死すと雖も、亦悔なしと。隱公三年、以て、穆公  
の孔父嘉に、屬望するとの大なるを見るべし。是に於いて、孔父嘉遺命を奉じて  
與夷を立つ。之を殤公となす。然るに、孔父嘉は後、華父督の爲めに殺さる。春秋の  
經に曰く、二年春、王、正月、戊申、宋の督、其の君、與夷を弑し、その大夫孔父に及ぶと。  
（桓公二年）蓋し孔父嘉は先君の命を享け、與夷を奉じて社稷を主とし、華父督私  
に公子馮を奉じて、宋の權勢を竊まんとす。是れ孔父嘉の先づ殺されて、殤公の  
次に弑せられし所以也。公羊傳に曰く、督將に、殤公を弑せんとす。孔父生きて存

す。殤公得て弑すべからざる也。故に是に於いて、先づ孔父の家を攻むと。桓公二  
年亦以てその間の消息を窺ふべきに足らむ也。

孔父嘉、華父督に殺さる。やその子木金父、魯に奔りて、禍を避く。是れより孔  
子の祖始めて、（魯） 陬人となる。是より又子孫降りて、士となり、世、孔氏を稱しぬ。  
木金父の子を、（魯） 祁父と云ふ。祁父、防叔を生み、防叔、伯夏を生む。伯夏の子を、（魯） 叔梁  
紇と云ふ。これぞ即ち大聖孔子の父君なる。

人或は禮の達人たる孔子の父と云ふ。叔梁紇を以て、（魯） 溫厚樸訥の人と想はん  
も、然れども、吾人が見る所を以てせば、（魯） 叔梁紇はや、（魯） 暴虎馮河の人なるが若し、  
所謂野人禮に嫻はざるものに似たり。左傳に曰く、晋の荀偃、士匄、偪陽を伐つて、  
宋の向戌を封せんと請ふ。荀偃曰く、城小にして固し、之に勝つも武ならず。勝た  
ずんば笑はれんと固く請ひ、丙寅之を圍む。克たず。孟氏の臣、秦董父重を、（魯） 輦いて  
役に如く、偪陽の門を啓く。諸侯の士、門せんとす。縣門發く。陬人、（魯） 紇之を、（魯） 抉して、以  
て門せんとするものを出すと。襄公十年、杜預の註に曰く、（魯） 紇は、（魯） 陬邑の大夫、仲尼  
の父、（魯） 叔梁紇也。紇、（魯） 多力、縣門に、（魯） 抉舉して、内に、（魯） 在るものを出すを、言ふ也。と以てそ



の膂力に勝ぐれたるを見るべし。

又左傳に曰く、秋、齊侯我が北鄙を伐つ、桃を圍み、高厚、臧紇を防に圍む、師、陽關より臧孫を逆へて旅松に至る、鄆の叔紇、臧賈、甲三百を帥む、齊の師を犯し、之を送つて復へると、襄公十七年杜註に曰く、鄆、叔紇とは、叔梁紇也、以てその爲人の如何に暴虎馮河に近きかを窺ふに足らん、况んや、史記に、紇、顔氏の女と野合して孔子を生むと、世家あるに於いてをや、亦以て叔梁紇が如何に野人的なりしかを見るべきにあらずや。

後世の儒者孔子の聖徳を毀くると爲し、これが野合の二字を極力曲庇せんとするも、是れ固より取るに足らざる説也、蓋し孔子は紇と顔氏が女と野合の下に生れたりとするも、敢て孔子の徳の汚るべきものにあらざれば也、吾人は反つて孔子が斯る家庭に成人となりしにも關せず、その進修不息の極、夫の崇仰すべき偉大なる人格を成せしを多とせずんばあらざる也。

幼時

好きこそ物の上手なれ、後來禮の達人と稱せられたる孔子は、早くも貧賤の

間に、その兆を現はし、幼時より禮容を爲すを好みぬ、史記に曰く、孔子兒たりし時、嬉戲常に俎豆を陳ね、禮容を設くと、世家蓋し俎とは牲體を載せ、豆とは菹醢を薦むるものを云ふ、蓋し俎も豆も均しく木にて造れるものにして、共に禮の器也、而して孔子幼時に既に此等のものを好んで戲弄す、異日殆ど禮の權化として社會より敬せられたるも亦以なきにあらざる也。

孟軻氏謂へることあり、天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓し、其の身を空乏にすと、告子然り、天の大任を負へる孔子は、既に襁褓の中にその父を喪ひ、永く貧賤の間に人となりてけり、孔子自ら云へらく、吾れ少にして賤、故に鄙事に多能なりと、(子罕)又嘗て曰く、吾れ試ひられず、故に藝ありと、(子罕)何晏の集解に曰く、試は用也、孔子自ら云ふ、我れ用ひられざるが故に藝に多能なりと、是に由つて之を見るに孔子は幼少の時に非常に貧賤なりしは明なる事實也、史記に曰く、孔子貧且つ賤と、(世家)されば孔子は之が爲め衣食の計に急にして、幼には尙ほ學を爲す閑なかりしが若し、而して専心に學を始めたは十五以上の如く思はる、是れ孔



子が吾れ十有五にして學に志す(爲政)と謂へるを以て見るべし。

## 弱冠

一事に恪勤精勵なるは萬事に恪勤精勵なる所以也。凝り性なる孔子は如何なる卑官賤職にも恪勤精勵なりき。蓋し常識透徹の偉人はかくして歩一步層一層にその偉大なる人格を就せるもの也。

史記に曰く孔子長ずるに及んで嘗て季氏の史と爲り糧量平也。嘗て司職の吏と爲り畜蕃殖すと。世家索隱に曰く季氏の史本委吏に作ると。之を孟子に參照するに委吏を正となす。孟子曰く孔子嘗て委吏となる曰く會計當るのみ。嘗て乘田と爲る曰く牛羊茁として壯長するのみと。萬章季の集註に曰く委吏とは委積を主るの吏也。乘田とは苑圃の芻牧を主る吏也と。その糧量平にして會計當り畜蕃息して牛羊壯長すと云へるを見れば孔子は如何に小職下平にありても能くその職責を盡くせしかを見るに足り。従つて亦能くその務を辨へ下情に通ぜる人なりしかを知るに足らん也。

あゝ世の徒に口に宗教道德を喋々囁々して而も未だ米のなる木を知らず

との迂腐の學者の如き若し中宵之を思はゞ洵に慚死すべきにあらずや。吾人は孔子が弱冠の際にしてかく事々に恪勤精勵なる點を以てすらも尙ほ今の青年子に大に推奨するの價値あるを認めずんばあらず。



## 三 孔子の講學

好學

孔子が好學の念に厚きは殆どその先天の性に出でたり。否之を厚きと謂はんよりも寧ろその疆なりしと謂ふべきと、洵に今古その倫を見ざる所也。是れ蓋し孔子は夙に學の知見を廣め、徳の立命を得る間徑捷路なるを知れば也。故に論語に子曰く、吾れ嘗て終日食はず、終夜寝ねず、以て思ふも益なし。學ぶに如かざる也。衛靈公以て孔子が夙に學の經驗上如何に有益なりしかを悟れるを知るべし。嘗に然るのみならず、孔子は更に一步を進めて次の如く云ひぬ。論語に子曰く、學んで思はざれば罔し、思うて學ばざれば殆し。と爲政以て思索と講學とは人生の明と安とを得る所以の缺くべからざる方法なるを認めたりしを見るべし。

孔子既に學の有益にして必要なるを認めたる。此の如し然れども進學の困難なること如何にも峻坂の登攀よりも難きを覺えしにや。論語に、以下の如

く謂ひぬ。子曰く、學は及ばざるが如くするも猶ほ之を失はんとを恐ると、泰伯意へらく、學は日新を貴ぶ。敢て中立の地なし、日に進まざるものは従つて日に退くを免れず。是れ之を失はんとを恐れて日に進まざるを得ざる所以也。是に於いて乎、孔子は身親ら痛切に進學修徳の工夫を述べて曰く、徳これ修まらず。學これ講せず。義を聞いて徒ると能はず。不善改むると能はざるは是れ吾が憂なり。と。述而又曰く、朝に道を聞かば夕に死なんも可也。と。里仁孔子業に此の氣魄ありて一日も惰らず。その進修不息の精神や、歴々として紙上に露はるゝを覺ゆ。又曰く、賢を見ては齊し、からんを思ひ、不賢を見ては内自ら省みると、里仁その孜々として砥礪せしと此の如し。是に於いて其の進學修徳の餘や、其の體を得たるにや。曰く篤く信じて學を好み、死を守つて道を善くす。危邦には入らず。亂邦には居らず。天下道あれば見はれ、道なければ隠る。邦道ありて貧且つ賤なるは恥也。邦道なくして富且つ貴きは恥也。と。泰伯好學にして道に任ずるに死を以てする。其の道念の牢乎たる洵に欽仰すべきにあらずや。

而して吾人は又その邦道ありて貧且つ賤なるは恥也。邦道なくして富且つ



貴きは恥也との文を讀むて、更に孔子が言の義あり致あるを覺えずんば、あらざる也。

由來孔子は謙讓の人也。故に曰く、默して之を識り、學んで厭はず、人を誨へて倦まず。何ぞ我にあらんやと述而謙遜せりき。然れども、その道念の深き、年と共に好學の志彊きを加へ、遂に憤せざれば啓せず、排せざれば發せずと述而謂ふに至りぬ。是に於いてか、好學の一大抱負を述べて曰く、十室の邑、必ず忠信、丘が如きものあり、丘の學を好むに如かざる也と公冶長あり、是れ孔子自らが言へるが如く、仁に當つては師に讓らずと衛靈公の概を示せるものにあらずや。孔子は晩年に至つて、その好學の精神益壯也。論語に子曰く、我に數年を加へ、五十以て易を學ば、以て大過なかるべしと述而史記に曰く、孔子晩にして易を喜み、象繫象說卦文言を序す、易を讀み、韋編三匝、絶つ。曰く、我に數手を假さば、是の如く我は易に於いて彬々たらんと世家その好學の餘、之を愛好して大に得る所ありしを見るべし。而して吾人は、其の好學の精神は、老いて益彊く、殆ど其の頂點に達し、煩些なる人事の總てを忘れて、之を樂むに至れるを見る。論

語に曰く、葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる、その爲人や、憤を發して食を忘れ、樂以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らずと、爾か云へと。述而於戲、熾なる哉、孔子、世の謂ふ所の嬰鑠たる老翁と稱するもの、果して此の氣魄と抱負と之ありや、是に至つて、吾人は此の好學の精神の高潮は、實に孔子が自ら謂へりし、之を知るものは之を好むものに如かず、之を好むものは之を樂むものに如かずと、雍也の域に造り、そこに綽々として安立せしかを認めずんば、あらず。

孔子は所謂下學して上達せるもの、憲問されば、その晩年に至り、己が一生を回顧し、その進學修徳の要を約して、吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従つて、矩を踰えずと爲政謂ひぬ。語甚だ形式的に屬せりと雖も、孔子が一生を通じての進境、歴々として見るべきにあらずや。

禮樂

聖人に常師なしとは、是れ唐代の文豪韓子が師說中の言也。實に當時には孔



子の如き絶大なる人格を陶鑄すべき偉大なる人物はあらざりしなり。然れども人は生知なるものにあらず。必ずや師父の之が指導を待たざるを得ず。是れ孔子が常師なきも、機會ある毎に先進に禮を問ひ、樂を習ひし所以也。論語に曰く、衛の公孫朝、子貢に問うて曰く、仲尼焉をか學ぶ。子貢曰く、文武の道未だ地に墜ちずして人に在り。賢者はその大なるものを識るし、不賢者はその小なるものを識るす。文武の道あらざる莫し。夫子焉ぞ學ばざらん。而も亦何の常師か之れ有らんやと。子張、朱子之を釋して曰く、文武の道は文王、武王の謨訓功烈と凡そ周の禮樂文章とを謂ひ、人に在りとは人能く之を記すものあるを言ふ也と。されば孔子は特に一人より過大なる影響を受けたる常師なく、文武の謨訓、周初の禮樂に通ぜざるものあれば、その好學の念に驅られ、その何人たるを問はず、之に師事せしものならんか。

然らば孔子は如何なる人物に就き、將たその人物に就きて如何なるものを學びしか。孔子の多能にして、多藝なる點より見れば、當時に傳へられし、殆ど總ての文章藝術を學びたらんも、之を史傳に徵するに、その傳習の詳細なるは得

て之を知ると能はず。然れども亦二三の傳説により其の消息の一斑を窺ふことを得ざるにあらざる也。

禮記に曰く、唯丘、諸れを、莖弘に、聞くと、樂記蓋し之を聞くと、は樂を習へるを謂へる也。淮南子に曰く、孔子琴を鼓するを、師襄に學ぶと、主術訓異、曰、孔子が音樂に堪能なりし、點より見て、吾人は此等の傳説の必ずしも虚ならざるを信ぜんとするもの也。

左傳に曰く、秋、鄒子來朝し、公之と宴す。昭子問うて曰く、少皞氏、鳥を官に名くるは何の故ぞや。鄒子曰く、吾が祖也。我れ之を知ると、仲尼之を聞き、鄒子に見えて之を學ぶ。既にして人に告げて曰く、吾れ之を聞く、天子、官を失すれば、學、四夷に在りと。猶ほ信なりと。昭公十七年、杜預の註に曰く、仲尼、年二十八と。而して之を學ぶとは、蓋し古代の官制を學びしものならんか。

博學にして、多藝なる孔子は、詩、書、禮、樂を主として、殆ど當時の學術、略ぼ、窺はざるはなしと雖も、特に熱心に學びしものは、禮也。さればその研鑽の餘、終にその蘊奥を窮め、早くも禮の達人を以て目せらるゝに至りぬ。左傳に曰く、九月、公



楚より至る孟僖子禮を相ると能はざるを病て乃ち之を講學す苟も禮を能くするものは之に従ふ其の將に死なんとするに及んでその大夫を召して曰く禮は人の幹也禮なければ以て立つとなし吾れ聞く將に達者あらんとす孔丘と曰ふ聖人の後なり臧孫紇言あり曰く聖人の明德あるもの若し世に當らざればその後必ず達人ありと今其れ將に孔丘に在らんとするか我れ若し没するを獲ば必ず説南宮敬叔のと何忌孟懿子のとを夫子に屬し之に事へしめて禮を學ばしめ以て其の位を定めよと故に孟懿子と南宮敬叔と仲尼に師事すと昭公七年杜預の註に曰く僖子卒する時孔丘年三十五と以て禮の達人として夙に世に稱せられたるを見るべし。

垂帷

博く文を學び之を約するに禮を以てすとは是れ孔門に於ける進學修徳の大經也論語に子曰く君子博く文を學び之を約するに禮を以てす亦以て畔かざるべきかなと雍也而して此の言復た顔淵篇にも出づその異なるは但だ冒頭に於ける君子の二字なきのみその重出せる所を見ても尙ほその言の重大

なるを知るべし蓋し孔子の主とせる學なるものは即ち詩書禮樂にして一面には身を修め一面には國を始め該ねて緯々然として餘裕ある人格を成すに在り是れ孔子が詩に興り禮に立ち樂に成ると泰伯謂へりし所以也而して孔子は他に更に之を婉曲に謂ひけらく道に志し徳に據り仁に依り藝に遊ぶと(述而)二者その言同じからずと雖もその意元より異なるものにあらず實に孔子は此の見地を以て世を指導せんと欲せしもの也。

然らば孔子は如何なる時代より帷を垂れてその徒に教を授けしか孔子晚年に謂はずや三十にして立つと爲政是れその時也蓋し吾人の見る所を以てせば三十の而立とは少くとも孔子が政教の原理の成立せりし時ならずんばあらず既に孔子は政教の原理として仁と禮とを標榜すその經世濟民の志の厚き焉を長く黙々として已むべけんや左傳に曰く琴張宗魯の死を聞き將に往いて之を弔せんとす仲尼曰く齊豹これ盜にして孟縶これ賊なり女何ぞ焉れを弔せんと昭公二十年杜預の註に曰く琴張は孔子の弟子字は子開名は牢と然らば此の時業既に孔子は門生を有せりしと謂ふべし而して魯の昭公二



十年は實に孔子が三十一歳の時也。以て三十而立の時より夙に帷を下してその徒に教へしを見るべし。若しそれ然らずんば焉ぞその二三年後にして夫の孟僖子がその二子を託して禮を講ぜしむるとあるべきものならむや。

觀周

孔子が周に適いて禮を老子に問ひたりしは、殆ど下戸の上戸にその味を問はんとしたる觀なきを得ず。されば後儒は痛く怪んで之を否定せむとするもの甚だ少からず。然れどもその事實なるを如何せん。禮記に曰く、吾れ諸れを老聃に聞くと。曾子問而して此の語、禮記に屬出せるを見れば蓋し疑ふべき事にあらず。史記に曰く、魯の南宮敬叔、魯君に言つて曰く、請ふ、孔子と周に適かん。魯君これに一乗車と兩馬と一豎子とを與へ、俱に周に適いて禮を問ふ。蓋し老子を見るると曰ふと。世家而して禮を問ふとは、云ふまでもなく禮を老子に問ひしこと也。

史記に曰く、老子は楚の苦縣厲郷曲仁里の人也。姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃と曰ふ。周の守藏室の史也。孔子周に適いて、將に禮を老子に問ふ。老子曰

く、子言ふ所のものは其の骨と皆已に朽ちたり。獨りその言在るのみ。且つ君子は其の時を得れば則ち駕し、其の時を得ざれば則ち蓬累して行る。吾れ之を聞く。良賈は深く藏して虚なるが若く、君子は盛徳ありて容貌愚なるが若し。子が驕氣と多欲と態色と淫志とを去れ。是れ皆子が身に益するとなし。吾れ子に告ぐる所以の者は、若きのみと。孔子去り、弟子に謂つて曰く、鳥は吾れ其の能く飛ぶとを知り、魚は吾れ其の能く遊ぶとを知り、獸は吾れ其の走るとを知る。走るものは以て罔を爲すべく、遊ぶものは以て繪を爲すべく、飛ぶものは以て繪を爲すべし。龍に至つては吾れ其の風雲に乗じて天に上るとを知る。こゝと能はず。吾れ今日老子を見る。其れ猶ほ龍の若きかと。列傳孔子が老子を以て、龍に比せるは老子を以て聊か薄氣味悪るき老爺となせるが若しと雖も、抑も亦多少之を仰望せし情ありしを認めざるを得ざる也。

孔子の周に居るや、太廟を拜し、復た金人をも見たり。而してその周に居りしは甚だ短日月なるが如しと雖も、その見聞を廣め、知識を啓發せると決して鮮尠にあらざるに似たり。その周を去るに當つてや、老子之を送つて曰く、吾れ聞



富貴なるもの人を送るに財を以てし仁人は人を送るに言を以てすと吾れ富貴なると能はず仁人の號を竊みて子を送るに言を以てせむ曰く聰明深察にして死に近きものは好んで人を議するもの也博辯廣大にして其の身を危くするものは人の惡を發くもの也人子たるものは以て己を有するとなく人臣たるものは以て己が有するとなしと世家今老子が孔子に對せる此等の言を以て老子の書なる夫の所謂道德經に比するにその旨一として符合せざるものなし然れば老子が孔子に對して此の譏刺のある固より異しむに足らざるを覺ゆる也

蓋し孔子は當時その年齒まさに三十有五少壯有爲の學者として將た禮の達人として名聲嘖々將に旭日の勢あらんとすその謙讓を以て包める眉宇の中自ら意氣軒昂の概なからむや此れ超人的思想を懐ける老子が夫の言ありし所以にして亦老子にあらざれば恐らくはかゝる言を吐き得ざりし所ならむこれと同時に吾人は老子が或は多欲と態度とを去れと云ひ或は聰明深察博辯廣大は死に近く身を危うする所以なりと云へりしもの竊に以爲へらく

こは全く孔子當年に於ける頂門の一針にして孔子も亦恐らくは冷汗その背に津々たるものありしやを覺えずんばあらざる也あゝ超世的思想の泰斗たる老子に會せる禮樂的思想の代表者たる孔子此の時豈に多少の影響を蒙むるとなしとするを得むや吾人は確に異日孔子がその絶大なる人格を就せるその素地實に爰に存せるものなりと謂はんと欲す史記に曰く孔子周より魯に反り弟子益進むと世家是れ孔子の賢明なる周に適いて以來益その人物を砥礪して名聲藉甚なりしが爲めならずや



## 四 孔子の遊齊

## 三桓の叛

魯の昭公二十五年、魯國大に亂る。是れ孔子が魯を去つて齊に遊びたる所以也。是に於いて吾人は魯の三桓の叛を一瞥せざるを得ず。

是れより先き、季平子、魯の國政を擅にす。季公亥、郈昭伯、臧伯等皆事によりて季平子を怨み、之を魯の昭公に讒す。昭公之を信じ、遂に兵を起して季氏を伐つ。左傳に曰く、九月戊戌、季氏を伐ち、公之季平子の弟を門に殺し、遂に之に入る。平子臺に登り、請うて曰く、君、臣の罪を察せず。有司をして臣を討ずるに干戈を以てせしむ。臣請ふ、沂上に於いて以て罪を察せらるゝを待たんと。許さず。費に因はれんとを請ふ。許さず。五乗を以て亡びんとを請ふ。許さず。子家子曰く、君其れ之を許せ。政、これより出づると久し。隱民多く食を取り、之が徒となるもの衆し。日入つて、慝作るとを知るべからず。衆の怒は蓄ふべからず。蓄へて治めざれば、將に蘊さんとす。蘊蓄せば、民將に心を生ぜん、心を生ぜば、同求將に合せんとす。

君必ず之を悔いんと聽かず。郈孫曰く、必ず之を殺せと。公、郈孫をして孟懿子を逆へしむ。叔孫氏の司馬、慶其の衆に言つて曰く、之を若何と對ふるものなし。又曰く、我は家臣也。敢て國を知らず。凡そ季氏の有ると無きと我に於いて孰れか利なりや。皆曰く、季子なければ、是れ叔孫氏なき也。慶其曰く、然らば諸を救はんと。徒を帥ひて以て往くと。昭公二十五年。

かくて叔孫氏先づ季平子を助けしが、後孟孫氏も亦次いで季氏を助けしかば、昭公の軍大に破れ、昭公は終に齊に奔竄するとなり、孔子も亦魯を去りて齊に適きぬ。之を三桓の叛と謂ふ。

## 景公

孔子が魯を去つて齊に適きたるは三桓の叛に基けりと雖も、而もその動機を求むるに、蓋し孔子が夙にその隣國の君、齊の景公を知れるが爲め也。史記に曰く、二十六年、魯の郊に獵す。因つて魯に入り、晏嬰と俱に魯の禮を問ふと。齊世家而して魯の禮を問ふとは孔子に問へるもの也。史記に又曰く、齊の景公と晏嬰と來り、魯に適く。景公、孔子に問うて曰く、昔、秦の穆公、國小にして處、僻なり、其



の覇たるは何ぞや。對へて曰く、秦國小なりと雖も、其の志大なり。處辟なりと雖も、行中正なり。身五刑を擧げて、之を大夫に爵し、縲紲の中に起し、與に語つて三日之に授くるに政を以てす。此れを以て之を取ると、王と雖も可也。其の覇や小なりと。景公説ふと。世家蓋し景公の二十六年は魯の昭公二十年にして、昭公二十五年に至り、魯國の亂るゝや、孔子は遂に齊に適きし也。

孔子齊に適くや、景公政を問ふ。論語に曰く、齊の景公、政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たりと。公曰く、善い哉。信に如し。君君ならず、臣臣ならず、父父ならず、子子ならず、されば粟ありと雖も、吾れ得て諸れ食せんやと。顔淵、朱子集註に之を解して曰く、此れ人道の大經、政事の根本也。是の時、景公政を失ひ、大夫陳氏厚く國に施す。景公又内嬖多くして、太子を立てず。其の君臣父子の間、その道を失ふ。故に夫子之を告ぐるに此を以てすと。景公嘗て孔子の爲人を知れり。今復た親しく政を問へば、一々己が心を刺さるゝが如き痛切の言を以て對へらる。賢明なる景公、焉ぞ大にその説に服せざるを得んや。是れ景公が孔子を用ひんとなし。所以のものならずんばあらず。

あゝ、惜むべき哉。姑息、偷安の晏嬰が爲めに、之を沮止せられんとは、洵に是れ千秋の一大恨事ならずや。

史記に曰く、他日又復た政を孔子に問ふ。孔子曰く、政財を節するに在りと。景公説び、將に尼谿の田を以て孔子を封ぜんと欲すと。晏嬰進んで曰く、夫れ儒者は滑稽にして法に軌すべからず。倨傲にして自ら順ふ。以て下と爲すべからず。喪を崇び哀を遂げ、産を破り葬を厚ふ。以て俗を爲すべからず。游説して乞貸す。以て國を爲むべからず。大賢の息みてより、周室既に衰ふ。禮樂缺けて間あり。今孔子容飾を盛にし、登降の禮、趨詳の節を繁くして、累世其の學を殫す能はず。當年其の禮を究むること能はず。君之を用ひ、以て齊の俗を移さんと欲するは、細民を先きにする所以にあらず。世家とて、之を沮みしに、遂に公も之に惑ひて、孔子を用ひざりし也。あゝ、亦以て春秋の賢者と稱せられたりし晏子が孔子を沮止せしを見るべし。

然るに論語にも亦之に類する語あり。曰く、齊の景公、孔子を待せんとして曰く、季氏の若きは吾れ能はず。季孟の間を以て之を待せんと。曰く、吾れ老いたり。



用ふることも能はずと。孔子行ると。微子皇侃之を解して曰く、景公初め、之を季孟の間に待せんと謂ふと雖も、而も末又悔ゆ。故に自ら吾が老に託して復た孔子を用ひざる也と。而してその末に又悔い、吾が老に託して用ひざりしものは、蓋し晏子が沮止せしによるものならずや。是に於いて吾人は、春秋季世の三賢即ち鄭の子産、吳の季子と並び稱せられたる晏子にして、何故に孔子を沮遏せしかを探究せざるべからず。

## 晏子

晏子名は嬰、夙に節儉力行を以て名を諸侯に顯はす。今その言行を見るに、大に墨家に類す。故に後世の學者、孔子の主義と晏子が節儉力行の主義と根本的に背馳するものあるが爲めに、之を沮遏せるものとなし、専ら墨子非儒篇を引用して、之が説をなさざるは莫し。然れども吾人の見る所のもの、大に之と異なるものなくんばあらず。

抑も孔子の景公に對して、君君臣臣の言を以てしたる眞意は、朱子の集註に明なるが如く、全く陳氏の禍源を婉曲に道破せるものなりし也。然らば孔子を

沮止せる晏子は、陳氏の禍を知らざりしかあ、嬰の賢明にして、焉ぞ之を知らざらんや。若し、之を知れりとせんか、而も之を知りて、尚ほ之が規畫措置をなさざりしは何ぞや。是れ他なし、その消極的性行、全く之を然らしめたるものにあらずや。

晏子が早くも陳氏の禍を知れるは、左傳に明也。曰く、晏子禮を受け、叔向之に従つて宴し、與に語る。叔向曰く、齊其れ何如と。晏子曰く、此れ季世也。吾れ知らず。齊其れ陳氏と爲らん。公その民を棄て、陳氏に歸す。齊舊、四量、豆區釜鐘、四升を豆となし、各其の四を以て釜に登る。釜十は鐘、陳氏三量皆一を登り、鐘は乃ち大なり。家量を以て貸して公量を以て之を收む。山木市に如くも、山に加へず。魚鹽蜃蛤海に加へず。民其の力を參にして、二公に入れ、其の一を衣食にす。公聚、朽蠹して三老凍餒す。國の諸市屨は賤くして踊は貴し。民人痛疾して、或は之を憫休す。其の之を愛すると父母の如くにして、之に歸すると流水の如し。民を獲ると無からんと欲するも、將た焉ぞ之を辟けんや。箕伯、直柄、虞遂、伯戲、四人皆舜の後、陳氏の先、其の胡公の大姫を相て已に齊に在らんと。叔向曰く、然り、吾が公室と



雖も、今亦季世也。昭公三年、是に由つて之を觀れば、晏子は明に陳氏の禍を知れるにあらざや。

否、晏子は明に之を知りて、之を晋の叔向に告げたるのみならず、明に又之を景公に告げたるにあり。韓非子に曰く、景公、晏子と少海に遊び、栢寢の臺に登り、その國を還望して曰く、美なる哉、泱々乎たり、堂々乎たり。後世將に孰れか此を有するものぞ、晏子對へて曰く、其れ田成氏か。景公曰く、寡人此の國を有す。而して田成氏之を有するとは何ぞや。晏子對へて曰く、夫れ田成氏、甚だ齊民を得たり。その民に於けるや、之を上にして爵祿を請ひ、諸れを大臣に行ふや、之に下り、私に斗斛區釜を大にして貨を出し、斗斛區釜小にして之を收む。一牛を殺せば一豆肉を取り、餘は以て士に食せしむ。終歲布帛二を取るを制とし、餘は以て士に衣せしむ。故に市木の價、貴を山に加へず、澤の魚鹽、魚鼈、羸蚌、貴を海に加へず。君重歛して、田成氏厚く施す。齊嘗て大に餓え、道旁餓死せるもの勝げて數ふべからず。父子相牽ゐて、田成氏に趨るもの、生ぜざるを聞かず。故に周秦の民、相與に之を歌つて曰く、謳はん乎、其れ已まん乎、苞えん乎、其れ往いて、田成氏に歸せ

ん乎と。詩に曰く、德女と與にするなしと雖も、式ひて歌ひ且つ舞ふと。今田成氏の德にして、民歌舞し、民德之に歸す。故に曰く、其れ田成氏かと。公泣然として涙を出して曰く、亦悲しからずや。寡人國を有して、田成氏之を有す。今之を爲すと如何。晏子對へて曰く、君何ぞ焉れを患へん。若し君之を奪はんと欲せば、賢を近づけて不肖を遠ざけ、その煩亂を治めて、其の刑罰を緩らし、貧窮を賑はして、孤寡を恤え、恩惠を行ひて、足らざるを給し、民將に君に歸せんとすれば、十田氏ありと雖も、それ君を如何せんやと。外儲説是に、由て之を觀れば、晏子の景公に對する言、縷説至れりと雖も、要するに、孔子が君々、臣々、父々、子々の四言に出でず。否、出でざるのみならず、晏子は君何をか患へんと謂へるに、關せず。復た何ぞ其の處置の緩漫なるや。是れ韓非子が晏子を以て、其の方を知らずと言へりし所以にあらざや。

既に晏子は陳氏に對して、孔子とや、同一意見を懷きぬ。而も孔子を沮止せりしは何ぞや。然るに左傳を按ずるに、復た韓非が言に類するものあり。曰く、齊侯、晏子と路寢に坐す。公歎じて曰く、美なる哉、室、其れ誰か此れを有するか。晏子



曰く、敢て問ふ何の謂ひぞや。公曰く、吾れ以て徳に在りと爲す。對へて曰く、君の言の如きは其れ陳氏か。陳氏大徳なしと雖も、而も民に施あり。豆區釜鐘の數、其の之を公に取るや薄く、其の之を民に施すや厚し。公厚く歛めて、陳氏厚く施す。民之に歸せり。詩に曰く、徳女と與にするとなしと雖も、式もひて歌ひ且つ舞ふと。陳氏の施、民之を歌舞す。後世若しく情り、陳氏にして亡びざれば、國、其の國ならんのみと。公曰く、善い哉。是れ若何すべき。對へて曰く、唯だ禮以て之を已むべし。禮に在つては、家の施は國に及ばず。民遷らず、農移らず、工賈變ぜず、士濫せず。官滔せず。大夫、公の利を收めずと。公曰く、善い哉。我れ能はず。吾今にして而る。後禮の以て國を爲むべきを知ると。對へて曰く、禮の以て國を爲むべきや久し。天地と並ぶ。君令し、臣共し。父慈に、子孝。兄愛し、弟敬。夫和し、妻柔。姑慈に、婦聽。ふは禮也。君令して違はず、臣共して貳せず。父慈にして教へ、子孝にして箴しめ、兄愛にして友、弟敬にして順。夫和して義、妻柔にして正。姑慈にして從、婦聽にして婉なる。禮の善物也と。公曰く、善い哉。寡人今にして後此れ禮の上ぶべきを聞ける也。と對へて曰く、先王、天地に稟くる所以て、其の民を爲むる也。是を以て先王之

を上ぶと(昭公二十六年)

以上の文を以て之を韓非子に比するに、是れ全く同一の傳説なれども、その晏子が景公に對へたる後半の言は、之を韓非子の文に比せば、層一層に孔子の説に近邇せるを見るべし。蓋し晏子が説ける禮なるものは、全く孔子が本領にして、孔子が景公に對へたる夫の君々臣々の大義の言も、要之に歸著するものなれば也。

以上の如く、左傳及び韓非子に記載せる文に因て之を見れば、晏子が孔子を沮みたる原因は、決してその學說主義の背馳する所あるが爲めならざると略ぼ察し得べし。然らば抑もその原因は何くに在りや。

意ふに晏子は節儉力行主義を以て世に名ある程なれば、その行事は大に峻嚴なるものありしならん。然れども其の節儉力行主義なるものは、元消極的にして、積極的進取的にあらず。されば從つて中に在りて守るは嚴ならんも、外に出てい進んで爲さんとするは、その長ずる所にあらざるべし。然るに孔子齊に來るや、その年齢まさに三十有五、その性格極めて溫良なりと雖も、亦甚だ進取的



活動的の性に富み、殊に事大義名分に關しては斷じて行はんとする革新的の氣概あり。是れそも、兩者の相容れざる主要なる原因にあらずや。

抑も延陵の季子は、春秋に於て禮樂風俗を視て能くその國の隆替を知れるものなりと稱せられし人也。彼れ上國に來り、齊に至るや、晏子に語りて謂へるにあらずや。曰く、齊の政將に歸する所あらんとす。子速に邑と政とを納れ、以て難を免れよと。而して晏子はその名の示すが如く、晏然として徒に泣言を吐き、僅に樂高の難を免れたるのみにして、その前後の規畫處置を爲さず、陳桓子に因つて、辛うじてその身を保ちしにあらずや。是れ晏子が性の優柔不斷を示すものにあらずして何ぞや。左傳に曰く、齊の公孫竈卒す。司馬竈、晏子に見えて曰く、又子雅を喪ふと。晏子曰く、惜い哉。子旗は免れず。殆い哉。姜族弱く、嬖將に始めて昌ならんとす。二惠の競爽は猶ほ可也。又一介を弱くす。姜其れ危い哉。昭公三年、あゝ復た是れ徒にその禍を知るも、空しく之を嗟歎するのみにあらずや。苟も進取活動の氣概あり。公家あるを知つて、私家あるを思はざる。革新家なりしならんには、徒に嗟歎するのみにして已むべけんや。然るに晏子に於ては、

之が規畫を爲さざるのみならず、更に己が心竊に排せんとする陳氏に、陽には従つて己が地位を鞏固にせんとするすらあるに似たり。蓋し當時齊に於いては、陽には景公、陰には陳氏、兩々隱然として相對し、その勢力の消長を暗々の裏に争ひしは、蔽ふべからざる事實也。従つて晏子が景公の信任を得るは、陳氏の極めて好まざる所也。而して又晏子が陳氏の反感を沾ふも、亦是れ晏子の一身の上利ならざる所也。是に於いてか、現狀維持を惟れ事とする晏子、奚ぞ景公の信任を得ると同時に、陳氏の鼻息を窺はざるを得むや。

晏子が晋より歸るや、景公、晏子の宅を湫隘なりとして、爽塏の地を遣んで宅を新にせんとす。晏子辭して止まず。而も景公之を信ずるとの厚き之を許さず。遂に宅を新にして居らしめんとす。然れども晏子尙ほ辭し、遂に舊宅に復へる。景公尙ほ之を許さず。是れ以てその信任の厚かりしを見るべし。然るに晏子の身を保するに、明哲なる否。姑息にして偷安なる己自ら如何に辭するも、聽るされざれば、晋人叔向にまで謂つて、國を盜まんとすと歎ぜし。其の舌の根の未だ乾かざるに、早くも其の嗟歎せし陳氏によりて、その反感の禍を免れん。



と計りしは何ぞそれ怯懦の甚しきや。左傳に曰く、晏子の晋に如くに及んで、公その宅を更む。反れば則成る。既に拜す。乃ち之を毀つて里宅を爲くり、皆其の舊の如くす。卒に其の舊宅に復す。公許さず。陳桓子に因つて以て請ふ。乃ち之を許すと。昭公三年以て如何に晏子が陳氏に氣兼ねしたりしかを見るに足らん。又従つて景公も如何に一步を陳氏に譲れるかを思ふことを得べけん也。

晏子が現状維持惟れ事として更に革新的の氣魄なかりしは、恰も王氏の禍を知つて謂はざりし漢の張禹に似たりと謂ふべし。然るに孔子に至つては然らず。苟も事大義に關し、名分に屬するものに至つては斷々乎として避けざる氣概あり。論語に曰く、陳成子簡公を弑す。孔子沐浴して朝し、哀公に告げて曰く、陳恒其の君を弑す。請ふ之を討たんと。公曰く、夫の三子に告げよと。孔子曰く、吾れ大夫の後に従ふを以て敢て告げずんば、あらざる。君曰く、夫の三子者に告げよと。三子に之いて告ぐ可かず。孔子曰く、吾れ大夫の後に従ふを以て敢て告げずんば、あらざる也。憲問

又左傳に曰く、甲午、齊の陳恒其の君壬を舒州に弑す。孔丘三日、齊し、齊を討た

んとを請ふと。三たびす。公曰く、魯、齊より弱めらるゝと久し。子之を伐たんとす。るも、將た之を若何と曰く、陳恒其の君を弑するや、民の與からざるもの半なり。魯の衆を以て齊の半に加へば、克つべき也と。公曰く、子季孫に告げよと。孔子辭す。退いて人に告げて曰く、吾れ大夫の後に従ふを以て敢て言はずんば、あらざると。哀公十四年、是れ孔子が晩年の事にして、その事復た隣國に起りし事件なるに關せず。孔子は尙ほ之を討たんとを奏せるもの也。その晩年に於いてすら、尙ほ此の氣概あり。若し、それ壯年にして己れ自ら齊國に用ひられ、厚く景公の信する所となりしならんには、奚ぞ陳氏が跋扈跳梁を容るべきものならんや。是れ姑息偷安の晏子と活動進取の孔子と朝を同じうして樹つべからざる所以にあらずや。



## 五 孔子の相事

陽虎

孔子齊より魯に反るや、敢て仕へず、専ら育英の業に従事しき。論語に曰く、或は孔子に謂つて曰く、子奚ぞ政を爲さざるや、子曰く、書に孝を云ふと、惟た孝あり、兄弟に友なり、政あるに施すと云へり。是れ亦政を爲すなり、奚ぞ其れ政を爲すのみを爲さんやと。爲政以て仕へずして、孝悌の道を以てその徒に授けたりしを見るべし。論語に又、子貢曰く、斯に美玉あり、匱に韞めて諸を藏す。善賈を求めて諸れを沽らんか、子曰く、之を沽らん哉、之を沽らん哉、我は賈を待つももの也。と。子罕その風雲の機の至れるを待てるを見るべし。

然るに史記に曰く、魯の大夫より以下皆僭して正道に離く。故に孔子仕へず、退いて詩書禮樂を修め、弟子彌よ衆し、遠方より至つて業を受けざるは莫しと。世家あり、是れ一は孔子が其の徒に教を授けたるを見るべく、又一は門生多きを加へて、その名聲愈藉甚なりしを見るべき也。

蓋し昭公三十二年に公晋の乾侯に薨じ、定公位を襲ふ。定公五年に季平子も亦卒して其の子季桓子立つ。是に於いてその家臣陽虎魯の國政を擅にするに至りぬ。

左傳に曰く、季寤季桓子の弟公鉏極桓子が族子公山不狃費の宰皆志を季子に得ず。叔孫輒叔孫の庶子叔孫氏に寵なし。叔仲志を魯に得ず。故に五人陽虎に因る。陽虎三桓を去り、季寤を以て季氏に更へ、叔孫輒を以て叔孫氏に更へ、己れ孟氏に更らんと欲すと。定公八年以て陽虎が夫の不平の徒と結托して、如何にその怪腕を揮はんとせしかを見るべし。

是に於いてか、大義名分の念に厚き孔子、如何てかゝる光景を見て、その跳梁を憐又慨せざるを得ざらむや。論語に孔子曰く、祿の公室を去ると、五世政大夫に逮ぶと、四世故に夫の三桓の子孫微なりと。季氏又論語に子曰く、天下道あれば禮樂征伐天子より出づ、天下道なければ諸侯より出づ、諸侯より出づる蓋し十世にして失はざるは稀く、大夫より出づる五世に失はざるは稀く、陪臣國命を執る三世にして失はざるは稀しと。季氏以て孔子が如何に陪臣陽虎の國命



を竊まんとしたるを惡みしかを見るべし。

然るに彼の陽虎もさる者即ち孟子に富を爲せば仁ならず仁を爲せば富ま  
ずと。滕文公公々然と斷言する程の男子なり。さればその聲名四海に洋溢せる  
孔子を籠絡して己が藥籠中の物と爲さんと思ひ立ちて、孔子を招見せんと欲  
す。論語に曰く、陽貨孔子を見んと欲す。孔子見えず。孔子に豚を歸くる。孔子その  
亡きを時として往いて之を拜す。諸れに塗に遇ふ。孔子に謂つて曰く、來れ。予爾  
と言はん。曰く、其の實を懐いて其の邦を迷はず。仁と謂ふべきか。曰く、不可なり。  
事に従ふとを好んで亟時を失ふ。知と謂ふべきか。曰く、不可なり。日月逝かん。我  
と共にせずと。孔子の曰く、諾。吾れ將に仕へんとすと。陽貨陽虎はその瑰麗の辭  
有力の語を以て孔子を誘ひし。此の如し。されば流石の孔子も最もなりとて  
合槌を撃ち、僅に魯君に事ふるの意を漏らして之を避けられぬ。

孟子は此の時の消息を一層明にして曰く、陽貨孔子を見んとして禮なきを  
惡む。大夫士に賜ふとあり。其の家に受くるとを得ざれば則ち往いてその門に  
拜す。陽貨孔子の亡きを矚ひ、孔子に蒸せる豚を饋る。孔子も亦其の亡きを矚ひ

て往いて之を拜す。是の時に當り陽貨先きにす。豈に見ざるを得むやと。滕文公  
以て陽虎人を羅致せむとするその手段の巧妙にして、敏活なりしを見るべき  
に、あらずや。

然るにその後、陽虎の凶暴益甚だしく、定公八年に至り、遂に季寤、叔孫輒等と  
計つて畔きぬ。左傳に曰く、陽虎、譚陽關に入り、以て叛くと。定公八年然れども孟  
孫氏の家臣、公斂處父、豫め之を窺知して之に備へしかば、陽虎の敗となりぬ。左  
傳に曰く、壬辰、將に季子を蒲圃に享して、之を殺さんとす。都車、都邑の兵車を以  
て戒めて曰く、癸巳に至らん。成の宰、公斂處父、孟孫に告げて曰く、季氏都車を戒  
む。何の故ぞや。孟孫曰く、吾れ聞かずと。處父曰く、然らば亂也。必ず子に及ばん。先  
づ諸れに備へよと。定公八年、是に於いて公斂處父、陽虎と棘下に戰つて大に之  
を破り、陽虎復た敗れて齊に奔り、亂全く平ぎぬ。

#### 公山不狃

前門虎を禦げば、後門の狼とは、蓋し魯國當時に於ける國狀の謂ひ也。先きに  
漸く陪臣陽虎が亂平ぎて、今復た季氏に公山不狃の叛あり。史記に曰く、定公九



年陽虎勝たずして齊に奔る。是の時孔子年五十。公山不狃費を以て季氏に畔き、人をして孔子を召さしむ。孔子道に循ふこと彌久し、温々として試みる所なく、能く己を用ふる莫し。曰く、蓋し周の文武、豊鎬に起つて王たり。今費小と雖も、儻くは庶幾からん乎と往かんと欲すと。世家抑も孔子は陽虎の召を廻避したるにも拘らず、公山不狃の招きに、應ぜんとしたるこそ、不思議なれ。論語に曰く、公山弗擾、費を以て畔きて召す。子往かんと欲す。子路、説ばずして曰く、之れ末くんば已まん。何ぞ必ずしも公山氏に之れ之かんやと。子曰く、夫れ我を召すものは、豈に徒ならんや。如し我を用ふるものあらば、吾れは其れ東周を爲さんかと。陽貨然るに孔子は如何なる考なりしにや。卒に行かざりき。

意ふに不狃の費に據り、孔子を招かんとするや、恐らくは季氏に畔くは、公室の爲めなりとの辭を以てしたるものなるべし。是れ孔子が行かんとしたる所以に、あらずや、而してその行かざりし所以のものは、公山不狃の到底公室に力を竭くすべきものにあらざるを悟れるが爲めに、あらざるか。

司寇

謝安出でずんば天下の蒼生を如何せんとは、當時の魯國に於ける孔子の名望なりき。荀子に曰く、仲尼將に司寇と爲らんとす。沈猶氏敢て朝に其の羊に飲ましめず。公慎氏其の妻を出し、慎潰氏境を踰えて徒つる。魯の牛馬を粥ぐもの買を豫にせざるは、必ず蚤に正して以て之を待すれば也。闕黨に居るや、闕黨の子弟必く分あらざると、罔し。親あるものは多きを取るは、孝弟を以て之を化すれば也。儒效篇是に於いてか、定公孔子を抜いて司寇と爲しぬ。史記に曰く、定公、孔子を以て中都の宰となす。一年にして四方皆之に則る。中都の宰より司寇と爲し、司空より大司寇と爲すと。世家以て孔子が如何に累進して寵用せられしかを見るべし。

然らば司寇たりし當時に於ける孔子の活動や如何。説苑に曰く、孔子魯の司寇となり、獄を聽くに必ず師斷すと。至公又孔子家語に曰く、孔子魯の司寇となり、獄訟を斷ずるに、皆衆議を進めて、之を問うて曰く、子奚若と以爲る、某何若と以爲へると。皆曰く、云々と。是の如くにして然る後に、夫子曰く、當に某子に従ふべし。是に幾しと。好生以て孔子が判獄の公平にして私なかりしを察すべし。



惟に然りしのみならず、孔子は更に積極的に當時の糺政を釐革矯正せんと爲し、也。荀子に曰く、孔子の魯の司寇と爲るや、父子訴ふるものあり、孔子之を拘し、三月別たず、其の父止めんとを請ふ。孔子之を舍す。季孫之を聞いて説ばずして曰く、是の老や予を欺けり。予に語つて曰く、國家を爲むるに必ず孝を以てすと。今一人を殺して以て不孝を戮せんに、又之を舍すと。冉子以て告ぐ。孔子慨然として歎じて曰く、嗚呼、上之を失つて下之を殺す、其れ可ならんや。其の民を教へずして、其の獄を聽くは、不辜を殺す也。三軍大に敗るゝは斬るべからず。獄狂治まらざるは刑すべからず。民に在らざるが故也。令を慢にして、誅を謹にするは賊也。今生や時あり、斂や時なきは暴也。教へずして成功を責むるは虐也。此の三者を已めて、然る後に刑即くべき也と。(宥坐篇)

孔子曰く、苛政は虎より猛しと。檀弓以て孔子が如何に當時の弊政を革めんとしたりしかを察すべし。然り、既に此の氣概あり、焉ぞ事實の之を徵すべきものなからんや。左傳に曰く、秋七月癸巳、昭公を墓道の南に葬る。孔子の司寇と爲るや、溝して諸れを墓に合すと。定公元年、杜預之に註して曰く、臣君を貶するの

なきを明にすと。又以て著々として改革の實を挙げしを見るべきにあらずや。孔子司寇と爲るや、事々に公正を執りて進みしが、その私家に於いても亦公正を失はざりき。論語に曰く、原思之が宰となる。之に粟九百を與ふ。辭す。子曰く、母れ以て爾が隣里郷黨に與へんかと。雍也。朱子の集註に曰く、原思は孔子の弟子、名は憲、孔子魯の司寇たりしとき、思を以て宰と爲す。粟は宰の祿也と。蓋し原憲は性廉潔にして、好んで清貧に甘なひし人也。史記に曰く、孔子卒し、原憲亡れて草澤の中に在り。子貢衛に相たり、駟を結び、騎を連ね、藜藿を排して、窮閭に入り、過ぎて原憲に謝す。憲徹れたる衣冠を撮めて、子貢に見ゆ。子貢之を恥ぢて曰く、夫子豈に病めるか。原憲曰く、吾れ之を聞く、財なきもの之を貧と謂ひ、道を學んで行ふこと能はざるもの之を病と謂ふ。憲が若きは貧也、病めるにはあらず。也と。子貢慙ぢ、慄ばずして去り、終身其の言の過てを恥ぢきとぞ。(列傳)孔子は此の若き清廉の人を以て己が家邑の宰となせるなりき。

孔子は此の如く、朝に事ふるや、公に於いても、將た私に於いても公正を持して動かざりければ、早くもその教化は顯はれぬ。韓非子に曰く、仲尼政を魯に爲



し、道遺を拾はずと。内儲説又淮南子に曰く、孔子魯の司寇となりて、道遺を拾はず。市賈豫買せず。田漁皆長に譲り、班白負戴せざるは、法の能く致す所にあらざる也と。泰俗訓此等の言蓋し多少の潤色ありて、誇張の嫌なきにあらざると雖も、とにかく教化の行はれたるものあるにやと思はるゝ節なきを得ざる也。

夾谷の會

世は春秋の叔世にして、齊桓晋文の覇圖も今は空しく昔の事となりぬ。此の時に當つてこれが覇業を恢復せんと爲しゝものを齊の景公と爲す。是に於いて齊は晋に對抗し、魯の定公八年に晋を盟主とせる魯をも攻めき、弱小の魯齊の壓迫に堪へず、定公十年遂に晋に畔いて齊と和を講ず。是に於いてか夾谷の會起る。

左傳に曰く、十年春、齊と平ぐ。夏、公、齊侯に祝其に會す。實は夾谷也。孔丘相く、黎彌、齊侯に言つて曰く、孔丘禮を知れども勇なし。若し萊人をして兵を以て魯侯を劫かさば、必ず志を得んと。齊侯之に従ふ。孔丘公を以て退く。曰く、士之を兵せよ。兩君好を合す。而るに裔夷の俘兵を以て之を亂るは、齊君の諸侯に命ずる所

以にあらざる也。裔、夏を謀らず。夷、華を亂らず。俘、盟に干からず。兵、好に逼らず。神に於いて不祥となし、徳に於いて愆義となし、人に於いて失禮となす。君必ず然かせざれと。齊侯之を聞き、遽に之を辟る。將に盟せんとす。齊人載書に加へて曰く、齊の師竟を出て、而して甲車三百乗を以て、我に従はざるものは此の盟の如きあらんと。孔丘、茲無還をして揖して對へしめて曰く、而我に汝陽の田を反さざれば、吾れ以て命に共するものも亦之の如けん。と。齊侯將に公を享せんとす。孔丘、梁丘據に謂つて曰く、齊魯の故こと吾子何ぞ聞かざらんや。事既に成ぐ。而して又之を享す。是れ執事を勤する也。且つ犧象は門より出でず。嘉樂は野合せず。饗して既具するは、是れ禮を棄つる也。若し其れ具せざれば、秕稗を用ふる也。秕稗を用ふるは、君辱かしめり。禮を棄つるは、名惡し。子盍之を圖らざるや。夫れ享は徳を昭にする所以也。昭にせざれば、其れ己むに如かずと。乃ち享することを果さず。齊人來つて、郟謹、龜陰の田を歸へすと。(定公十年)

意ふに夾谷の會は、表面上齊魯兩國俱に同等の權利を保有せしが如きも、齊の有司が常に高壓的手段を以て魯公に要めんとするを見れば、事實上に於いて



ては、大に懸絶せしものありしならむ。然るに孔子は斯る際に處して優然として懐らず。その行動一に消極的に將た所動的なりしにもせよ、一髮千鈞の魯をして九鼎大呂よりも重からしめたるものは、是れ豈に孔子が外交上に於ける一大成功事ならずや。

今それ左傳の文を按ずるに、夾谷の會に於ける齊人の高壓的手段には、凡そ三箇の危難を潜在せり。即ち兵力手段、文書手段、響應手段是れ也。兵力手段は一舉して魯公の膽を奪はんとせるもの。文書手段は、土地を割かんとしたるもの。響應手段は、燕宴に乗じて魯公を邀せんとしたるもの。若しそれ齊人が此等の手段にして一行はれしめんか、魯公の安危、國權の消長に關する大なりと謂はざるべからず。然るに儀禮に通じ、典故に明なる孔子は、優然又悍然として、此の難關を踏破して、緯々たりしその手腕や、亦以て孔子が外交辭令に巧なりしかを思ふべきにあらずや。

凡そ實力の伴はざる交際は、個人に於いても、國際に於いても、往々屈辱を免れざるもの也。孔子は此の點に於ても用意周到なりしは、左傳の、孔丘公を以て

退く。曰く士之を兵せよと定公十年謂へる語を見ても明なり。然るに史記に至つて之を説くこと最も詳也。曰く定公十年春、齊と平ぐ。夏、齊の太夫黎錡景公に言つて曰く、魯孔丘を用ひ、其の勢齊を危ふからしめんと。乃ち使をして魯に告げ、好會を爲し、夾谷に會せしむ。魯の定公且に乘車を以て好に往かんとす。孔子相事を攝す。曰く、臣聞く、文事あるものは必ず武備あり、武事あるものは必ず文備ありと。古は諸侯疆を出づるに必ず官を具して以て從ふ。請ふ。左右の司馬を具せんと。定公曰く、諾と。左右の司馬を具して齊侯と夾谷に會すと。世家以て孔子が豫め不虞に備へんが爲め、兵を具して能く齊人の高壓的手段に對抗せりしかを見るべきにあらずや。

#### 毀三都

外交上に成功せし孔子の威望は、實に魯國を風靡せしものありしならん。是れ季桓子が主としてその封土返還の策に賛せし外因にあらざるか。然れども是れ畢竟するに外因のみ必ずやその樞要なる原因なかるべからず。

抑も魯は宣公より以來、成公、襄公、昭公俱に皆虚器を擁するに過ぎず。實權は



夙に三桓の手に歸し、殊に季孫氏最も跳梁を極む。然れども季孫氏も、季文子、季武子、季平子を経て季桓子に至るや、是れ亦徒に執政の名あるのみにして、その實權は陪臣の手に歸せり。他の叔孫氏、孟孫氏も亦然らざるは莫し。是に於いて陪臣の跋扈日に甚だしくして、三子が都邑たる費、郕、成は皆その陪臣の横領する姿となり、長袖優柔の三子皆之が處置に苦まざるは莫し。左傳に曰く、季平子立つ、而して南蒯、費の宰に禮あらず。南蒯、子仲に謂ふ、吾れ季子を出して、其の室を公に歸せん。子其の位に更れ、我費を以て公の臣とならんと。子仲之を許すと。(昭公十二年)南蒯遂にその年を以て叛し、季平子累年之に克つを能はざりき。降つて定公の時に至り、侯犯が郕を以て叛きしが如きは最もその措置に苦めるもの也。左傳に曰く、侯犯、郕を以て叛く。武叔懿子、郕を圍みて克たず。秋、二子齊の師と復た郕を圍みて克たず。叔孫、郕の工師、驅赤に謂つて曰く、郕は唯だ叔孫の憂のみにあらず。社稷の患也。將に之を若何と。(定公十年)以て陽虎以下陪臣が強梁の甚しかりしを見るべし。

既に三桓はその陪臣の處置に苦めり。是れ孔子が三都を墮つおとしの策の容易に

三桓に聽かれし主要なる内因ならずんばあらず。蓋し孔子が公室の權力を恢弘せんとするや久し、而して以爲へらく、公家の權力を皇張せんと欲せば、先づ三桓の土を削らざるべからず。三桓の土を削らんとせば、先づ陪臣の勢力を抑壓せざるべからず。而して陪臣の勢力を抑壓するは、三桓の權力を抑ふる所以にして、三桓の權力を抑ふるは、公家の權力を恢弘する所以也。是に於いて孔子は先づ季桓子に説くに封土返還の策を以てしたるに、幸に季子は率先して之に従ひしかば、延いて他の叔孫、孟孫の兩氏に及ぼさんとし、若し之を遵奉せざるに於いては、大義名分を正して、之を征討せんとしたる所以也。

抑も孔子の門人にして、季氏及びその都邑費に宰たらんとせしもの數人あり。而して是れ皆孔門の俊髦びんぼうにあらざるは莫し。季子が閔子騫びんせんを以て費の宰となさんとしたるが如き、雍也おん或は子羔かうの費の宰となりしが如き、先進或は冉有なんの季子が宰となれるが如き、先進或は仲弓の季氏が宰となれるが若き、子路或は子路の季子が宰となれるが若き、季氏皆是れ然らざるは莫し。然れども仲弓は素徳行の君子人にして、未だ北方の強を語るべからず。冉有に至つては徒に



季氏に阿附して聚斂を事とする。嗚、是れ復た未だ公事を語るに足らず。然れば孔子が此の三都を墮つ政策を輔弼して能く封土を返還せしむるの業を全うせしめんとするものは、それ唯だ剛勇にして果斷なる子路にあるか。史記に曰く、十二年癸卯、仲由をして季子の宰となし、三都を墮ち、その甲兵を收めしむと、(魯世家)以て孔子が子路を抽擢して季氏を弼けしめ、かくて己が政策を實施せんとしたりし深意のある所を見るべし。

然れども惜むべき哉。孔子が政策は著々として歩武を進め、一大奏功あらんとせしに、内に季孫が子路を疎外するあり、外に公斂處父の孟孫を勸めてその政策を沮害するあり、内外相待ちて遂に一大頓挫を來せしこそ、千秋の恨事なれ。

論語に曰く、公伯寮、子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て告げて曰く、夫子(季孫の)と固に志を公伯寮に惑はざるあり。吾が力猶ほ能く諸れを市朝に肆さんと。子曰く、道の將に行はれんとするも命也。道の將に廢せられんとするも命也。公伯寮其れ命を如何と。憲問以て三桓の筆頭たりし季孫氏の心、既業に動けるもの

ありしを見るべし。

成の宰、孟孫氏の臣たる公斂處父は、精悍にして機智に富めりし人也。嘗て蒲圃の役に陽虎を追ひ、季桓子を殺して、獨り孟孫氏の強を圖らんとせり。左傳に曰く、虎曰く、魯人余が出だせるを聞かば、死を徵くより喜ばん、何を余を追ふ暇あらんと。從者曰く、嘻、速に駕せよ。公斂陽在りと。公斂陽之を追はんとを請ふ。孟孫許さず。陽桓子を殺さんと欲す。孟孫懼れて、之を歸へすと。(定公八年)以て公斂處文なるもの、其の志の敢て小ならざりしを見るべし。

公斂處父は大に機智に富める人也。然らば彼れ争てか三都を墮つ政策なるもの、自ら孟孫氏の勢力を殺ぐ所以のものなるを察知せざらんや。又焉ぞ孟孫氏の無勢力は延いて己が無權力を來す所以なるを知らざらんや。左傳に曰く、仲由季氏が宰となり、將に三都を墮たんとす。是に於いて叔孫、郈を墮ち、季氏將に費を墮たんとす。公山不狃、叔孫輒、費人を帥ゐて魯を襲ふ。公と三子と季氏の宮に入り、武子の臺に登る。費人之を攻む。克たず。公の側に及ぶ。仲尼、申句須、樂頤に命じ、下つて之を伐たしむ。費人北ぐ。國人之を追ひ、諸れを結蔑に敗る。二子



齊に奔る。遂に費を墮つ。將に成を墮たんとす。公歛處文、孟孫に謂ふ、成を墮たば齊人必ず北門に至らん。且つ成は孟孫の保障也。成なければ是れ孟氏なき也。子知らずと僞れ。我れ將に墮たざらんとすと。冬十二月、公成を圍みて克たずと。定公十二年、以て孟孫氏已に孔子に従へるに、公歛處父が爲め沮遏せられ、遂にその事就らざりしを見るべきにあらずや。

あゝ、孔子陪臣の權を抑へんとして却て陪臣に沮まれ、事志と齟齬して、長に公家の權を恢弘することを得ざりし其の心事、洵に察すべきにあらずや。然れども人は萬能なると能はず、事の爰に至れる豈に亦偶然ならんや。是れ抑も孔子がその門生たりし孟孫を以て與みし易しと爲して、その下に公歛處父の如きものあるを眼中に置かざりし爲めならず。孔子曰く、吾れ季孫の憂顛輿に在らずして、蕭牆の内に在るとを恐ると。季氏豈に圖らんや。自言の轍に陥り、その憂三都にあらずして、公歛處父にあらんとは、あゝ亦命なる哉。

誅少正卯

孔子は周公を崇拜し甚だしい哉、吾れ衰ふると久し、吾れ復た夢に周公を見

ずと述而謂へるの人也。而して周公は何人ぞや。即ち禮樂を制し、造言の刑を作りし人にあらずや。論語に曰く、異端を攻むるは斯ち害なるのみと。爲政あゝ、周公を理想とせる孔子は、周公の如く亦晩年に書を叙し、詩を刪り、樂を正せり。世家此の如き孔子焉。異流の學派を禁止するを欲せざらんや。史記に曰く、定公十四年、孔子年五十六、大司寇より相事を攝行す。魯の大夫、政を亂るもの少正卯を誅すと。世家果然孔子は相事を攝行するの七日にして、異端者少正卯を誅戮せりき。

荀子に曰く、孔子魯の攝政となり、朝すると七日にして、少正卯を誅す。門人進み問うて曰く、夫れ少正卯は魯の聞人也。夫子政を爲して始めて之を誅するは失なきを得むやと。孔子曰く、居れ吾れ女に其の故を語らん。人に惡なるもの五あり。而して盜竊與からず。一に曰く、心達にして險。二に曰く、行辟にして堅。三に曰く、言僞にして辯。四に曰く、記醜にして博。五に曰く、非に順つて澤。此の五者、人に一あれば君子の誅を免るゝを得ず。而も少正卯之を兼ね有す。故に居處以て徒を聚め、群を成すに足り、言談以て邪を飾り、衆を營はすに足り、強以て是に反



して獨立するに足る。此れ小人の傑雄也、誅せざるべからず。是を以て湯は尹摎を誅し、文王は潘止を誅し、周公は管叔を誅し、太公は華仕を誅し、管仲は付里乙を誅す。此の七子のもものは皆世を異にして心を同じうす。誅せざるべからず。詩に曰く、憂心悄悄として、群小に慍らると、小人群を成す。斯れ憂ふるに足ると。宥坐篇、荀子が此の文に據りて、少正卯は派を立て、徒を聚めて、禮樂思想に反せしものなるを察し得べし。

漢の王充は、論衡に於いて、稍之を明にして曰く、少政卯魯に在り、孔子の門と並ぶ。三盈三虛、唯顔淵のみ去らず。顔淵獨り孔子の聖なるを知れば也。夫の門人孔子を去つて、少政卯に歸す。徒に孔子の聖なるを知る能はざるのみならず、又少政卯を知ると能はず。門人皆惑ふ。子貢曰く、夫れ少政卯は魯の聞人也。子政を爲す。何を以て之を先きにせしや。孔子曰く、賜退け、爾の及ぶ所にあらずと。講瑞是に由つて之を觀れば、少正卯なるものは一派の有力なる學者なりしとは明なりと謂ふべし。然れども如何なる人物にして、如何なる説を立てしやは知ると能はず。吾人は空しく消極的に孔子流の學者にあらざりしとを知るのみ。是

に於いて、か吾人は孔子が異學に對する思想の雅量に乏しく、而もその識見の狭窄なるを疑ひ、且つ憾みとせざるを得ざる也。是れをも、門人子貢の徒の大に疑へる所以にあらざるか。

挂冠

近くは少正卯を誅して、識者の非難を沾ふあり。先きには三都を毀ちて、其の政策の成らざるあり。大義名分に明にして、職責任務を重しとする孔子、焉ぞ晏如として、廟堂の上に留まるを得むや。

是に於いてか孔子は遂に魯を去りぬ。論語に曰く、齊人女樂を歸くる。季桓子之を受け、三日朝せず。孔子行ると。微子史記に又曰く、孔子政を興り聞き、三月にして魯國大に治まる。齊人女樂を歸つて以て之を沮む。季桓子之を受け、郊して。臚俎を大夫に致さず。孔子行んぬと。世家蓋し以上は史記の孔子世家の主要を摘みて記載せるものなるが、司馬遷は孔子か司寇としての治績を三月にして大に治まると誤り傳へて之を誇張せしものならんも、その臚俎の爲めに行りしは疑ふべからざる事實也。孟子曰く、孔子魯の司寇となり、用ひられず、従つて



祭る。膳俎べんそ至らず。冕みを脱ぬかずして行る。知らざるものは、以爲へらく肉の爲めなりと。其の知れるものは、以爲へらく禮なきが爲め也と。乃ち孔子微罪を以て行らんと欲すと。告子以て膳俎の爲めに去りしを見るべし。是れ蓋し孟子の謂へるが如く、禮なきを見て去れる所以也。但し孟子が孔子微罪を以て行らんと欲すと謂へるは、是れ後世の儒者氣質と同じく、孔子を崇拜せるの餘、之を曲庇せんとしたる言ならずばならず。

孟子に又曰く、孔子の齊を去るとき、漸すすを接けて行り、魯を去るとき、曰く、遅々として吾れは行る也と。萬章意ふに、孔子三都を毀たんとして成らず、又少正卯を誅戮して多少の非難を被むる是に於いてか嘗て夾谷の會より歸れる政治的名望は頓に衰へ、定公及び季子の信も亦昔日の如くならざるものあれば、夙に致仕の心を懐けるものならんも、而も魯は父母の國也、又一たび廟堂に立ちて、稅政を釐革せんと勤めしもの、今若し去らば復た時機の來らざるべきを思ひ、その衷心實に忡々たるものありしならん、是れ孟子か或は用ひられずと謂ひ、或は遅々として行れり、と謂ふ言を以て略ほ察すべきにあらずや。

六 孔子の周遊

孔子既に志を魯に得ず、是に於いてか慨然として故國を辭し、所謂孔席こうせき綆きんなるに遑なく、大義を天下に暢べて、回瀾を既倒に歸さむと欲す、あ、何ぞ志の高且つ大なるや。

孔子定公十三年に魯を去り、哀公十一年再び魯に還るまで、四方を漂浪すること、凡そ十四年、その足跡を印せし地、凡そ十國、所謂衛陳匡宋蔡葉曹蒲鄭楚是れ也、而して衛に居ること五回、陳に行きしこと三次、將に適かんとして果さず、りしものは晋の國是れ也、その最も困頓流離の苦を嘗めしものは陳蔡宋鄭匡の地と爲す。

衛

孔子が魯を去りて初めて行きし國は衛にして、數を重ねしも、亦衛の地也、論語に曰く、子衛に適く、冉有僕たり、子曰く、庶あはい哉、冉有曰く、既に庶あはし、又何をか加へん、曰く、之を富ますさん、曰く、既に富ますば、又何をか加へん、曰く、之を教へんと、



(子路)失望を以て魯を去りし孔子、既に衛の境に入りて先づ此の語を發す。その前途に於いて有望の念を懷きしや知るべし。

孔子が衛に在るや、顔雠由及び蘧伯玉の家<sup>に</sup>寄寓せり。史記に曰く、衛に適き、子路の妻の兄顔濁鄒か家を主とすと(世家)又曰く、衛に還り、蘧伯玉の家を主とすと(世家)但しその子路の兄とは誤傳也。孟子に曰く、萬章問うて曰く、或は謂ふ、孔子、衛に於いては癡疽<sup>を</sup>を主とし、齊に於いては侍人瘠環<sup>を</sup>を主とすと、諸れありや。孟子曰く、否、然らず。事を好むもの、之を爲せる也。衛に於いては顔雠由を主とす。彌子が妻と子路の妻とは兄弟也。彌子、子路に謂つて曰く、孔子、我を主とせば、衛の卿得べき也。子路以て告ぐ、孔子曰く、命ありと。孔子は進むに禮を以てし、退くに義を以てす。之を得るも、得ざるも命なりと曰ふ。而して癡疽<sup>と</sup>侍人瘠環<sup>と</sup>を主とせば、是れ義なく、命なき也と。萬章以てその誤傳にして、而も亦孔子が出處進退の如何に公正なりしかを見るべし。

孟子の説の如く、靈公の寵臣彌子か孔子を以て己か黨となさんとせしが如く、衛の大夫王孫賈も亦言を以て孔子を諷して己が黨と爲さんとせり。論語に

曰く、王孫賈問うて曰く、其の奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよとは何の謂ひぞや。子曰く、然らず。罪を天に獲るは禱る所なきなりと(八佾)朱子之を解して曰く、奥は常尊あるも、祭の主にあらず。竈は卑賤なりと雖も、時に當つて事を用ふ。故に君に結ぶより、權臣に阿附するに如かざるを喻ふ。賈、衛の權臣故に此れを以て孔子を諷すと。以て孔子が權臣にも阿附せず、毅然として公正の心を持せりしかを見るべし。

既に王孫賈の言に據つても推測し得らるゝが如く、孔子は衛に於いて大に優遇せられたり。孟子に曰く、衛の靈公に於けるは、際可の仕也。衛の孝公に於けるは、公養の仕也と。萬章朱子曰く、際可は接遇するに禮を以てし、公養は國君賢を養ふの禮也と。史記は更に之を明にして曰く、靈公、三十八年孔子來る。之を祿すと魯の如くすと(衛世家)又曰く、衛の靈公、孔子に問ふ、魯に居り、祿を得る幾何ぞ。對へて曰く、奉粟六萬と。衛人も亦粟六萬を致すと(世家)既に孔子は身衛國に優遇せらるゝと此の如くなるも、親しくその政事を見れば、彌子、王孫賈の輩徒に強梁を恣にするを見、心竊に平ならざるものありしにや。論語に、魯衛の政



は、兄弟なりと子路歎ぜられき。

孔子衛に居り、靈公の夫人南子に見ゆ。論語に曰く、子南子に見ゆ、子路悦ばず。夫子之に矢つて曰く、予の否とする所のものは、天之を厭はん、天之を厭はんと（雍也）抑も夫人南子は淫亂を以て聞えし女也。子路の悦ばざりしも亦宜なりと謂ふべし。朱子之を解して曰く、孔子辭し、已むことを得ずして、之に見ゆと、然り已に懇請せらる、焉ぞ見えざるを得んや。史記は更にその間の消息を詳にして曰く、靈公の夫人南子なるものあり、人をして孔子に謂はしめて曰く、四方の君子、寡君と兄弟たるを欲するを辱とせざるものは、必ず寡小君を見る。寡小君見んとを願ふと、孔子辭謝す。已むことを得ずして之を見る。夫人絺帷の中に在り。孔子門に入り、北面稽首す。夫人帷中より再拜す。環珮玉聲、璆然たりと、世家小君にしては夫人南子あり、大君にしては靈公あり。その下復た王孫賈、彌子瑕の徒あり。上下滔々として相率ゐて淫蕩奸亂し、その極、阿諛悅色風を成し、ものありしにや、孔子は深く之を慨歎せられぬ。論語に子曰く、已んぬるかな、吾れ未だ徳を好むこと、色を好むが如きものを見ざる也と、衛靈公又論語に子曰

く、祝鮀の佞あり、宋朝の美あるにあらざれば、難い哉、今の世に免れんとはと、雍也。朱子の集註に曰く、鮀は衛の大夫にして口才あり。朝は宋の公子、美色ありと、以て當時衛の習俗の一斑を卜するを得べし。

衛の國、それ已に此の如き習俗なるに、孔子が長く、而も五たびも茲に來りしは何ぞや、蓋しその國古に於いても、又今に於いても、尙ほ賢材、偉能の士あるありて、その流風、遺俗の多少、見るべきものありしが、爲めならんか。論語に曰く、子謂ふ、衛の公子、荆善く室に居れり。始めあるときに曰く、苟か合れり、少しくあるとき曰く、苟か完れり、富みあるとき曰く、苟か美しと、子路是れ、公子荆が恬淡の性を稱せるものにあらずや。論語に又曰く、子公叔文子を公明賈に問うて曰く、信なるか、夫子言はず、笑はず、取らずと、公明賈曰く、以て告ぐるものは過ち也。夫子時にして然る後に言ふ、人其の言を厭はず、樂んで然る後に笑ふ、人其の笑を厭はず、義にして然る後に人其の取るを厭はずと、子曰く、其れ然り、豈に其れ然らんやと、憲問是れ亦、公叔文子の多少、取るべきものあるを謂へるにあらずや。然るに又論語に曰く、公叔文子の臣大夫、僕と文子と同じく、諸れ公に升る。子之



を聞いて曰く、以て文と爲すべしと。憲問是に至つて、公叔文子の賢なるを激稱せるを見るべし。又論語に、子貢問うて曰く、孔文子何を以て之を文と謂ふや。子曰く、敏にして學を好み、下問を恥ぢず。是を以て之を文と謂ふ也と。公冶長是れ亦孔文子の爲人を稱せるものに、あらずや。論語に、又子曰く、直なる哉。史魚名を鱒と云ふ。邦道あるも矢の如く、邦道なきも矢の如し。君子なる哉。蘧伯玉、邦道あれば仕へ、邦道なければ卷いて之を懷むべしと。衛靈公亦以て衛國の如何に、君子人に富めりしかを見るべし。

されば孔子も晩年に至つて衛國に人材の濟々たるを稱して曰く、子衛の靈公の無道なるを言へり。康子曰く、夫れ是の如くんば、奚ぞ喪びざるや。孔子曰く、仲叔圍、孔文子のと、賓客を治め、祝鮀、宗廟を治め、王孫賈、軍旅を治む。夫れ是の如し。奚ぞ其れ喪びんやと。憲問以て人材、彬々として、適處に用ひられしかを見るべし。

靈公の下、人材の集まりしこと此の如くなるも、その心事を問へば、南子の行の如きもの多し。是れ豈に久しく栖むべきの地ならむや。孔子自ら謂へらく、鳥

は木を擇ぶ。木豈に鳥を擇ばんやと。哀公十一年、是れ孔子が衛を辭して陳に如きし所以也。論語に曰く、衛の靈公、陳を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、俎豆の事は嘗て之を聞けり。軍旅の事は未だ之を學ばざる也と。明日遂に行ると。衛靈公

是に於いて孔子衛を去り、陳に適き、匡の難を経て、第二次に衛に來り、居ること月餘にして、又之を去り、曹、宋、鄭、陳、蒲を経て、第三次に復た衛に來り、晉に赴かんとして、果さず。第四次に衛に還り、又蔡及び葉に如き、南楚に至り、第五次に復た衛に反りぬ。

時に靈公卒し、衛の君、輒孔子を用ひて政を爲さんと欲す。論語に、子路曰く、衛君子を待ちて政を爲さんとす。子將に奚をか先きにせんとするや。子曰く、必ずや名を正さんか。子路曰く、是れある哉。子の迂なることや。奚をか其れ正さんかと。子曰く、野なる哉。由や。君子其の知らざる所に於て、蓋し闕如たり。名正しからざれば言順ならず。言順ならざれば事成らず。事成らざれば禮樂興らず。禮樂興らざれば刑罰中らず。刑罰中らざれば民手足を措く所なし。故に君子之に名くれば必ず言ふべき也。之を言へば必ず行はるべき也。君子其の言に於いて苟も



する所なきのみと。子路あい、孔子は此の際に臨みても尙ほ正名の理想を第一に行はんとせられぬか。かくて孔子は子路の笑ひしが如く政治上に於いては終始失敗に歸し了はりぬるこそ理りなれ。

陳

孟軻氏謂へるあり。孔子魯衛を悦ばずと。萬章然り魯衛を悦ばずして去つて陳に如く。是れ孔子が第一次の陳行也。之より去つて匡を過ぎ衛に還り宋に適き復た陳に来る。是れ孔子が第二次の陳行也。居ること三年司城貞子が家に寓す。抑も孔子陳に居ること衛に亞ぐ然れども今論語を按ずるにその陳に於ける言行を録せるもの甚だ尠し。論語に曰く陳の司敗昭公の禮を知れるかを問ふ。孔子曰く禮を知れりと。孔子退く巫馬期を揖し之に進て曰く吾れ聞く君子黨せずと。君子も亦黨するか。君吳に取る同姓と爲す之を吳孟子と謂ふ。君にして禮を知らば孰れか禮を知らざらんやと。巫馬期以て告ぐ。子曰く丘や幸なり。苟も過ちあれば人必ず之を知ると。述而是恐らくは此の時の語ならん。而して又孔子が如何に人情に厚くその語氣も亦綽然として迫らざるものあるを覺

ゆるは、偶以てその爲人を窺ふに足らずや。

孔子復た陳を去り衛に反り西晋に赴かんとして果さず。又衛に反り復た陳に来るや。是れ第三次の陳行也。所謂靈公問陳に於ける。明日は遂に行れる急速の行是れ也。

是に於いてか所謂陳蔡の厄なるもの起る論語に曰く陳に在つて糧を絶つ従者病みて興つものなし。子路慍り見えて曰く君子も亦窮するとありや。子曰く君子は固に窮す。小人窮すれば斯ち濫すと。衛靈公荀子に至つて更に此の語を敷衍して曰く孔子南楚に適かんとして陳蔡の間に厄す。七日火食せず。藜藿を糗せず。弟子皆飢色あり。子路進んで之を問うて曰く由之を聞く善を爲すものは天之に報ずるに福を以てし不善を爲すものは天之を報ずるに禍を以てすと。今夫子徳を累ね義を積み美行を懐くの日久しくして奚ぞ居の隱するや。孔子曰く由誠らざるか。吾れ女に語らん。女知者を以て必ず用ひらるゝと爲すか。王子比干は心を剖かれざらんや。女忠者を以て必ず用ひらるゝと爲すか。關龍逢は刑せられざらんや。女諫者を以て必ず用ひらるゝと爲すか。吳子胥は姑蘇



東門外に磔せられざらんや。夫れ遇不遇は時也。賢不肖は材也。君子博學深謀にして時に遇はざるもの多し。是に由つて之を觀れば世に遇はざるもの衆し。何ぞ獨り丘のみならんや。且つ夫れ芷蘭は深林に生じ、人なきを以て芳ならざるにあらず。君子の學は通ずるが爲めにあらず。窮して困まず。憂へて意衰へず。禍福終始を知つて心惑はざるが爲め也。夫れ賢不肖は材也。爲不爲は人也。遇不遇は時也。死生は命也。今その人あり、其の時に遇はざるは賢なりと雖も、其れ能く行はれんや。苟も其の時に遇はば、何の難きことか。之あらんや。故に君子博學深謀、身を修め、行を端しうして、以て其の時を俟つ。孔子曰く、由居れ、吾れ女に語らん。昔晋の公子重耳の霸心は曹に生じ、越王句踐の霸心は會稽に生じ、齊の桓公小白の霸心は莒に生ず。故居隱せざるものは思遠からず。身佚せざるものは志廣からず。女庸安ぞ吾之を桑落の下に九月の時得ざるを知らんやと。宥坐箴

然らば孔子が陳蔡の厄は何故に起りしか。その行固より急速に出でたるが爲めなりと雖も、亦他にその原因なきを得ず。史記はこれが消息を詳に叙述せるも、吾人は今家語によりてこれが一斑を窺はんとす。

蓋し孔子家語は、魏の王肅が僞作として、學者の痛く排斥する所の書なり。と雖も、今その書を按ずるに、書は元より僞作なれども、事實は多く僞作にあらず。荀子禮記、韓詩外傳、史記說苑等の傳ふる所と合するものあり。吾人は此の點より家語を以て、一も二もなく排斥する學者に與みすると能はざる也。

史記を按ずるに、孔子が蔡に遷り、三歲、吳、陳を伐つ。楚陳を救うて城父に軍す。孔子が陳蔡の間に在るを聞き、楚人をして孔子を聘せしむと。世家是れ後來楚の昭王が孔子招聘の事となす也。孔子家語に曰く、楚の昭王孔子を聘す。孔子往いて拜禮せんとし、路陳蔡に出づ。陳蔡の大夫相與に謀つて曰く、孔子は聖賢也。其の刺議する所皆諸侯の病に中る。若し楚に用ひられなば、陳蔡危からんと。遂に徒兵をして孔子を距がしむ。行くとを得ず。糧を絶つと七日。外に通ずる所なし。藜羹充たず。從者皆病む。孔子愈慷慨講誦して絃歌衰へず。乃ち子路を召して問うて曰く、詩に曰く、咒にあらず。虎にあらず。彼曠野に率がふと。吾が道非なるか。奚爲れぞ。此に至るやと。子路慍り色を作して對へて曰く、君子困む所なし。意ふに夫子未だ仁ならざるか。人吾れを信ぜざれば也。意ふに夫子未だ智ならざる



か。人吾れを行かしめざれば也。且つ由や昔者諸れを夫子に聞く、曰く善をなすものは、天之に報ゆるに福を以てし、不善を爲すものは、天之に報ゆるに禍を以てすと。今夫子徳を積み、義を懐き、之を行ふと久し、奚ぞ居の窮するや。子曰く、由未だ之を識らざる也。吾れ汝に語らん。汝仁者を以て必ず信ぜらるゝと爲すか。伯夷、叔齊は首陽に饑死せざらん。汝智者を以て必ず用ひらるゝとなすか。王子比干は心を剖かれざらん。汝忠者を以て必ず報いらるゝと爲すか。關龍逢は刑せられざらん。汝諫者を以て必ず聽かるゝとなすか。伍子胥は殺されざらん。夫れ遇不遇は時也。賢不肖は才也。君子博學深謀にして時に遇はざるもの衆し。何を獨り丘のみならんや。且つ芝蘭は深林に生じ、人なきを以て芳ならざるとなし。君子道を修め、徳を立て、窮困の爲めに節を敗らざ。之を爲すものは人也。生死は命也。是を以て晋の重耳の霸心あるは曹衛に生じ、越王勾踐の霸心あるは會稽に生ず。故に下に居て憂なきものは思ひ遠からず、身を處して常に逸するものは忠廣からず。庸を其の終始を知らんやと。子路出て、子貢を召して告ぐる。と子路の如くす。子貢曰く、夫子の道至大也。故に天下能く容るゝなし。夫子盍ど

少しく貶さるや。子曰く、賜、良農は能く稼うれども、必ずしも穡むると能はず。良工は能く巧なれども、順を爲すと能はず。君子能く其の道を修め、綱にして之を紀し、其の能く容れらるゝとを必とせず。今其の道を修めずして、其の容れられんとを求む。賜、爾の志、廣からず、思、遠からずと。子貢出づ。顔回入る。問うと亦之の如し。顔回曰く、夫子の道至大にして、天下能く容るゝことなし。然りと雖も、夫子推して之を行ふ世、我を用ひず。國を有するもの、醜也。夫子何をか病まん。容れられずして、然る後に君子を見ると、孔子欣然として歎じて曰く、是れある哉。顔氏の子、吾れ亦爾をして財多からしめば、吾れ爾が宰とならんと。在厄、子路、子貢及び顔回の三子が、孔子に對する言動は、又偶、以て三子が氣質と修養との如何を窺ふとを得べし。

あ、孔子此の艱厄の中に在り、而も絃歌の聲、洋洋々として絶たず。その門下俊髦の士と、油然その抱負を談論上下して、窮厄の身に逼れるを知らざる。其の宏量、雅懷、豈に千載の下、孰れかその高風を仰がざるものあらざらんや。

昔者龍門の司馬子長氏謂へるとあり。天は人の始也。父母は人の本也。人窮す



れば本に反る。故に勞苦倦極して未だ嘗て天を呼ばずんばあらず。疾痛慘憺して未だ嘗て父母を呼ばずんばあらず。屈原傳然り、仲尼四方に周流すること多年、時非にして道容れられず。老脚空しく蹉跎として、世復た耳を名教に傾くものなし。噫、此の如くにして何ぞ父母の地を憶はざるを得ざらんや。又焉ぞ門下故舊の士を念はざるを得ざらんや。論語に曰く、子陳に在りて曰く、歸らん乎。歸らん乎。吾が黨の小子、狂簡斐然として、章を成す之を裁する所以を知らずと。公冶長、孟子に萬章問うて曰く、孔子陳に在りて曰く、盍ぞ歸らざる。吾が黨の士、狂簡進取にして其の初を忘れずと。孔子陳に在り何ぞ魯の狂士を思ふやと。孟子曰く、孔子中道を得て之れと與にせずんば必ずや狂獫か。と。狂者は進取にして、獫者は爲さざる所あり。孔子豈に中道を欲せざらんや。必ずしも得べからず。故に其の次を思へる也。盡心あり、孔子が此の歸與の歎、吾人も亦深くその境遇に同情せざるを得ざる也。

匡

孔子の匡を過ぎれるは第一次の陳より來れる也。史記に曰く、陽虎嘗て匡人

を暴らす。匡人は是に於いて遂に孔子を止む。孔子の狀、陽虎に類す。焉れを拘ふる。と五日、匡人孔子を拘ると益急。弟子懼る。孔子從者をして衛武子が爲めに、衛に臣たらしむ。然る後に去るとを得たりと。世家又韓詩外傳に曰く、孔子行る、簡子將に陽虎を殺さんとす。孔子之に似たり。帶甲以て孔子の舍を圍む。子路愠怒し、戟を奮つて將に下らんとす。孔子之を止めて曰く、由何ぞ仁義の裕寡きや。夫れ詩書の習はざる、禮樂の講ぜざる、是れ丘の罪也。若吾れ陽虎にあらず、我を以て陽虎と爲すは丘の罪にあらず。命也。由歌へ予若に和せんと。子路歌ひ、孔子之に和し、三終して圍罷むと。

孔子既に是の如くに平焉として絃歌す。豈にそれ偉大の抱負なからざらんや。論語に曰く、子匡に畏る。曰く、文王既に歿す。文茲に在らざらんや。天の將に斯文を喪はんとせば、後死者斯文に與るとを得ず。天の未だ斯文を喪はざれば、匡人其れ子を如何せん。と。子罕あ、斯道を以て自任するの牢き、是れ豈に日月と光を争ふものにあらざるか。非乎。

孔子既に匡の難を免れ、第二次に衛に還らんとす。然るにその高足顔淵未だ



來らず孔子懼つて殺されたりと爲し、大に之を哭せるものゝ如し、論語に曰く、子匡に畏る。顔淵後れぬ。子曰く、汝を以て死せりと爲すと曰く、子在す、回何ぞ敢て死せんと、先進、その回が何ぞ敢て死せんの語、誦して爰に至れば、實に千載の下、凜乎として尙ほ生氣あるを覺ゆ。

宋

孔子が宋に適けるは第二次の衛行よりせるもの也。孟子曰く、宋桓司馬の將に要して、之を殺さんとするに遇ひ、微服して宋を過ぐと、萬章又史記に曰く、孔子曹を去つて宋に適き、弟子と禮を大樹の下に習ふ。宋の司馬桓魋、孔子を殺さんと欲して、其の樹を抜く。孔子去る。弟子曰く、以て速にすべしと。世家、是に於いてか論語に子曰く、天德を予に生ぜり。桓魋、其れ子を如何せんと、述而、あ、一難を経る毎に、一倍し來る、その大勇、眞に仰望すべきものに、あらずや。

鄭

孔子鄭を過ぎり、路を失ひ、彷徨して門人と相分る。鄭人その顔色憔悴し、形容の枯槁せるを見て、之を譏誚す。孔子家語に曰く、孔子鄭に適き、弟子と相失ふ、獨

り東郭の門外に立つ。或る人子貢に謂つて曰く、東門の外に一人あり、其の長九尺、有六寸、河日隆、類、其の頭、堯に似、其の頸、阜陶に似、其の肩、子産に似たり。然るに、腰より以下、禹に及ばざると、三寸、粟々とし、喪家の狗の如しと。子貢以て聞す、孔子欣然として歎じて曰く、形狀は、末也、喪家の狗の如しとは、然る哉、然る哉、と。困誓、荀子に曰く、孔子長と、非相篇又曰く、仲尼の狀、面蒙、俱の如しと。非相篇、楊、偉の註に曰く、俱は、方相也、其の首、蒙、葺然たり。故に蒙、俱と曰ふと。是に由つて之を觀れば、仲尼の容貌は、長高く、額廣く、面方にして、稍、異相に屬せるを知るべし。史記に曰く、孔子長九尺、有六寸、人皆之を長人と謂つて、之を異とすと。世家、以てその魁偉なるを見るべし。

嗚呼孔子、その失意落魄の中に在りても、敢て世人の毀譽褒貶を以て眼中に置かず、却つて喪家の狗の如きは、さなりくと謂へるは、洵にその面目躍然たるものあるを覺えずんば、あらざる也。

晋

孔子第三次に衛に反れるとき、晋の趙氏が家臣佛肸、中牟に據つて畔く、仍て



孔子を召さんとす。論語に曰く、佛髀召す。子往かんと欲す。子路曰く、昔者由や諸れを夫子に聞く、曰く、親らその身に於いて不善を爲すものには君子は入らざる也と。佛髀、中牟を以て畔く。子往かんとすると之を如何。子曰く、然り、是の言ある也。堅きを曰はずや。磨けども磷ろがず。白きを曰はずや。涅すれども緇まず。吾れ豈に匏瓜ならんや。焉ぞ能く繫けて食はざらんと。陽貨、その意に以爲へらく、人の不善焉ぞ能く我を浼すことを得むやと。然れども孔子は遂に往くことを果さざりき。

孔子陳を去り、第三次に衛に來れるも、既に衛に用ひられざれば、將に西の方晋に行き、趙簡子に見んとしき。孔子家語に曰く、孔子衛より將に晋に入らんとす。河に至つて趙簡子が寶犢鳴犢及び舜華を殺せるを聞き、乃ち河に臨んで歎じて曰く、美なる哉、水洋洋乎たり。丘が濟らざるは此れ命なるかなと。子貢趨り進みて曰く、敢て問ふ、何の謂ひぞや。孔子曰く、寶犢鳴犢、舜華は晋の賢大夫也。趙簡子未だ志を得ざる時、此の二人を須つて而る後に政に従ふ。その已に志を得るに及んでや、之を殺す。丘之を聞く、胎を列き、天を殺せば、麒麟其の郊に至らざ

澤を竭くして漁すれば蛟龍其の淵に處らず。巢を覆し卵を破れば鳳凰其の邑に翔けらず。何となれば、君子其の類を傷くるを諱めば也。鳥獸の不義に於ける尙之を避けることを知る。况んや人に於いてをや。遂に還ると困誓その行かんとして反へれる。當時の孔子が感懷やそれ何如。

抑も趙簡子は趙國の祖にして、當代稀世の英主也。韓非子に曰く、簡主左右に謂つて曰く、車席泰だ美なり。夫れ冠賤なりと雖も、頭必ず之を戴く。履貴なりと雖も、足必ず之を履む。今車席此の如く太だ美也。吾れ將に何の履を將ちて之を履まんか。夫れ下を美にして上を耗らすは義を妨ぐるの本也と。外儲説あ、君臣上下の分柄焉として明なると猶ほ太陽の如し。然り而して時に迷雲之を蔽ふものあるは何ぞや。他なし下を美にして上を耗すれば也。趙國の祖簡子の如きは、洵に建國の君たるに恥ぢざる也。

韓非子に又曰く、陽虎齊を去り趙に走る。簡主曰く、吾れ聞く子善く人を樹らと。虎曰く、臣魯に居り、三人を樹え、皆令尹となる。虎罪を魯に抵るに及んで、皆虎を搜索す。臣齊に居り、三人を薦む、一人は王に近くとを得、一人は縣令となり一



人は候吏となる。臣罪を得るに及んで、王に近くもの臣を見えしめず。縣令は臣を迎へて執縛せんとす。候吏は臣を追うて境に至り、及ばずして止む。虎善く人を樹えずと、主俛いて笑つて曰く、橘柚を樹うるものは之を食へば甘く、之を嗅げば香し。枳棘を樹うるものは成つて人を刺す。故に君子は樹うる所を慎むと。  
(外儲説)あり、偉人の言動、固より常軌を以て律すべからずと雖も、趙簡子の言の如きは、能く道に契へりと謂ふべし。趙簡子の如きは、能く人を樹うるのみならず、亦能くその國を樹ゑしもの也。此の如くにして、その國礎焉ぞ鞏からざるを得ざらんや。

又韓非子に曰く、陽虎議して曰く、主賢明なれば心悉くして以て之に事へ、不肖なれば姦を飾つて之を試むと。魯に逐はれ、齊に疑はれ、走つて趙に之く。趙簡主迎へて之を相とす。左右曰く、虎善く人の國政を竊む、何故に相とするや。簡主曰く、陽虎之を取ることを務め、我は之を守るとを務むと。遂に術を執つて之を御す。陽虎敢て非を爲さず、以て善く簡主に事へ、主の疆を興し、幾ど覇たるに至ると。(外儲説)事固より架空の言ならんも、その趙簡主の非凡の人物なるを窺

ふに足らん。陳深曰く、取するに其の道を得ば狙詐も使となると。嗚呼、陽虎の姦惡、憎むべしと雖も、世若し陽虎の徒を索めば、何ぞ攫指するに違あらんや。明主能く之を察して、克く之を御す。是れ、到る處功の成らざるなき所以也。簡子の如きは、洵に之を明君と謂ふべき也。

以上の話説により、趙簡子の人と爲りを知るべく、従つて孔子の行いて之に見えんとしたる亦偶然にあらざるを知るべし。然るに河に臨み嗟歎して空しく歸へれる所以のものは何ぞや。説苑に曰く、趙簡子曰く、晋に澤鳴、犢犢あり、魯に孔丘あり、吾れ此の三人を殺さば天下は圖るべき也と。權謀碧巖に曰く、山を隔て、煙を見、早く是れ火なることを知り、牆を隔て、角を見、便ち是れ牛なることを知る。舉一明三、目機、銖兩、是れ衲僧家尋常の茶飯と。第一則あり、孔子の賢なる焉、くんぞ其の機を知らざらんや。是れ晋に行かずして復び衛に還れる所以のもの也。

葉

孔子晩年に第三次の陳行より蔡及び葉に如きぬ。孔子が葉に来るや、葉公政



を孔子に問ふ。而して孔子の之に對ふるその言甚だ平凡を極む。論語に曰く、葉公政を問ふ。子曰く、近きもの悦ばせば、遠きもの來ると。子路是に於いて葉公孔子が平凡にして他の奇なきと思ひたるにや、頗る奇警の語を發して曰く、葉公孔子に語つて曰く、吾が黨に躬を直くするものあり、其の父羊を攘んで、子之を證すと。孔子曰く、吾が黨の直きものは是れに異なる。父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠す。直きと其の中に在りと。子路平凡なるが如くにして非凡なる此の對へ、凡中の凡なる葉公の徒、豈に百鍊の孔子が眞意を知らんや。

是に於いてか葉公左の間を爲しぬ。論語に曰く、葉公孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる。其の人と爲りや。憤を發して食を忘れ、樂以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らずと。爾か云へと。述而あ、是れ孔子が平生の氣力を發揮して餘蘊なきもの、而も之に對する葉公の再問なきは、偶以て其の爲すあるに足らざるを知るべきにあらずや。

楚

孔子老軀を挺して陳衛の間を徂徠すると多年その間備に辛酸艱苦を嘗め

ぬ。然れども其の流離困頓を極めしは陳蔡の厄を以て之が最となす。幸なる哉。楚の昭王に迎へられ、その厄を免れ得んとは。史記に曰く、楚の昭王師を興して孔子を迎ふ。然る後に逸るゝことを得たり。昭王將に書社の地七百里を以て孔子を封ぜんとす。楚の令尹子西曰く、王の諸侯に使令するもの子貢の如きものありや。曰く、あることなし。王の輔相に顔淵の如きものありや。曰く、有るとなし。王の將率に子路の如きものありや。曰く、有るとなし。王の官尹に宰予の如きものありや。曰く、有るとなし。且つ楚の祖、周に封ぜられ、號して子男として五十里なり。今孔丘三王の法を述べ、周召の業を明にす。王若し之を用ひば、楚安ぞ世々堂々として方數千里なるを得んや。夫れ文王豊に在り、武王鎬に在つて百里の君、卒に天下に王たり。今孔丘、土壤に據るを得て、賢弟子佐とならば、楚の福に非ざる也。と。昭王乃ち止むと。世家是に於いて孔子楚より復た衛に反へる。孔子が楚の昭王に於けるや、猶ほ齊の景公に於けるが如し。第二の晏平仲たる令尹子西の爲め、孔子は沮遏せられて、空しく復た衛に還りぬ。

魯



孔子定公十三年に魯を去りてより以來、天下を周流すると凡そ十四年、或は南船北馬、或は東奔西走、殆ど一日と雖も寧處なく、所謂孔席煖なるに遑なく、皇々栖々として、大義を君臣の際に明にせんとせしも、あはれ時運日々に非にせず、或は喪家の狗と譏らるゝも、背て名教に耳を傾くるものなく、終に志を當世に得ると能はざりければ、早くも陳蔡に於いて歸與の歎を漏らすに至りぬ。是に於いてか退いて志を當世に絶ち、慨然としして教を千載に垂れんとす。

孔子嘗て陳に居りしとき、魯の季桓子卒す。康子に遺言して孔子を召さしむ。其の臣公之魚、之を沮み、康子、冉有を招く。孔子冉有に謂つて曰く、魯人求を召す。之を小用するにあらず。必ず將に之を大用せんが爲め也と。然るに明敏なる子貢は、孔子が歸魯の志あるとを察し、因つて冉求に謂つて曰く、即し用ひられれば早く孔子を招致せよと。慫慂せり。是に至つて冉求、季氏が將となり、樊遲も亦その裨將となり、齊人と奮戰して大功を樹つ。季康子曰く、子の軍旅に於ける之を學びたるか。之を性にするか。冉有曰く、之を孔子に學ぶ。季康子曰く、孔子は如何なる人ぞや。對へて曰く、之を用ふる名あり、之を百姓に播し、諸れを鬼神

に質して憾みなし。之を求むるに此の道に至る。千社を累ぬると雖も、夫子は利とせざる也。康子曰く、我れ之を召さんと欲す。可ならんか。對へて曰く、之を召さんと欲せば、小人を以て之を固するとなくんば可なりと。世家然るに此の時既に子貢も亦叔孫氏に事へて、吳王に楨俎して其の外交的手腕を示す。此等孔門の士が魯に於いて功を立てしは、是ぞ孔子が魯に歸らんとする伏線なりける。時偶、衛の孔文子、大叔疾の所爲を惡み、之を攻めんとして、之を孔子に謀りしに、孔子之を可かず。是れ即ち孔子が歸魯の導火線なりき。左傳に曰く、孔文子の將に大叔を攻めんとするや、仲尼に訪ふ。仲尼曰く、胡簋の事は、則ち嘗て之を學びたり。甲兵の事は、未だ之を聞かざる也。と。退いて駕に命じて行らんとして曰く、鳥は木を擇ぶ。木豈に能く鳥を擇ばんや。と。文子遽に之を止めて曰く、圍豈に敢て其の私を喪らんや。衛國の難を訪へば也。將に止まらんとす。魯人幣を以て之を召す。乃ち歸ると。(哀公十年)

是に至つて孔子魯に歸へる。史記に曰く、孔子魯を去り、十四歳にして魯に反へると。(世家定公十三年より哀公十一年に至るまで、春秋を更ふると凡そ十四



孔子此の長日月の間、遍く天下を周遊して再び魯に歸りける也。

## 七 孔子の交遊

孔子志を當時に得ずと雖も、嘗て歴遊せし國に於いては、國君皆之を待するに殆ど國師を以てしたる程なれば、當時の所謂賢者と稱せられしものも、多くは孔子の教を受けしものゝみにして、俱に與に孔子と議論を上下して、その胸襟を披瀝する交友と稱すべきものは甚だ鮮し。蓋し孔子が當時先輩として稍傾倒せしものは、北に於いては鄭の子産、南に於いては吳の季札の二子にして、現に膝を交へ手を携へて交遊せしものは、齊の晏嬰、衛の蘧伯玉の二子に過ぎざるが如し。

意ふに絶大なる人格を就せる孔子の如き人物の對手として、その知音となり、友朋となるもの甚だ寡少なるは、抑も亦當然の事にあらざるか。

### 鄭の子産

鄭の子産、姓は公孫、名は僑、子産はその字也。爲人、己を行ふや恭にして、民を養ふや惠、後ち子皮の援くる所となり、鄭の卿となる。是に於いて都鄙を明にし、田



疇を正しうし、忠儉を揚げ、奢侈を斥く、國勢爲めに一變するに至る。初め國人皆子産の政を怨み、誦して曰く、誰れか子産を殺すものぞ。吾れ其れ之に與みせんと。然るに政を行ふと三年、國人更た誦して曰く、我れに子弟あり、子産之を誨ふ。我れに田漁あり、子産之を殖す。子産にして死せば、誰れか其れに嗣がんと。以てその國人に仰望傾倒せられしことの大なるを見るべし。

子産刑律に明にして、又辭令を善くす。是を以て能く諸侯に應じて敗事あるとなし。故に晋楚の強と雖も、敢て之を侵すとなかりしと云ふ。論語に子曰く、命を爲くるや、裨諶之を草創し、世叔之を討論し、行人子羽之を修飾し、東里の子産之を潤色すと。憲問又以て子産の辭令に長ざるを知るべし。

孔子の子産を稱すると一再にあらざ。論語に曰く、或は子産を問ふ。子曰く、惠人也。憲問又論語に曰く、子産を謂つて、君子の道四あり。その己を行ふや、恭その上に事ふるや、敬。その民を養ふや、惠。その民を使ふや、義。と。公治長是れ孔子が君子の道を以て子産の性格人物を批判せるもの也。

左傳に曰く、鄭の子産疾あり。子大叔に謂つて曰く、我死せば、子必ず政を爲さ

ん。唯だ徳あるもの能く寛を以て民を服す。其の次、猛に如くはなし。夫れ、火烈を民望んで之を畏る。故に死鮮し、水懦弱なり。民狎れて之を翫ぶ。則ち死多し。故に寛難し。と疾みて數月にして卒す。大叔政を爲すや、猛に忍びずして寛にす。鄭盜多し。人を萑苻の澤に取かす。大叔之を悔いて曰く、吾れ早く夫子に従へば此に及ばざらんと。徒兵を興して以て萑苻の盜を攻め、盡く之を殺して、盜少しく止む。仲尼曰く、善い哉。政寛なれば民慢す、慢すれば糾すに、猛を以てす。猛なれば民殘す、殘すれば之を施すに、寛を以てす。寛を以て、猛を濟し、猛を以て、寛を濟し、政是れを以て和すと。昭公二十年、以て孔子が子産の施政を是認せしかを見るべし。

されば孔子は子産の死を聞いて大に悼みき。左傳に曰く、子産の卒するに及びて、仲尼之を聞き、涕を出して曰く、古の遺愛也。と。昭公二十年、その意に以爲へらく、子産の民を愛すると猶ほ古人の遺風ありと。その傾倒の情の厚き亦以て想ふべきにあらずや。

史記に曰く、子産は鄭の成公の少子也。人と爲り仁にして、人を愛す。君に事へて忠厚。孔子嘗て鄭を過ぐ、子産と兄弟の如くすと云ふ。子産の死を聞くに及び



孔子爲めに泣いて曰く、古の遺愛也と。子産に兄事すと。鄭世家

呉の季札

季札は呉の王子にして、延陵の季子と號す。曾て諸侯に聘するや、其の國の禮樂風俗を觀て能く其の邦の隆替を識る。季子齊に至り、晏子と語り、鄭に至り、子産と語る。一見舊の如しと云ふ。告げて曰く、鄭の政必ず子に及ばん。子政を爲すに禮を以てせよ。然らずんば國將に敗れんとすと。季子初め出て、徐を過ぎる。徐君、季子の寶劍を見て色之を欲す。季子亦心に之を知るも、然れども使命を帶ぶるを以て、敢て愛を割かず。使して還れば、徐君亡し。季子曰く、吾が心業に之を許せり。今死して進めざるは、是れ心を欺くなりと。遂に劍を解き、その墓に懸けて去れりと云ふ。以てその爲人高潔にして如何に恬淡なりしかを知るべし。

禮記に曰く、季子齊に適く。其の反るや、其の長子死し、贏博の間に葬る。孔子曰く、延陵の季子は、呉の禮に習へるものなりと。往いて其の葬を觀る。孔子曰く、延陵の季子の禮に於けるや、其れ合へるか。檀弓、延陵の季子は、それ此の如く禮に通ぜり。孔子の之を私淑せる宜なりと謂ふべし。

齊の晏嬰

晏子と孔子との齊に於ける其の施政の關係は、吾人已に之を、孔子の遊齊の條に見たれば、茲には只晏子が言行の一斑を覗はんとす。

晏子名は嬰、平と諡し、字を仲と云ふ。夙に節儉力行を以て齊に重んぜらる。既にして大夫となるや、一狐裘三十年、食肉を重ねず。政を行ふに勤慎、名諸侯に顯はる。

晏子齊の相となり、嘗て出づ。其の御の妻、門間より其の夫を窺ふ。その夫、相の御となり、大蓋を擁し、駟馬に策ち、意氣揚々として甚だ自得す。既にして夫、家に歸る。その妻俄に去らんとを請ふ。仍て夫、その故を聞く。妻の曰く、晏子長六尺に滿たず、身齊國に相として、名諸侯に顯はる。今妾、其の出づるを觀るに、志念深く、常に以て自ら下る。今子、長八尺、乃ち人の僕御となり、而も子が意自ら以て、足れりと爲す。是れ妾が去らんとを求むる所以なりと。其の後、夫自ら抑損す。晏子性んで之を問へば、御實を以て之に對ふ。晏子は於いて其の爲人を愛して、薦めて之を大夫に爲せりと。



蓋し御者の妻が眼に映じたる晏子は、洵に晏子が小照とも謂ふべきものに、能く晏子が性行を描き出して、間然する所なし。されば孔子も嘗て夫の尼、田の事ありしにも拘らず、之を稱して曰く、晏平仲は善く人と交り、久しうして之を敬すと、公治長是れ以て晏子が爲人を知るに足らずや。

衛の蘧伯玉

蘧伯玉は衛の大夫也、名を瑗と云ふ。孔子の衛に適くや、其の家に寓す。嘗て衛の靈公、夫人と夜坐し、車聲の隣々として、闕に至つて止まり、闕を過ぎて聲あるを聞く。靈公、夫人に問うて曰く、此れ誰なるか、夫人曰く、妾聞く、公門を下り、路馬に式するは、敬と。公曰く、何を以て之を知るか、夫人曰く、妾聞く、公門を下り、路馬に式するは、敬を廣むる所以也。夫れ忠臣と孝子とは、昭々の爲めに、節を變ぜず、冥々の爲めに、行を惰らず。蘧伯玉は衛の賢大夫也、仁にして、智あり、敬にして、上に事ふ。此れ其の人、必ず闇味を以て、禮を廢せざらん。是を以て之を知ると、公人をして之を視せしむるに、果して伯玉也。公、夫人に戯れて曰く、非也と。夫人、觴に酌み、再拜して、公に賀す。公曰く、子何を以て寡人を賀するや。夫人曰く、始め妾衛を以て、獨り伯

玉あるのみと爲す。然るに復た今之と齊しきものあり。是れ君に二賢臣有る也。國に賢臣多きは國の福也。妾是を以て之を賀すと。公驚いて曰く、善い哉と。遂に夫人にその實を語れりと。

淮南子に曰く、蘧伯玉行年五十にして、四十九年の非なるを知ると、莊子にもその人物を稱して曰く、蘧伯玉行年六十にして、六十化す。未だ嘗て之を是とするに始めて、卒に之を誦するに、非を以てせずんば、あらざる也。未だ今の所謂之を是とするもの、五十九の非にあらざるとを知らざる也。則陽その意に以爲へらく、修徳の工夫、歳々新に就き、一歳と雖も復た變化せざるとなきを謂へる也。亦以て其の恭敬摯實なる君子たるを知るべし。

されば孔子も屢之を稱して曰く、君子なる哉。蘧伯玉邦道あれば、仕へ邦道なければ、卷いて之を懐むべしと。衛靈公又論語に曰く、蘧伯玉人を孔子に使はず。孔子之と坐し、問うて曰く、夫子何をか爲すや。對へて曰く、夫れ其の過を寡くせんと欲すれども、未だ能はざる也。と。使者出づ。孔子曰く、使なるか、使なるかと。憲問蓋し孔子が使者を稱せるは、やがてその主を賛したる所以にして、亦蘧伯玉の



孔子に對する、如何に意氣相感ずる底の人なりしかを見るべきにあらずや。

八 孔子と隱者

昔人謂ふ、一藝の士は與に語るに足ると然り。一藝の士は眞に語るに足るべきもの也。然らばその語るに足るべきとは何ぞや。人は元來その道に賢し、而してその道に賢き所是れその語るに足る所以なるか。あ、何ぞ其れ然らんや。譬見すれば是れ平焉たる一泥工のみ凡乎たる一老匠のみ、更に他の技なきに似たり。然れども一たび鍔を振り、器を執つて腕を揮ふや、眼に權門の威なく、耳に富家の聲なく、自在縦横の身に迫れるをも忘れ、老の將に至らんとするも知らず。澹泊如として、獨りその技を維れ、樂しむ。その洒脱の光景、冲澹の氣韻、大に掬すべく、亦大に味ふべきにあらずや。

然り、一藝の士の語るべきはその冲澹なる氣韻に在り、その洒脱なる光景に在り。直觀的に天地人生の歸趣を捉へ、以て之をその技藝の上に露すに在り。一言以て之を蔽へば、技を以て道を樂しむに在る也。

人既に技より道に造り、技を以て道を樂しむ。是に於いてか、洋々たる新天地



は拓かれその人生觀も之より成りその世界觀も之より就らむ也是に至つて人孰れか世の毀譽人の褒貶を顧みるに迫らむや蓋し一藝の士の志は實に茲に存するものならずんばあらざる也

意ふに孔子陳蔡鄭衛宋楚の間を徂徠し屢時の隱者の刺笑を受けたるにも拘らず尙ほ之を語らんとしたるは實に此の點に存したるに在らざる乎元より孔子の邂逅せる隱者は藝術の士にあらず然れどもその老莊的超人間の思想を懷き亂を避け或は身を田疇に寄せ或は心を山林に馳せ以て塵俗を脱却して天時を樂しまんとしたるその心や洵に一なるものなくんばあらず嗚呼他山の石以て玉を攻くべし孔子此等の隱者と邂逅して果して如何なる影響を受けしや

隱者の諷刺

隱者に對する孔子の態度は賛否相半すと謂ふべし論語に曰く微生畝孔子に謂つて曰く丘何ぞ是れ栖々たるを爲すものぞ乃ち佞するとなきか孔子曰く敢て佞するに非ず固を疾む也と憲問以爲へらく孔子何ぞ違々として世

事に齷齪するや是れ世に阿れるにあらざるか孔子曰く世に阿るにあらず元より一方に偏して世を厭ふものを惡むもの也と是れその執一を惡むて之を否とせるもの也

又論語に曰く子磬を衛を撃つ養を荷うて孔氏の門を過ぎるものあり曰く心ある哉磬を撃つとやと既にして曰く鄙い哉磬々乎たり己れ知るとなれば斯れ己れのみ深ければ厲げ浅ければ掲ぐと子曰く果なる哉これ難きと未しと憲問意へらく旨ある哉磬を撃つと既にして又曰くその心まづい哉その音何ぞ石聲の如く磬々たる是れ徒に己我の見を立て俱に世變の時に順ひ深淺の宜しきに適するを知らざるものなりと孔子之を聞き云ひけらく彼や世を捨つると甚だ果なり若し人生の出處但だ此の如くならば太だ易からんも我は徒に弊履の如く棄て此の民の苦を見るに忍ぶと能はざるなりと是れ又その己獨りを善くするを斥けたるもの也

論語に又曰く或は曰く徳を以て怨みに報ゆるに何如と子曰く何を以てか徳に報いん直を以て怨みに報い徳を以て徳に報ゆと憲問蓋し以德報怨の語



は老子の報怨以徳の語とその意同じその意に以爲へらく、怨みに報ゆるに徳を以てせば、徳に報ゆるに何を以て報ゆべきやと、是れ汎愛にして差等なきを斥けしもの也、以上は大略之を否とせざるものに屬す。

その態度の不明なるものを見るに、論語に曰く、子路石門に宿す、晨門曰く、奚れよりす、子路曰く、孔子よりす、曰く、是れその不可なるを知つて之を爲すものかと、憲問意へらく、晨に門を啓くとを掌るもの子路に對して云ふやう、世の不可なるを知つて強いて爲すの徒かと、蓋し此の文只隱者の言のみにして、子路も孔子も之に對する斷言なし、論語に又曰く、楚の狂接輿歌つて孔子を過ぎりて曰く、鳳か鳳か、何ぞ徳の衰へたる往くものは諫むべからず、來るものは猶ほ追ふべし、已みなん已みなん、今の政に従ふものは殆しと、孔子下りて之と言はん、と欲す、趨つて之を辟け、之と言ふとを得ずと、微子はれ孔子の態度、狂接輿の避けて見えざるにより、贊否何れなるや、不明なるものなれども、而も之と言はん、と欲すとあるを見れば、稍之を贊せし傾きなきにあらざるを覺ゆ、孔子嘗て諸國を歴遊し、轉軻不遇、身徒に道途に老いて、志を當世に展ぶると

能はず、老脚蹉跎として、空しく曠野に彷徨す、是に於てか、超世脱俗の士を見て、豈に多少眷々の情感、慨の念なきを得むや、論語に曰く、長沮、桀溺耦して耕す、孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ、長沮曰く、夫の輿を執るもの誰れとか爲す、子路曰く、孔丘と爲す、曰く、是れ魯の孔丘か、曰く、是れ也、曰く、是れ津を知らん、桀溺に問ふ、桀溺曰く、子を誰れとか爲す、曰く、仲由と爲す、曰く、是れ魯の孔丘の徒かと、對へて曰く、然り、曰く、滔々たる天下皆是也、而して誰れと以て是を易へん、且つ而其の人を辟くるの士に従はんよりは、豈に世を辟くるの士に従ふに若かんやと、緩して輟めず、子路行いて告ぐ、夫子憮然として曰く、鳥獸は與に群を同すべからず、吾れ斯の人の徒と與にするにあらずして、誰れと與にかせん、天下道あらば、丘與に易へざる也と、微子以て孔子が如何に超世脱俗の士に同情せしかを見るべし、然れども、是れ僅に同情したるのみ、是れに於いても、尙ほ孔子が凜乎たる其の自任の堅きを見るべし。

論語に又曰く、子路従つて後れぬ、丈人の杖を以て篠を荷へるものに遇ふ、子路問うて曰く、子、夫子を見ずや、丈人曰く、四體勤めず、五穀分たず、孰れを夫子と



爲す。其の杖を植て、芸ぎる。子路拱して立ちぬ。子路を止め、宿せしめ、鶏を殺し、黍を爲つて、之を食せしめ、その二子を見えしむ。明日子路行いて以て告ぐ。子曰く、隱者也。子路をして反つて之を見せしむ。至れば則ち行りぬ。子路曰く、仕へざるは義なき也。長幼の節は廢すべからず。君臣の義は之を如何して、其れ之を廢せんや。其の身を潔うせんとして、大倫を亂る。君子の仕ふるは其の義を行はんが爲め也。道の行はれざるは已に之を知れりと。微子は是の文、孔子の斷言なく、子路が所懐の言あるのみなれば、贊否何れに屬するやを定むると能はず。と雖も、孔子が隱者也と云へりしを見れば、その語已に尊敬の意を含めるにや。思はるゝを以て、之を贊したるものと認むるも、敢て不可なるとなからんか。

孔子の態度

孔子が隱者に對する態度は、以上の如く、贊否相半して、所謂適もなく、莫もなかりしもの也。論語に子曰く、君子の天下に於けるや、適もなく、莫もなし。義之比ふと、里仁孔子は隱者に對しても、確に此の意見を懷きぬ。されば孔子は論語に隱者を三類に分ち、最後に己が態度を明にして、可もなく、不可もなしと斷

言せるなり。論語に曰く、逸民は伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連と、子曰く、其の志を降さず、其の方を辱めざるは、伯夷、叔齊か、柳下惠、少連を謂つて、志を降し、身を辱め、言、倫に中り、行、慮に中る、其れ斯れのみと、虞仲、夷逸を謂つて、隱居して放言し、身、清に中り、廢して權に中ると、我は則ち是れに異なり、可もなく、不可もなしと、微子その可もなし、不可もなしと謂へるは、所謂適もなく、莫もなく、義之れ従へるものにあらざるか。之を彼の長沮、桀溺に對する、天下道あらば丘與に易へずとの言に徴しても、明ならずや。即ち今や天下道なし、若し我世を辟けば、誰れか之を易ふるものとの意にあらざるか。

孔子が壯年に、周に適き、禮を老子に問ひ、そが痛棒を喫したりしは、彼が晩年に、其の強大なる人格を爲り、公明なる教學を樹てし伏線なりしが、是に至つて屢、時艱と隱者に遭遇して、大に修養砥礪する所ありしかば、その人格に於いても、將た其の教學に於いても、鮮からざる影響を受け、後屢、隱者と同一の思想を表するに至れるものあり。然れども孔子は空しく化せられたるにあらず、却つて己が根本思想に和するに、彼の超世脱俗の思想を以て、渾然として之を融



化したるのみ。是れ孔子が態度の何處までも義に従ふを以て一貫せる所以にして、抑も亦是れ孔子の孔子たる所以の本領ならずんばあらず。

而して孔子が隱者と殆ど同一の思想を懐けりとは、論語に子曰く、賢者は世を辟け、其の次は地を辟け、其の次は色を辟け、其の次は言を辟く。子曰く、作すものは七人と、憲問是れ豈に長沮、桀溺の世を辟くるの士を稱せしものにあらずや。否、孔子は管に然るのみならず、更に百尺竿頭に一步を進めて、宛然是れ老莊家の口吻をなせるものあり。論語に子曰く、予言ふと無からんと欲す。子貢曰く、子如し言はざれば、小子何をか述べん。子曰く、天何をか言はんや。四時焉に行はれ、百物焉に生ず。天何をか言はんやと、陽貨是れ豈に老莊家の所謂清淨無爲にして自化するを説けるものと同一にあらずや。然るに孔子は此く理想的に世界觀の上にかゝる説をなしたるのみならず、亦現實的に人生觀の上にも此の説を爲したるものあり。論語に曰く、無爲にして治めしものは其れ舜なるか。夫れ何の爲めぞや。己を恭しうして、正南面するのみと、衛靈公是に於いて吾人は超世思想の孔子に影響せりしもの太だ寡からざりしを覺えずんばあらず。然

れども此の後半の文を以ても知らるゝが如く、孔子の根本的思想は尙ほ巍然として動かざりしを見るべし。

さればこそ孔子が清談的に徒に人の大倫を無視する輩を痛く排斥したるは理なれ。論語に曰く、原壤夷つて俟つ。子曰く、幼にして弟ならず、長して述ぶるとなく、老いて死せざる。是れを賊と爲すと。杖を以てその脛を叩くと。憲問あり。何ぞ其の聲の凜として犯すべからず。その杖の力あるや。蓋し原壤は孔子の故人、嘗てその母死して歌へるの徒也。孔子の之を撃ちたる洵に無理ならぬと謂ふべし。

意ふに孔子が原壤を斥けたるはその亂倫を惡んで也。若しそれ然らずんば、焉ぞ此の過激の行あるべけんや。是れ夫の柳下惠、少連を稱したるを以ても知るとを得べし。此の如くなりし程に、孔子は晩年に至つて、大に彼の隱遁者流に同情を寄せぬ。論語に子曰く、中行を得て、之に與みせずんば、必ずや狂狷か。狂者は進取し、狷者は爲さざる所ありと。子路孟子は之を解して曰く、孔子豈に中道を欲せざらんや。必ずしも得べからず。故に其の次を思へる也。敢て問ふ如何な



るを斯れ狂と謂ふべきか。曰く、琴張、曾皙、牧皮の如きものは孔子の所謂狂也。何を以て之を狂と謂ふや。曰く、其の志嚮々然として曰く、古の人、古の人と。其の行を夷考すれば、掩はざるもの也。狂者又得べからず。潔しとせざるを屑しとせざるの士を得て之に與みせんと欲す。是れ獯也。又其の次也。盡心孔子既に正行の人を得ず。比較的に思想の高潔なる者に與みせるを見るべきにあらずや。

されば論語に曰く、子路、曾皙、冉有、公西華侍坐。子曰く、吾れ一日爾に長ぜるを以て、吾を以てすると、母れ居るときは則ち曰く、吾れを知らずと。如し爾を知るとあらば、何を以てするや。子路、率爾として對へて曰く、千乗の國、大國の間に攝し、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てせんに、由や之を爲めば三年に及ばん比、勇あり且つ方ふところを知らしむべしと。夫子之を哂ふ。求爾は何如對へて曰く、方六七十、如しくは五六十、求や之を爲めば、三年に及ばん比、民を足らしむべし。其の禮樂の如きは、以て君子を俟たんと。赤爾は何如對へて曰く、之を能くすとは、曰ふにあらず。願はくは焉れを學び、宗廟の事、如しくは會同に端章甫して、願はくは小相と爲らんと。點爾は何如瑟を鼓くとを希め、鏗爾とし

て瑟を舍き、作つて對へて曰く、二三子者の撰に異なる。子曰く、何ぞ痛まんや。亦各その志を言へる也。曰く、莫春には春服既に成らん。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風じ、詠して歸らんと。夫子喟然として歎じて曰く、吾れは點に與みせん也。先進以て孟子が狂狷の解の當れるを見るべく、從つて孔子が夫の隱遯者流に如何に同意する所ありしを知るべし。

孔子既に超世的脱俗の人に同情の念を有す。奚ぞ其の之に對する實踐的言論なかるべけんや。論語に子貢曰く、貧にして諂ふとなく、富みて驕るとなきは如何。子曰く、可也。未だ貧にして樂しみ、富みて禮を好むものに如かざる也。學而蓋し子貢の問甚だ好し。常人として之を守らば、確に正路の人也。然れども孔子の答の正しくして、而も窮屈ならず、積極的なに比すれば、流石に師弟の違ひとは、云へ、霄壤の差なきを得ざるなり。殊にその貧にして樂しむとは、眞に超世脱俗の思想より湧き來るにあらざれば、能はざる所にあらずや。然るに孔子は更に一步を進めて謂ひけらく、疏食を飯ひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕にし、樂しみ亦その中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮べる雲の如し。



と、述而又論語に子曰く、富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ亦之を爲さん。如し求むべからざれば、吾が好む所に従はんと。述而嗚呼、是れその心を安んじ、命に立ち、以て天を樂しむ。孔子が超世的思想の高潮に達せるを見るべきにあらずや。而も亦その後半の一句に於て、孔子が根本的思想の隱約の間に鼓吹せらるゝを見るべき也。

其れ此の如く超世の思想を有し、又これが實踐的の言論あり。孔子の容貌風采中焉ぞ此の思想の形はるゝものなきを得んや。論語に曰く、子温にして厲威にして猛ならず、恭にして安と。述而その恭而安なる、是れ兩思想融和の極その風采に形はれたるものにあらざるか。論語に又曰く、人知らずして慍らず、亦君子ならずやと。學而又論語に子曰く、我を知るとなき哉。子貢曰く、何ぞ其れ子を知るとなからんや。子曰く、天をも怨みず、人をも尤めず、下學して上達す。我を知るものは其れ天かと。憲問嗚呼、悠々たる浮鷗の心、是れ豈に禮樂思想と超世思想との圓熟融和の項點に達せるものにあらずや。

門人の超世

孔子が所謂狂癡の士とは、超世思想を懷ける一種の市隱の人也。孟子は萬章の間に對へて、琴張曾皙、牧皮の如きもの、孔子の所謂狂者なりと、盡心謂ひしが、牧皮の事は如何なる人物なりしや、詳に知ると能はず。然れども、琴張曾皙に至つては、諸書に散見せし所を湊合して、その明に老莊的思想を懷きしものなるを知るべし。殊に孔子の門人が各眞面目に其の抱負を吐露するに當り、獨り曾皙のみ、暮春沂に浴し、詠じて歸らんと對へたるが如き、その世事に踟躕せざる所を以ても、如何にその思想の超世的に傾けるかを知るに足らずや。禮記に曰く、季武子疾に寢ね、其の喪に及んでや、曾點門に倚つて歌ふと。檀弓是れ老莊者流が尋常茶飯的の事を爲せるものにあらずや。

琴張は孔子の門人にして、嘗て宗魯が死を聞いて往いて之を弔せんとしたる人也。左傳昭公二十年、莊子に曰く、子桑戶、孟子反、子琴張相與に友たり。子桑戶死す、未だ葬らず。孔子之を聞き、子貢をして事を待せしむ。或は曲を編み、或は琴を鼓し、相和して歌つて曰く、嗟來桑戶乎、嗟來桑戶乎、而已。其の眞に反り、我猶ほ人爲り、猶と。子貢進んで曰く、敢て問ふ、戸に臨んで歌ふは、禮かと。二人相視て



笑つて曰く、是れ惡ぞ禮の意を知らんと、大宗師是に由つて之を觀れば、曾皙と云ひ、子琴長といひ、その生涯一に何ぞ老莊者流に異ならざるや、其の他原憲の孔子歿後に窮閭に隠れたるが如き、司寇參照皆是れ、隱者の影響が管に、その師、孔子のみならず、その門生にまでも能く及べるを見るべきに、あらずや、

顔回は孔門中第一の高足也、而してその超世思想の圓熟せるも亦孔門に於いての第一流也、論語に曰く、回や其れ庶いかな、屢空しと、先進何晏の集解に之を註して曰く、屢は猶ほ毎の如き也、空は猶ほ虚中の如き也、聖人の善道を以て、數子の庶幾を教ふる、猶ほ道を知るに至らざるものは、各内に此の害あれば也、其の庶幾に於いて、毎に能く虚中なるものは、唯だ回道を懐ふこと深遠、心を虚にせざれば、道を知ると能はずと、是れ孔子が回の道に近く、而も亦能く貧に安んぜるを稱せるもの、又以て老莊的思想に近きを見るべし、論語に又子曰く、賢なる哉、回や、一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪へず、回やその樂を改めず、賢なる哉、回やと、雍也、孟子に曰く、顔子亂世に當り、陋巷に居り、一箪の食、一瓢の飲、人其の憂に堪へず、顔子其の樂を改めず、孔子之を賢とすと、離婁その

貧、簞に甘ない、泰然として樂を改めざる、其の心煩瑣なる、世事に拘々たるもの焉、之を能くする所ならんや、是れ亦超世思想の影響と見るも、敢て過當にあらざるべきか、



## 九 孔子の門人

昔人謂ふ、隱括の旁、柱木多く、良醫の門、疾人多しと、然り、孔子は、人心の良醫也、心病の徒焉を其の門に蟬集せざらんや、史記に曰く、弟子蓋し三千、身六藝に通ずるもの七十二人と、世家意ふに三千とは其の大數を擧げたるものならんも、七十二人とは古くより傳へられたる言ならずんば、孟子曰く、徳を以て人を服するものは、中心悦んで誠に服す、七十子の孔子に服するが如きなりと、(公孫丑)龍門の司馬遷、その門人傳を作り、七十子を稱して、皆異能の士也、(列傳)と謂へり、論語に曰く、徳行には、顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語には、宰我、子貢、政事には、冉有、季路、文學には、子游、子夏と、先進蓋し此等の十子は何れも孔子の門人中出色の人々なりければ、後世之を孔門の十哲と稱す。

然るに程子は之を否定して曰く、四科は乃ち夫子に陳蔡に従へるもの、み門人の賢者固より此に止まらず、曾子、道を傳へて與らず、故に、十哲は世の俗論たるを知ると、然り、之を孔子の十哲と稱して、孔門中他に人物なきが若く思惟

するは大なる誤也、然れども此等の四科の中、十子は各その之に長ずる所ありしは事實也、孟子に曰く、宰我、子貢、善く説辭を爲し、冉牛、閔子、顔淵は善く徳行を言ふと、(公孫丑)又曰く、昔者、窃に之を聞く、子夏、子游、子張は皆聖人の一體あり、冉牛、閔子、顔淵は體を具へて、微也と、(公孫丑)こは元、孟子の言にあらずして、その門人公孫丑の言なれば、據るに足らざるに似たりと雖も、その屢之を稱せるを見ても、尙ほ之を信ずるに足らんか。

一に徳行、二に言語、三に政事、四に文學、由來之を四科と稱す、之を以て人或は孔子が初めより之を分ちて教へたりと爲すものあるも、決して然らず、殊に彼の論語に於ける、子四を以て教ふ、文行忠信と、(述而)の言を以て四科に充て、配當するが如きは、最も非也、何となれば、孔子の教育の主とする所は、博文約禮にして、窮竟之を仁に歸納せしむるに存すれば也。

既に程子が云ひし如く、以上十哲の外、尙ほ曾子、子張、有若等の如き俊髦なきにあらざれば、吾人は此等數者をも並せて其の人物の一斑を覗はんとす。



髣髴乎として孔子が面影を有し、殆ど小孔子とも稱すべきものは、それ惟だ  
 顔回なるか。顔子名は回字を子淵と云ふ魯の人也。論語に曰く、顔淵仁を問ふ。子  
 曰く、克己復禮を仁となす。一日克己なれば、天下仁に歸す。仁を爲すと己に由り、  
 人に由らんや。顔淵曰く、請ふ其の目を問はん。子曰く、禮にあらざれば見ると勿  
 れ。禮にあらざれば聴くと勿れ。禮にあらざれば言ふと勿れ。禮にあらざれば動  
 くと勿れ。顔淵曰く、回不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせんと。顔淵是に於いてか  
 眞摯にして洒脱なる顔淵は、孜孜矻々として之を攻むるも、尙ほ難きものあり  
 しと覺えしにや。論語に曰く、顔淵喟然として嘆じて曰く、之を仰げば彌高く、之  
 を鑽れば彌堅し。之を瞻るに前に在りとすれば、忽焉として後に在り。夫子循々  
 然として善く人を誘ひ、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷  
 めんと欲すれども能はず、既に吾が力を竭くし、立つ所あつて、卓爾たるが如く、  
 之に従はんと欲すと雖も、由し末きのみと。子罕嗚呼、顔淵の如きは、その道を信  
 ずるとの厚き、所謂朝に道を聞いて夕に死なんも可也と。里仁の概あるものに  
 あらずや。

されば孔子も口を極めて顔回を稱して曰く、之と語つて惰らざるものは、其  
 れ回なるかなと。子罕又論語に子曰く、回や其の心三月仁に違はず、其餘は日  
 月に至るのみと。雍也以て顔回が進學修徳の堅實なる狀を見るべし。論語に又  
 曰く、子顔淵に謂つて曰く、惜いかな吾れ其の進むを見るも、未だ其の止まるを  
 見ざる也と。子罕是れ恐らくは顔回死後に於ける孔子の感慨ならんも、抑も亦  
 回の如何に進修不息の念に疆かりしを見るべき也。  
 論語に子曰く、吾れ回と言ふと終日違はず、愚なるが如し。退いて其の私を省  
 みるに、亦以て發するに足れり。回や愚ならずと。爲政その默然として心識し、觸  
 處洞然として條理ある回や、實に孔子の衣鉢を傳へたりと。謂ふも不可をから  
 んか。是に於いてか孔子之を稱しけらく、子顔淵に謂つて曰く、之を用ふるとき  
 は、行ひ之を捨つるときは、藏むるは惟だ我と爾とのみ是れあるかなと。子路曰  
 く、子三軍を行るときは、誰れと與にせん。子曰く、暴虎馮河、死して悔いなきもの  
 は、吾れ與みせざる也。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好んで成るもの也と。述而孔  
 子が子路の血氣の勇を抑へて、顔回の行藏を稱せるや、實に至れりと謂ふべし。



嘗て顔回、子路と同じく孔子の側に在り、各その志を云ふ。論語に曰く、顔淵季路侍す。子曰く、盍ぞ各爾の志を言はざるや。子路曰く、願はくは車馬衣輕裘、朋友と共にして之を敝るとも憾みなけんと。顔淵曰く、願はくは善に伐るとなく、勞を施すとながらんと。子路曰く、願はくば子の志を聞かん。子曰く、老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けんと。公冶長、回の善に矜らず、勞を厭はざる。眞に夫子が溫良恭儉讓の旨を得たるものにあらずや。

論語に又曰く、子貢に謂つて曰く、女と回と孰れか愈れりや。對へて曰く、賜や、何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞いて十を知る。賜や一を聞いて二を知ると。子曰く、如かざる也。吾は女が如かざるに與みする也。公冶長、あゝ、子貢の明敏を以てして、尙ほ回に及ばずと云ふ。而も回や敢て自ら矜伐する所些少だもなし。是れ回の人物の偉大なる所にあらずや。

然り、顔回はその修養の極、殆ど其の人格、孔子の壘を塵せんとするものありしが、不幸短命にして夭死せり。是に於いてか孔子嘆じて曰く、吾れ回ありてより、門人益親しむと。弟子傳論語に曰く、顔淵死す。子曰く、噫、天子を喪せり。天子を

喪せりと。先進その天喪予の語。一に何ぞ其れ沈痛悲哀なるを。論語に又曰く、顔淵死す。子哭して慟す。從者曰く、子慟すと。慟するとは有るか。夫の人の爲めに慟するにあらずして、誰れにか爲さんと。先進意へらく、孔子知らずして慟す。從者に云はれて始めて之を悟り、曰く、是れ誰にか爲さん。顔淵の爲めにせる也。以て何如に回の死を悼めるかを見るべし。

顔回の死するや、一に其の師孔子に對しての大打撃なるのみならず、門人中に於いても、亦その棟梁の材を喪へるが如き感ありしにや。論語に曰く、顔淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。子曰く、不可なりと。門人厚く之を葬むる。子曰く、回や子を視ると猶ほ父の如く、予視ると猶ほ子の如くなるを得ざるは、我にあらず。夫の二三子也。と。先進その禮を犯して、までも尙ほ之を厚葬せるは、門人に回の德を慕へるが爲めにあらずるか。

孔子門人を有すると三千、而も最も望を屬せしものは、顔回也。然るに不幸にして蚤死せしかば、孔子は晩年に於いて、その追懷の情禁へざりしものありしにや。季康子が弟子孰れか好學の人なりしやを問へるに、孔子對へて顔回と云



ふものあり。學を好む。不幸短命にして死せり。今や亡しと云ひぬ。先進論語に又曰く。哀公問ふ。弟子孰れか學を好むと爲す。孔子對へて曰く。顔回と云ふものあり。學を好み。怒を遷さず。過を貳たびせず。不幸短命にして死せり。今や亡し。未だ學を好むものを聞かざる也。雍也。嗚呼。孔門中。彬々たる多士。濟々として聚まる。而も未だ好學のものを聞かずと云ふ。是れ以て孔子が如何に回を期待せしかを見るべきにあらずや。

## 子路

孔門三千の中。最も異彩を放てるものは子路。その人にあらずや。蓋し子路の性や。率直にして。敢て飾らず。肯て憚るとなれば也。子路。姓を仲と云ひ。名を由と云ふ。子路はその字也。又一の字を季路と云ふ。孔子。子路に謂つて曰く。由之を知るとを誨へんか。之を知るを知ると爲し。知らざるを知らずと爲せ。是れ知る也。爲政以て。孔子が子路の性。伉直不屈なるを矯めんとしたるその親切なるを見るべし。然れども子路の孔子に稱せられしとは一再にあらず。論語に子曰く。敝れたる縵袍を衣。狐貉を衣るものと立ちて。恥ぢざるものは其れ由か。伎ら

ず。求らず。何を用ひてか。臧からざらんや。と子路終身之を誦せんとす。子曰く。是れ道也。何ぞ以て臧しとするに足らんや。と。子罕。是れ子路が悍然たる邁往勇進の行を稱せるものにあらずや。論語に又子曰く。片言以て獄を折つべきものは其れ由か。と。子路諾を宿すると。なすと。顔淵。是れ子路が言を踐むとの急にして。而もその人となり。忠信明決なるを稱せるもの也。又論語に子曰く。道行はれず。桴に乗じて海に浮ばんか。我に従ふものは其れ由か。と。子路之を聞き喜ぶ。子曰く。由や。勇を好むと。我に過ぎ材を取る所なし。と。公治長亦以て孔子が子路を稱すると同時に。能くその人を愛し。その性に從つて之を導かんとする情を見るべし。

蓋し子路。性勇悍にして。政事の材あり。論語に曰く。孟武伯問ふ。子路仁か。子曰く。知らざる也。と。又問ふ。子曰く。由や。千乗の國。其の職を治めしむべき也。其の仁を知らずと。求や。何如。子曰く。求や。千室の邑。百乗の家。之が宰たらしむべき也。其の仁を知らずと。赤や。公西華のと。何如。子曰く。赤や。東帶して朝に立ち。賓客と言はしむべき也。其の仁を知らずと。公治長。又論語に曰く。季康子問ふ。仲由政に從



はしむべきや。子曰く、由や果政に従ふに於いて何かあらん。曰く、賜や政に従はしむべきや。曰く、賜や達政に従はしむるに於て何かあらん。求や政に従はしむべきや。曰く、求や藝政に従はしむるに於いて何かあらん。又論語に曰く、季子然問ふ、仲由、冉求、大臣と謂ふべきか。子曰く、吾れ子を以て異なる問となす、曾子由と求との問を所謂大臣とは道を以て君に事ふ。不可なれば則ち止む。今由と求とは具臣と謂ふべし。曰く、然らば則ち之に従ふものか。子曰く、父と君とを殺すには亦従はざる也。先進以上三條の語説如何に。子路が毅然たる大丈夫にして、而も亦政事に通ぜしかを見るべし。

率直なる子路嘗て瑟を鼓す。孔子之を難せしかば、門人皆子路を慢る。論語に子曰く、由の瑟、奚ぞ丘の門に於いてせんと。門人子路を敬せず。子曰く、由や堂に升り、未だ室に入らざる也。先進あり、何ぞ毀譽の當を得たる。の、一に爰に至れるや。されば論語の記者も、子路の爲人を稱して、子路聞くことありて、未だ之を行ふと能はざれば、唯だ聞あるを恐ると(公冶長云ひぬ。

論語に曰く、閔子側侍し、閔々如たり。子路行々如たり。冉有、子貢侃々如たり。

子樂しむ。由の如きは其の死然を得ずと。先進果せる哉。子路卒に衛の孔悝の難に死しぬ。子路死する時、石乞孟獻が爲めに纓を斷たる。曰く、君子死するも冠免がずと。纓を結んで死す。孔子衛の亂を聞いて曰く、柴や其れ來らん。由や其れ死なんと。哀公十五年已にして果して然り。孔子晩年に子路を哭して曰く、吾れ由を得てより惡言耳に聞えずと。弟子傳以て孔門中一日も此の人なかるべからざるを見るべし。

子貢

子貢は孔子の門人中能く孔子を知れるの一人也。術の人、端木賜と云ふ。子貢はその字也。人と爲り明敏にして辭令に巧也。論語に曰く、子貢人を方ぶ。子曰く、賜や賢なる哉。我は暇あらずと。憲問又以てその人物の明敏なるを見るべし。門人及び子路参照論語に又、子貢曰く、貧にして語ふとなく、富みて驕るとなきは。何如子曰く、可也。未だ貧にして樂み、富みて禮を好むものに若かざる也。子貢曰く、詩に云はく、切るが如く、磋くが如く、琢くが如く、磨くが如しとは、其れ斯れが謂ひか。子曰く、賜や始めて與に詩を言ふべきのみ。諸れを往に告げて來者を知



と(學而)孔子が其の歩一步誘掖して道に導かんとする親切を見るべし。論語に子貢問うて曰く、賜や如何。曰く、女は器也。子貢曰く、何の器ぞや。曰く、瑚璉也。(公冶長)以て見るべし。孔子が子貢に許すに大器を以てせずと雖も、尙その材を稱せるを(顔回参照)

子貢亦貨殖に長ず。論語に曰く、賜や命を受けずして貨殖し、億ひ屢中ると。先進子貢、孔子歿後魯衛に相として重んぜられ、遂に齊に終りぬ。

閔子騫

閔損字を子騫と云ふ。孔子その徳行を稱す。門人参照論語に曰く、孝なる哉。閔子騫其の父母昆弟の言を聞てずと。先進季氏嘗て閔子騫をして費の宰となさんとす。閔子騫その祿を食むとを屑しとせずして之を辭せり。論語に曰く、季氏閔子騫をして費の宰と爲さしめんとす。閔子騫曰く、善く我が爲めに辭せよ。如し我を復たひするものあらば、吾を必ず汝上に在らんと。雍也又以て其の高潔の志を見るべし。

冉伯牛

冉伯牛、名を耕と云ひ、伯牛はその字也。孔子又その徳行を稱す。門人参照伯牛、惡疾の癩を病む。論語に曰く、伯牛疾あり、子之を問ふ。牖より其の手を執つて曰く、これ亡けん命なるかな。斯の人にして斯の疾あり。斯の人にして斯の疾ありと(雍也)意へらく、此の人にして此の疾あるべからず、今これあるは命の致す所かと。亦以て孔子が伯牛を哀惜せる情の深きを見るべきにあらずや。

仲弓

冉雍字を仲弓と云ふ。伯牛の宗族也。論語に曰く、仲弓仁を問ふ。子曰く、門を出ては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭に承ふまつるが如くす。己の欲せざる所、人に施すと勿れ。邦に在つても怨みなく、家に在つても怨みなしと。仲弓曰く、雍や不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせんと。顔淵されば孔子も亦仲弓を稱して徳行ありと爲せり。門人参照論語に或は曰く、雍や仁にして佞ならずと。子曰く、焉ぞ佞を用ひん。人に禦るに給を以てせば、屢人に憎まる。其の仁を知らざるも、焉ぞ佞を用ひんと。公冶長意へらく、我れ未だ雍の仁を知らずと雖も、その不佞なるは賢として病むに足らずと。論語に又子曰く、雍や南面せしむべし。



仲弓、子桑伯子を問ふ。子曰く、可也。簡なりと。仲弓曰く、敬に居て簡を行ひ、以て其の民に臨む、亦可ならずや。簡に居て簡を行ふ、無乃大簡なんら。子曰く、雍が言然りと。雍也、以て其の言行共に孔子の是認する所となりしを見るべし。

論語に曰く、子仲弓に謂つて曰く、犁牛の子、驂うして且つ角あり、用ふるとなからんと欲するも、山川其れ諸れを捨てんやと。雍也、蓋し仲弓の父、賤にして其の行嘗て悪也、故に犁牛を以て之に譬へ、よし父の悪あるも、その子を廢すべからざるを言へるもの也。

冉有

冉求、字は子有、人と爲り、政治に長ず。門人及び子路、參照、嘗て道を悦ばず、孔子に叱せらる。論語に冉求曰く、子の道を説ばざるにあらず、力足らざれば也と。子曰く、力足らざるものは中道にして廢す。今女は畫れりと。雍也、然れども冉求、後季孫氏に事へ、齊と戰つて功あり。魯參照、又季氏が爲めに其の私家を肥やす。魯の國老參照、論語に曰く、季氏、周公より富む、而して求や、之が爲めに聚斂して、之を附益す。子曰く、吾が徒に非ず。小子、鼓を鳴らして、之を攻めて可也と。先進、孟子

に曰く、求や、季氏の宰と爲り、能く其の後を改むるとなくして、粟を賦すると、他日に倍す。孔子曰く、求は我が徒にあらず、小子、鼓を鳴らして、之を攻めて可也と。是に由つて、之を觀るに、君仁政を行はずして、之を富ますものは、皆孔子に棄てらるゝもの也と。離婁、是れ冉有が經濟の才に富みたるを見るべきと同時に、孔子が如何に其の仁政主義を鼓吹せりしかを見るべきにあらずや。

宰我

宰我、名を予と云ひ、子我はその字也、最も辭令に長じ、孔子も亦之を稱せり。門人參照、論語に曰く、宰予、晝寢、ねぬ。子曰く、朽木は彫るべからず、糞土の牆は朽べからず。予に於いて何をか誅めんと。子曰く、始め吾れ人に於いて其の言を聽いて、其の行を信ず、今吾れ人に於いて其の行を觀る、予に於いて是を改むと。公治長、孔子が怠慢の人を責むる辭色、厲にして婉、而も力ありと謂ふべし、而して其の言を聽いて、行を信ずと云ふに至つては、宰我の如何に辭令に達せりしかを見るべきにあらずや。

論語に曰く、宰我問ふ、三年の喪は、期已に久し、君子三年禮を爲さざれば、禮必



ず壞れん、三年樂を爲さざれば、樂必ず崩れん、舊穀既に没きて、新穀既に升る、燧を鑽り、火を改む、期已むべしと。子曰く、夫の稻を食ひ、夫の錦を衣て、女に於いて安からんか、曰く、安し。女安からば、之を爲せ。夫れ君子の喪に居るや、旨を食ひて甘からず、樂を聞いて樂しからず、居處安からず、故に爲さざる也。今女安ければ、之を爲せと。幸我出づ。子曰く、予は不仁也。子生れて三年、然る後に父母の懷を免る。夫れ三年の喪は天下の通喪也。予や三年の愛、其の父母にあるか。陽貨末段の語、意へらく、予も亦人の子也。三年の愛を其の父母に受けたる、となきか。然らずんば、何ぞそれ、不仁なるやと。

意ふに孔子が三年の喪を主張せるは、その立脚地一に孝に在り、而して之に對する、宰我の立脚地は世變に在り、孔子の至孝なる、而も此の言あるは、さる事ながら、吾人は斯かる長期の喪は、到底時世に應ずると能はざる點より、寧ろ幸我の見、に服せざるを得ざる也。

子游

子游は吳の人、姓は言、名は偃、子游はその字也。子夏と與に文學に長ず、門人參

照嘗て武城の宰となり、大に治績あり。論語に曰く、子游武城の宰となる。子曰く、女人を得たる乎。曰く、澹臺滅明と云ふものあり。行徑に由らず、公事にあらざれば、未だ嘗て偃の室に至らざる也。雍也凡そ國を治めんとするものは、必ず人を攬る。子游既に此の公正の人を得たり。奚ぞ其の治績の擧がらざるを得んや。論語に曰く、子武城に之き、絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑つて曰く、鶏を割くに、焉ぞ牛刀を用ひんやと。子游對へて曰く、昔者偃や諸れを、夫子に聞く、曰く、君子道を學べば、人を愛し、小人道を學べば、使ひ易しと。子曰く、二三子偃の言是也。前言は之を戯むるのみと。陽貨、夫子が洋々たる絃歌を聞いて喜べると、將た子游文藝に長して能く國を治めしを見るべきにあらずや。

子張

顓孫師は字を子張と云ふ。陳の人也。その人と爲り、極めて矜高也。論語に曰く、子張行を問ふ。子曰く、言忠信、行篤敬、なれば、蠻貊の國と雖も、行はれ、言、忠信ならず、行、篤敬ならざれば、州里と雖も、行はれんや。立てば其の前に參するを見、輿に在れば、其の衡に倚るを見、夫れ然る後に行はると、子張諸れを紳に書すと。衛靈



公論語に又子游曰く吾が友張や能くし難きを爲す然り而して未だ仁ならずと子張又曾子曰く堂々乎たる張や與に並んで仁を爲し難しと子張又以て其の人物の如何に過高なりしを見るべし(子夏参照)

子夏

子夏は孔門に於ける高足の一人也その教學を傳へて後世に貢獻せしと亦尠からず曾子は仁の方面を拓き子夏は禮の方面を開いて後の荀卿子を起す子夏姓をトと云ひ名を商と云ふ子夏はその字也孔子子夏に謂つて曰く女君子の儒となり小人の儒となると勿れと(雍也論語に又曰く子貢問ふ師子張のとと商と孰れが賢となす子曰く師や過ぎ商や及ばずと曰く然らば師愈れるか子曰く過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと(先進此の子貢の問偶以て子夏子張共に孔門俊傑の士なりしを見るべきにあらずやされば論語に子夏問うて曰く巧笑倩たり美目盼たり素以て綸と爲すとは何の謂ひぞやと子曰く繪事は素を後にすと曰く禮は後にするか子曰く予を起すものは高也始めて與に詩を言ふべきのみと(八佾孔子が此の歎稱亦以て子夏の文藝に通ぜりし

を思ふべし(門人参照)

子夏孔子歿後西河に居て其の徒に教授す後魏の文侯の師となり大に魏に重んぜらる其の子死し之を哭して明を失へりと云ひ傳ふ

曾子

曾子は孔子が教學を傳へて後世に多大なる影響を與へしは子夏に譲らず否曾子は孔子が晩年の高足にして嶄然として頭角を露はせるは其の言行を見て明にして又その後世に及ぼせる點より云へば孔門三千の中第一位を占むと云ふも敢て過當にあらざる也

曾子名は參字を子與と云ふ魯の南武城の人嘗て孔子が與みせる夫の曾點の子也論語に子曰く參や吾が道一以て之を貫くと曾子曰く唯と子出づ門人に問うて曰く何の謂ひぞや曾子曰く夫子の道は忠恕のみと(里仁蓋し曾子は夙に孝を以て稱せらる事多く孟子禮記戴禮等に詳也)

意ふに孔子の學は仁と禮との一方面より成り之を一貫するに天を以てしたるもの然るに曾子は其の主要なる仁の方面を開拓して之を子思に傳へ子



思は之を孟子に傳へ孟子は之を集成して後世宋明の學の端を開く而してこれが儒を爲せるもの實に曾子に歸せずんばあらず又以て曾子が儒門に於ける位地の高きを知るべし。

以上は孔門の高弟若干者を多く論語によりて叙述したるものなるが此の外有若原憲子賤公冶長子羔等の人物なきにあらずと雖も今は其の樞要なる人材に就いてこれが要を約したるのみ。

\* \* \* \* \*

一〇 孔子の子孫

世界は廣く歴史は長しと雖も人爵天爵並び有し歲月は二千年以上に亘りその光榮天地と俱に無窮なるものは長くも我が皇室を除いてはそれ唯だ孔子の一家のみならんか。

蓋し孔子は享年七十四歳のみ身は徒に轅軻不遇を以て終はりしもの然るに世の尊崇は日月と與に加はりその子孫は亦歲月と俱に榮えその郷里は今に至つて孔里と稱せられ歴朝社會の變動ありしにも拘らずその子孫の尊榮益新なるは是れ豈に千古不朽の盛事と謂ふべきものにあらずや而して此の事全く孔子が絶大なる人格より出てし餘徳にあらずや。

伯魚

孔子弱冠の頃妻を娶りて一男一女を擧ぐ論語に曰く子公冶長を謂つて妻はすべき也縹紵の中に在りと雖も其の罪にあらざる也と其の子を以て之に妻はすと公冶長是れ一女子ありしその左券にあらずや。



蓋し一男とは即ち伯魚のとも也。伯魚名は鯉。伯魚とはその字也。鯉人と爲り凡庸にして他の技なし。論語に曰く、陳亢伯魚に問うて曰く、子も亦異聞あるか。對へて曰く、未だし。嘗て獨立す。鯉趨つて庭を過ぐ。曰く、詩を學びたるか。對へて曰く、未だし。詩を學ばざれば以て言ふとなし。鯉退いて詩を學ぶ。他日又獨立す。鯉趨つて庭を過ぐ。曰く、禮を學びたるか。對へて曰く、未だし。禮を學ばざれば以て立つとなし。鯉退いて禮を學ぶ。斯の二者を聞くのみと。陳亢退いて喜んで曰く、一を問うて三を得。詩を聞き、禮を聞き、又君子の其の子を遠ざくるを聞ける也。季氏見るべし。孔子の伯魚を教ふる。嘗て他の門生と異なるものなきと。論語に曰く、子伯魚に謂つて曰く、女、周南召南を爲めたるか。人にして周南召南を爲めざれば、其れ猶ほ正牆面して立てるが如きかと。陽貨。

伯魚乃父に就き、詩書禮樂を修めし。その不木なる到底その箕裘を紹ぐべき器にあらず。論語に曰く、顔淵死す。顔路回の父子の車を請ひて之が椁と爲さんとす。子曰く、才不才亦其の子を言ふ也。鯉や死して棺ありて椁なし。吾れ徒行して椁を爲さず。吾れ大夫の後に從ふを以て徒行すべからざれば也。先進是

に由つて之を觀れば、伯魚の孔子に先つて死せるも、明なると同時に、その不才なりしも亦明なりと謂ふべし。蓋し伯魚死せしとき、年まさに五十。

子思

子思は伯魚の子。孔子の孫也。名を伋と云ひ、字を子思と云ふ。史記に曰く、伯魚伋を生む。字は子思。年六十二。嘗て宋に困しみ、中庸を作ると。世家孔叢子に子思が中庸を作る消息を傳へて曰く、子思年十六にして宋に適く。宋の大夫樂朔之と學を言ふ。朔曰く、尙書は虞夏の數四篇善し。此れより下以て秦費に訖つては堯舜の言に效ふのみ。殊に如かざる也。子思答へて曰く、事變極りあり。正に自ら當るのみ。假令周公堯舜時を更へ、處を異にするも、其の書は同じと。朔曰く、凡そ書の作は以て民を諭さんと欲す。簡易を上と爲す。乃ち故に難知の詞を作らば亦繁ならずや。子思曰く、書の意兼複深奥なるは訓話義を成す。古人が典雅を爲す所以なり。昔魯の委巷にも亦君が言に似たるものあり。伋之に謂つて曰く、道は知者の爲めに傳ふ。苟も其の人にあらざれば、道貴からず。今君何ぞ之に似たるとの甚だしきやと。樂朔悦ばずして退いて曰く、孺子吾を辱かしむ。其の



徒曰く魯は宋を以て舊なりと爲すと雖も然れども世讐あり請ふ之を攻めんと遂に子思を圍む宋君之を聞き駕を待たずして子思を救ふ子思既に免れて曰く文王は姜里に拘はれて周易を作り尼父は陳蔡に屈して春秋を作る吾れ宋に困しむ作なかるべけんやと是に於いて父師の意を述べて中庸四十九篇を作ると年十六にして中庸を作るとは信ずべからずと雖もその子思が作たるは斷じて疑を容るざる所也

子思學を曾子に受け特に精微を極む長じて宋衛に遊ぶその人と爲り嚴峻にして忠亮孟子に曰く子思衛に居り齊の寇あり或は曰く寇至る盍ぞ去らざるや子思曰く如し仮去らば君誰れと與にか守らんと離婁嗚呼仮去らば君誰れと與に守らんとは何ぞ其の志の忠烈なるや

通鑑に曰く子思苟變を衛侯に言つて曰く其の才五百乘に將たるべしと公曰く吾れも其の將たるべきを知る然れども變や嘗て吏と爲り民に賦して人の二鷄子を食む故に用ひざる也と子思曰く夫れ聖人の人を官するや猶ほ匠の木を用ふるが如し其の長ずる所を取り其の短とする所を棄つ故に杞梓連

抱にして數尺の朽あるも良工は棄てず今君戰國の世に處り瓜牙の士を選び二卵を以て干城の將を棄つ此れ隣國をして聞かしむべからずと公再拜して曰く謹んで教を受けんと周紀一又曰く衛侯計を言ふや群臣和するもの一口に出づるが如し子思曰く吾れを以て衛を觀るに所謂君々たらざ臣々たらざるもの也公丘懿子曰く何ぞ乃ち是の如くなるや子思曰く人主自ら臧しとすれば衆謀進まず事是にして之を臧しとすれば猶ほ衆謀を却く况んや非に和して惡を長ずるをや夫れ事の是非を察せずして人の己を讚するを悦ぶ聞焉れより甚だしきは莫し理ある所を度らず而して阿諛容を求む諂焉れより込だしきは莫し君闇にして臣諂を以て百姓の上に居りて民與からず此の若くにして已まざれば國類なげんと又子思衛侯に言つて曰く君の國事將に日に非ならんとす公曰く何故ぞや對へて曰く由然たるものあり君言を出して自ら以て是となし而して卿大夫敢て其の非を矯むるとなし卿大夫言を出す亦自ら以て是となし而して士庶人敢て其の非を矯むるとなし君臣既に自ら賢而して群下同聲に之を賢とす之を賢とすれば順にして福あり之を矯むれば逆



にして禍あり此の如くならば善安より生ぜん詩に曰く俱に予を聖と曰ふ誰れか鳥の雌雄を知らんや抑も亦君の君臣に似たる乎と周紀一その挺然として時運の悲を慨する忠烈の氣自ら見るべきにあらずや

子思晩年に魯に歸り魯の繆公の師となる孟子に曰く繆公の子思に於けるや亟問ひ亟鼎肉を餽る子思悦ばずして卒りに於いて使者を標いて諸れを大門の外に出し北面稽者再拜して受けずして曰く今にして後君の犬馬の如く僕を畜へるを知ると萬章孟子之を解して曰く子思以爲らく鼎肉己をして僕々爾として亟拜せしむと以て子思が老いて益壯にして如何に非禮の餽りを却けたるを見るべし

子思當時老莊の學盛にして儒家の徒之と對抗し難きを見慨然として中庸を著はし立脚地を形而上學に置き天人一貫の理を明にして以てその祖父孔子の學の決して淺慮ならざるを辨ず此の如くにして子思たるもの眞に祖父の志業を辱しめずと謂ふべきかな

子思の子白字は子上これより轉輾して今代清朝に至つて尙ほ血脈連綿と

いて傳はり能く歷朝の客禮を受く

嗚呼孔子の徳の盛なる人爵天爵俱に至れるものと謂ふ尙ほ非なる乎



## 一 孔子の刪潤

孔子天下を周遊すると十四年、晩年に魯に還るや、魯の國勢陵夷して殆ど復た爲むべからず加ふるに君として哀公、臣として季康子、俱に是れ凡庸の器にして復た孔子を用ふるを知らず、孔子も亦志を當世に斷ち、専ら道を千載に傳へんと期す。是れ孔子が詩書禮樂の刪潤ありし所以也。是れ孔子が易傳春秋の述作ありし所以ならずんばあらず。

詩

史記に曰く、古は詩は三千餘篇、孔子に至るに及んで其の重なるを去り、禮義に施さるべきを取る。上は契、后稷を采り、中は殷周の盛を述べ、幽厲の缺に至り、狂席に始まる。故に曰く、關雎の亂、以て風の始と爲し、文王大雅の始めとなし、清廟頌の始めと爲す。三百五篇と。世家以爲へらく、當時魯及び其の他の諸國に傳へられたる詩歌の中に、或は名教を紊り、懿倫を害ふもの多し。是を以て孔子其の甚だしきを刪り、その善なるものを存して三百五篇となすと。論語に曰く、

詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思邪無しと爲政とは、蓋し此の謂ひならんか。

詩經は古單に詩と云へりしが、漢に至り、魯人申公の傳ふるものを魯詩と云ひ、齊人轅固生の傳ふるものを齊詩と云ひ、燕人韓嬰の傳ふるものを韓詩と云ふ。然れども今は皆亡佚して、魯人毛亨の傳ふるもののみ世に存す。之を毛詩と云ふ。現存する所の詩是れ也。宋の朱子に至り、之を尊んで詩經と爲す。蓋し孔子の手足を経たるを以て之を稱する也。

孔子詩を刪定してより之を門弟に授けると一再にあらざ、論語に子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成ると。泰伯論語に又子曰く、詩三百を誦し、之を授くるに政を以てして達せず、四方に使用して專對すると能はざれば、多と雖も亦奚を以てか爲さんと。子路蓋し是れ詩に興りて、また禮に立たず、樂に成らざるを説けるものにして、詩禮樂三者の偏廢すべからざるを説けるものにあらずや。又論語に子曰く、小子何ぞ夫の詩を學ぶとなきか。詩は以て興すべく、以て觀すべく、以て群すべく、以て怨すべし、之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識ると、陽貨以て詩の管に人性を陶冶するに必要なる



のみならず、博物の知識を得るを以て、その學ぶべきを獎勵したる状景見るべきにあらずや。

## 書

子思子謂ひけらく、仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章すと、中庸是れ間接に孔子が書を序したるを言へるものにあらずや。蓋し書は二帝三王の政教授受の記録にして、四千有餘年前の習俗遺風を窺ふに足るべき支那最古の經典たり。史記に曰く孔子の時、周室微にして禮樂廢し、詩書缺けたり。三代の禮を追迹し、書傳を序す。上は唐虞の隆を紀し、下は秦繆に至るまで、其の事を編すと、世家

書經は上古に唯だ書とのみ云ひしが、漢に至り尙書と名く、其の名の始めて見えしは墨子明鬼篇に在り、後宋に至り、朱子は又之を尊んで書經と名く。

蓋し書は孔子の編次せしものなれども、各篇の作者は各異なり。堯典、皐陶謨、夏書は夏の史官の作にして、商書は商史、周書は周史の録せしもの也。後、秦の焚書の厄に遭ひ、是れより書は今文、古文の兩書あるに至れり。今文は伏生の傳ふる所にして、古文は蝌蚪の文を、孔安國の讀みて、五十八篇となせるもの、是れ也。

## 禮

周禮悉く魯に在りと云はれたる魯も、孔子の晩年には大に廢頽して、又行はずになりぬ。論語に曰く、子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や爾は其の羊を愛し、我は其の禮を愛すと。八佾魯にして既に此の如し、况んや齊楚晋秦の諸國をや。是に於いてか、孔子慨然として、三代の禮を追迹して、之を後昆に垂れんと期しぬ。

史記に曰く、書傳禮記、孔氏よりすと。世家蓋し孔子は壯にして既に禮の達人を以て世に稱せられたるもの、而も其の禮を好めるは天性に出づるものあり。従つてその研鑽の精なる能く、三代の禮を明にして、又能く其の得失を窮めたるものあらむ。論語に子曰く、夏の禮、吾れ能く之を言ふも、杞、微するに足らず。殷の禮、吾れ能く之を言ふも、宋、微するに足らず。文獻足らざるが故也。足らば吾れ能く之を徵せんと、八佾以て三代の禮を研究せりしを見るべし。論語に又曰く、子張問ふ、十世知るべきや。子曰く、殷は夏の禮に因る、損益する所知るべき也。周は殷の禮に因る、損益する所知るべき也。其れ或は周に繼がんものは百世と雖



も知るべき也と爲政以て三代世を經るに從ひ禮の變遷したるを見るべく又孔子が能く夏般の損益したる迹を觀たるを知るべし。

論語に子曰く周は二代に監み郁々乎として文なる哉吾は周に從はんと八佾是れ豈に孔子が三代の禮なるものゝ損益する所を究明して周に至つて其の大備せるを讚せしものにあらずや。

## 樂

抑も孔子が他の聖賢と大に趣きを異にするものは主として其の藝術を尙びて之を愛好したるに在り蓋し孔子の政治的理想は之を正すに禮を以てし之を和ぐるに樂を以てするは是れやがて藝術を愛好せる所以のものならずんばあらず論語に子曰く道に志し徳に據り仁に依り藝に遊ぶと述而その藝に遊ぶの語藝術の如何に人格修養上必要なるを言へるものならずや又論語に子曰く詩に興り禮に立ち樂に成ると泰伯立禮成樂の語又以て孔子が政治的理想を見るべし。

孔子は既に樂に對して此の理想見地あるのみならず又その之を愛好する

や殆んど其の機微に觸るゝものありし也論語に子曰く師摯の始關雎の亂洋洋乎として耳に盈てるかなと泰伯以爲へらく魯の樂師たる摯が國風關雎の章を絃歌したる聲音今に至つて洋々として耳に在るが如しと論語に又曰く子齊に在り韶を聞き三月肉の味を知らず曰く圖らざりき樂を爲るの斯に至らんとはと述而是に由つて之を觀るに孔子は之を好むものは之を樂しむものに如かずとの樂しむ所の域に造れるものにあらずやされば孔子は其の樂を讚歎して次の如く判しぬ論語に曰く子韶を謂つて美を盡くし又善を盡くせり武を謂つて美を盡くし未だ善を盡くさざる也と八佾又曰く樂は韶武鄭聲を放ち佞人を遠ざけよ鄭聲は淫佞人は殆しと衛靈公蓋し韶は舜の樂武は武王の樂也前者は揖讓繼紹の美を盡くし後者は發揚蹈厲の美を盡くせるもの未だ善を盡くさざるものありと雖も共に美を盡くせるに至つては一也是れ孔子が韶武に憧憬せりし所以にあらずや。

孔子は既に樂に對して此の理想と抱負とありしが退いて當時を見れば禮樂の壞廢是の時より甚だしきはなし是れ孔子が樂を整理せんとしたる所以



也。論語に曰く、子魯の大師樂に語けて曰く、樂は其れ知るべき也。始め作すに翁如たり之を従つに純如たり、儼如たり、釋如たり、以て成ると。八佾朱子之を註して曰く、大師は樂官の名時に音樂廢缺す故に孔子之を教ふと。又論語に子曰く、吾れ衛より魯に反り、然る後に樂正しく、雅頌各其の所を得たりと。子罕是れ孔子が樂を正せる有力なる左券にあらずや。朱子又註して曰く、魯の哀公十一年の冬、孔子衛より魯に反る。是の時周禮魯に在り、然れども詩樂頗る殘缺して、次を失ふ。孔子四方を周流し、參互考訂して、以て其の說を知る。晚に道の終に行はれざるを知り、歸りて之を正すと。されば史記に之を讀して次の如く云ひぬ曰く、三百五篇孔子皆之を絃歌し、以て韶武雅頌の音に合ふを求む。禮樂此れより得て述ぶべし。以て王道に備へ、文藝を成すと。世家

易

嗚呼、晩かりし孔子の易を學べるとや。若しそれ孔子にして蚤くも易を學びたらんには、十四年の久しき、恐らくは栖々遑々として流落するとなかりしならん。然れども其の周流の際、隱者に遭逢して、或は意見の交換を爲せばこそ、孔

子が易を研鑽せんとする動機となりしなれ。論語に子曰く、我に數年を加し、五十以て易を學ば、以て大過なかるべしと。述而是れ、既往十四年の非を悟れるの遅かりしを悔悛せる言にあらずや。既に一たび悔悛して易の學ぶべきを知る、その知識欲の熾にして、老いて而もその志の衰へざる孔子、何ぞ之を研鑽せざらんや。然り孔子は殆ど寢食を忘れて之を致敷せるなりき。史記に曰く、易を讀むに、韋編三牘、絶つ曰く、我に數年を假し、是の若くならば、我や易に於いて、則ち彬々たらんと。世家是に於てか、孔子易の大傳を著して、その義を敷衍して、廣大なる世界觀を構成せるなりき。史記に曰く、孔子晩に易を喜ひ、象象繫說、卦文を序すと。世家

蓋し易は古來單に易、若くは周易と稱せり。後宋の朱子に至り、之を尊稱して、易經と云ふ。伏犧氏始めて八卦を畫し、神農氏之を重ねて六十四卦と爲す。然れども未だ辭あらず。周の文王、姜里に囚はるゝや、易の卦辭を繫く。是れより周易の名あり。文王の子周公旦、爻辭を造る。是に至つて、易經成れり。孔子更に之を敷衍して、象象繫說、卦文、序卦、雜卦を傳す。之を大傳。又は十翼と云ふ。



然るに易の十翼に就いては宋の歐陽永叔初めて疑を挾みてより和漢の學者之を疑ふもの甚だ多きを加へ大傳は全く孔子の作にあらずと爲すものあるに至れり然り十翼の大部分は孔子の作にあらずと雖も少くも繫辭傳のみは孔子晩年の筆作たるは疑ふべからず固より繫辭傳中多少後世の摠入あらんもその大體に於いて吾人は孔子の作なるを疑はざるもの也

## 春秋

孔子が一生の心血を灑ぎて著作したるものを春秋となす又法を萬世に垂れ君臣の義上下の分を明にしたるものも亦春秋と爲す孟子曰く世衰へ道微にして邪説暴行有た作る臣にして其の君を弑するもの之れあり子にして其の父を弑するもの之れあり孔子懼れて春秋を作る春秋は天子の事也是の故に孔子曰く我を知るものは其れ惟だ春秋乎我を罪するものは其れ惟だ春秋乎と滕文公又曰く昔者禹洪水を抑へて天下平なり周公夷狄を兼ね猛獸を驅りて百姓寧し孔子春秋を成して亂臣賊子懼ると滕文公以て孔子が法を後昆に垂れんとして此の著作ありしかを推知するを得べし

蓋し孔子の春秋を作るや一に魯の史記に依據す左傳に曰く二年春晋公韓宣子をして來聘せしむ且つ政を爲すことを告げて來見す禮也書を大史氏に觀易の象と魯の春秋とを見て曰く周の禮盡く魯に在り吾れ乃ち今にして周公の徳と周の王たる所以とを知る也と昭公二年以て魯には春秋なる史記のありしことを見るべし孟子は晉に魯に春秋あることを云ふのみならず更に孔子の之に依據して春秋を作成せる意思を述べて曰く王者の迹熄みて詩亡ぶ詩亡びて然る後春秋作る晉の乗楚の檣杵魯の春秋は一也其の事は齊桓晋文其の文は史なり孔子曰く其の義は丘竊に之を取ると離婁孔子が之に據りて大義名分を正したる精神見るべきにあらずや史記に曰く吾が道行はれず吾何を以て自ら後世に見さんや乃ち史記に因りて春秋を作る上は隱公に至り下は哀公に訖はり十二公魯に據り周を親しむ故に之を三代に般運す其の文辭を約して指博し故に吳楚の君自ら王と稱せるに春秋之を貶して子と曰ふ踐土の會實は周の天子を召す而して春秋之を諱みて河陽に狩すと曰ふ此の類を推して以て當世を繩す貶損の義後に王者あり舉げて之を開く春秋の



義行はれなば天下の亂臣賊子懼れん。孔子の位に在るや、詆の文辭を聽き、人と共にすべきものなれば、獨有せず。春秋を爲くるに至りては、筆すべきは筆し、削るべきは削り、子夏の徒一辭を贊すると能はず。弟子春秋を受く。孔子曰く、後世丘を知るものは、春秋を以てし、丘を罪するものも、亦春秋を以てせんと。世家、嗚呼、春秋の著作は眞に是れ孔子一生の本領を發揮せりと謂ふべきか。

## 一一一 孔子の聖人

聖人は吾れ得て之を見ざる也。君子を見るを得ば斯ち可也。と述而孔子聖人を見んと欲すれども得ず。由つて君子を以て満足せんとするも亦能はず。是に至つて豈に往聖を以て己が理想的人物として之を懷はざるを得ざらんや。論語に子曰く、甚い哉吾が衰へたとや久し吾れ復た夢に周公を見ずと。述而その孔子が周公を追思して措かざりしを見るべし。然り孔子は周公を以て理想的聖人として數へし一人也。而して之を稱するは其の徳の勝れたるにあるや固より論なきも、亦夫の周禮の制定者として、殊に其の才を稱せるが如し。論語に子曰く、如し周公の才の美ありて、驕且つ吝ならしめば、其の餘は觀るに足らざるのみと。泰伯此の言固より矜夸と鄙吝とを惡める語なりと雖も、抑も亦周公の才を美せるは明也。嗚呼、周公は既に才徳兼ね備はれる人、是れ孔子が之を寤寐の間にも夢想せる所以のものにあらずや。

論語を按ずるに、孔子が其の徳を稱せる過去の偉人には數多あり。泰伯の如



き。論語に曰く、泰伯は其れ至徳と謂ふべきのみ。三たび天下を以て譲り、民得て焉れを稱するとなしと。泰伯又夷齊の如き。論語に子貢問うて曰く、伯夷叔齊は何人ぞや。曰く、古の賢人也。曰く、怨みたるか。曰く、仁を求めて仁を得たり、又何をか怨みんやと。述而又論語に曰く、齊の景公馬千駟あり、死するの日、民徳として稱するとなし。伯夷叔齊首陽の下に餓死し、民今に至つて之を稱す。其れ之を謂ふかと。季氏又殷の三仁の如き。論語に曰く、微子は之を去り、箕子は之が奴となり、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁ありと。微子、唐虞三代の間に於いて、周公の外之を稱するものは、以上の如く多々之れありと。雖も孔子が最も推稱して措かざりしものは、二帝三王に外ならず。

孔子が堯を稱するに至つては、非常に絶大にして、全く之を天に比しぬ。曰く、大なる哉。堯の君たるや、巍々乎たる。唯だ天を大と爲す。唯堯之に則り、蕩々乎として、民能く名くるとなし。巍々乎として、其れ成功ある也。煥乎として、其れ文章ありと。泰伯以て之を稱するとの盛大なるを見るべし。

堯に亞いて孔子の稱する所のものは、舜也。論語に子曰く、無爲にして治めし

ものは、其れ舜なるか。夫れ何の爲めぞや。己を恭くして正南面するのみと。衛靈公孟子に、孔子曰く、大なる哉。堯の君たるや、惟天を大と爲す。惟堯之に則り、蕩々乎として、民能く名くるとなし。君なる哉。舜や、巍々乎として、天下を有して、與からずと。滕文公又論語に子曰く、巍々乎たり。舜禹の天下を有するや、而して與らずと。泰伯以て如何に舜禹を稱せるかを見るべし。

而して禹に對しは更に曰く、禹は吾れ間然するなし。飲食を菲うして、孝を鬼神に致し、衣服を惡うして、美を黻冕に致し、宮室を卑うして、力を溝洫に盡くす。禹は吾れ間然するなしと。泰伯その禹が節儉力行の徳を稱せるは、是れ孔子が傾倒の大なりし所以也。

禹に次いて孔子の崇拜せしものは、殷の湯王也。周の文武周公也。論語に曰く、天下を三分して、其の二を有し、以て殷に服事す。周の徳、其れ至徳と謂ふべきのみと。泰伯是れ豈に周の文王の徳を贊せるものにあらずや。

是に由つて之を觀れば、遠くは堯舜禹湯、近くは文武周公、之を孔子が理想的聖人と爲す。後來支那學者が唐虞の二帝、夏殷周の三王を崇拜して、措かざる所



以のものは蓋し孔子に淵源せるものと謂ふべき哉。

### 一三 孔子の終焉

#### 魯國の國老

孔子晩年にして再び魯に還るや魯は孔子を待するに國老を以てせり。論語に曰く、冉子朝を退く。子曰く、何ぞ晏きや。對へて曰く、政あり。子曰く、その事家事のとらん。如し政あらば吾れ以ひられずと雖も吾れ其れ之を與り聞かんと。(子路)是れ顧問として國政に參與せしを見るべきにあらずや。左傳に曰く、季孫田賦を以ひんと欲す。冉有をして仲尼に訪はしむ。仲尼曰く、丘識らずと。三たび發す。卒に曰く、子國老たり。子を待つて行はんとす。之を若何して子之を言はざるや。仲尼對へずして、冉有に私して曰く、君子の行や、禮に度り、施は其の厚きを、取り、事は其の中を擧げ、歛は其の薄きに從ふ。是の如くならば、丘、丘賦の法を以てするも亦足らん。若し禮に度らず、貪冒厭くことなければ、田賦を以てすと雖も、將に又足らざらんとす。且つ子が季孫若し行うて法らんと欲せば、周公の典在り、若し苟も行はんと欲せば、又何ぞ訪はんと聽かずと。哀公十一年、以て孔子



が魯に國老として優待せられ、隱然政治上の顧問たりし位地にありしを見るべし。

蓋し孔子の魯に反るや、道義徳望洵に一世を蓋ひ、その名聲天下に高く實に斯道の木鐸を以て認めらるゝものありしかば、凡庸なる哀公も、季康子も、之を國老として待せざるを得ざるものありしならん。且つ、それ孔子の高足冉有が既に季氏が宰となり、大に寵用せらるゝあり、奚ぞ之を國老として優待せざるを得ざらんや。

然れども、こは惟だ表面上の事のみ、その策は一も用ひられざりき。果せる哉。田賦は其の翌年に於いて行はれぬ。左傳に曰く、十二年春王の正月、田賦を用ふと、(哀公十二年是に於いてか孔子大に冉有を責む、冉有参照)

かくて孔子が魯國の政治上に干與せし最大事は、哀公十四年に齊の陳恒が其の君簡公を弑せる一事に在り、晏子参照。然れども凡庸にして爲すあるに足らざる哀公は遂に之を用ひざりき。

嗚呼、七十有二の老翁にして、尙能く時勢を指畫して、開戦を主張せる其の意

氣の壯なる吾人は覺えず、隱然是れ老將軍の樂あるを歎ぜずんばあらざる也。

晩年の不幸

孔子晩年に身は魯の國老を以て優遇せられ、その高足の門生も亦魯衛の間に重用せらるれば、その身に何等の不幸あるとなし、よし一生不遇にして流離困頓の中に歳月を送り、志を當世に得ざりしと雖も、その述刪は既に成り、知音を千載に埃つ、の業は今や將に就らんとす、その餘生は未だ知るべからずと雖も、亦心閑に天下の英材と俱に藝に遊んで樂まんとしたるに、何事ぞ子弟門人の中に不幸の事頻々として續出せんとは、史記に曰く、伯魚年五十、孔子に先ちて死すと、世家蓋し伯魚の器庸にして、その學藝に於いては愛しむに足らざらんも、而も孔子に取りては一ありて二なきの男たり、而して孔子の慈仁なる焉、之を哭して悼まざるを得ざらんや。

不幸なる哉、孔子その子伯魚を喪ひ、その涙痕未だ乾かざるに復た、その高足顔回の夭折に遇はんとは、顔回参照。嗚呼、悠々たる流水、一たび東逝して復た還らず焉、天子を喪せり、の嘆なきを得ざらんや。



顔回は三千の門生中、孔子の最も囑望せしもの、然るに今や亡し、噫、孔子、此の高弟を喪ひ、今復た夫の血性の好漢、子路が死に遇はんとは、子路参照公羊傳に曰く、子路死す、子曰く、噫、天子を祝つと、哀公十四年、蓋し子路は哀公十五年、衛の難に戦死せる也、禮記に曰く、孔子、子路を中庭に哭す、人の弔するものあり、夫子之を拜す、既に哭して、使者に進み、故を問ふ、使者曰く、之を醢にすと、遂に命じて、醢を覆さしむと、檀弓以て孔子が子路の死を如何に痛悼せしかを見るべし。

孔子の終記

昨は顔回、子路、伯魚の長逝を悲しみしに、今はまさに我身の上なるぞ切なる、嗚呼、命を知り、天を樂しむ、聖者と雖も、争て憂愁の念、哀怨の情なからんや、孔子家語に曰く、孔子、蚤晨に作き、手を負ひ、杖を曳き、門に逍遙して、歌つて曰く、泰山其れ頽らんか、梁木其れ壞れんか、喆人其れ萎せんか、既に歌ひ入り、戸に當つて坐す、子貢之を聞いて曰く、泰山頽らば、吾れ將た安んか、仰がん、梁木其れ壞れば、吾れ將た安んか、杖ん、喆人其れ萎せば、吾れ將た安んか、放らん、夫子殆ど病

まんとすと、遂に趨つて入る、夫子歎じて言つて曰く、賜、汝來ると、何ぞ遲きや、予疇昔夢に坐して、兩楹の間に奠めらる、夏后氏は東階の上に殯す、猶ほ阼に在り、般人は兩楹の間に殯す、即ち賓主と之を夾む、周人は兩階の間に殯す、猶ほ之を賓とす、而して丘や、即ち般人也、夫れ、明王興らざれば、天下其れ孰れか能く余を宗とせん、余速と將に死せんとすと、遂に病に寝ね、七日にして終はると、終記解然るに、後の學者此の歌を疑ふものあり、然れども、之を疑ふもの甚だ非也、常識透徹の偉人たる孔子は、固より言ふまでもなく、徒にその死を嘆ずるものにあらず、蓋し道の爲めに己が死を悼める也、若し、それ、聖人は命を知り、天を樂しむのみ、死生を視ると、猶ほ晝夜の如し、豈に自ら歌詩を爲つて、自ら其の死を悲まんやと、するが若きは、孔子を徒に高く祭り上げ、常識の圏外に埒して、非常識的の人と爲すもの也。

又孔子が自ら哲人に比せるを難ずるが如きは、抑も孔子が、或は斯文を以て自ら任じ、或は我を用ふるものは、期月のみにして可なりとの抱負と、自信とを知らざるもの、言固より一笑だも、値せず、吾人は寧ろ孔子がその終焉に際し、



自ら大に悲しみ亦大に哭せるを信ぜんとするもの也。

蓋し孔子の生まるゝや常識的にしてその死するも亦常識的也かくて孔子は涙を揮つて潔く門弟子と永久の別を告げぬあゝ常識透徹の偉人は遂に常識を以てその一生を通貫せるこそいと尊ぶけれ。

孔子年七十有四周の敬王四十一年即ち魯の哀公十六年西曆紀元前四百七十九年夏四月陰曆二月十一日に歿す左傳に曰く夏四月己丑孔丘卒公之を誄して曰く昊天弔せず愍く一老を遣して余一人を屏け以て位に在らしめ罕々として余疚に在り嗚呼哀哉尼父自ら律るとなけんと子貢曰く君其れ魯に歿せざらんか夫子の言に曰く禮失すれば昏く名失すれば愆つ志を失ふを昏となし所を失ふを愆となす生きて用ふると能はず死して之を誄するは禮にあらざる也一人と稱するは名にあらざる也君兩ながら之を失ふと哀公十六年)

哀公の凡庸にしてこれの若く之を悲めり况んや孔門の賢者をやそれ何如ぞ泰山崩るゝの感なきを得んや。

孔子卒し門人その聖骸を魯の城北の泗上に葬むる史記に曰く孔子を魯の城北の泗上に葬むる弟子服すると三年三年の心喪畢り相訣れて去りては哭し各復た哀を盡くし或は復た留まる唯子貢冢上に慮すると凡そ六年にして後に去る弟子及び魯人往きて冢に従つて冢するもの百有餘室因つて命つて孔子と曰ふ魯世々相傳へ歳時を以て孔子の冢を奉祠す而して諸儒も亦禮を講し孔子の家に郷飲大射す孔子の冢大いさ一頃故居る所の堂弟子の内後世因つて廟となし孔子の衣冠琴車書を藏む漢に至るまで二百餘年絶えずと世家冢畔するもの百餘室とあゝ聖者の徳も亦偉ならずや。

孔子歿し門人その喪に服せると三年猶ほ父喪の禮を以て之に事へしもの也孟子曰く昔者孔子歿し三年の外門人任を治めて將に歸らんとす入つて子貢に揖し相嚮つて哭し皆聲を失ふ然る後に歸る子貢反り室を場に築き獨り居ると三年然る後に歸る他日子夏子張子游有若の聖人に似たるを以て孔子に事ふる所を以て之に事へんと欲し曾子に彊ふ曾子曰く不可なり江漢以て之を濯ひ秋陽以て之を暴す皜々乎として尙ふべからざるのみと滕文公子貢



が心喪六年に服せるはその孔子が子貢に對する生前の恩愛深きを見るべく、江漢以濯之秋陽以暴之、蟪々乎不可尙而已と云へるは孔子の卓爾として超出せる風、丰眞に仰ぐべくして、狎るべからざるを遺憾なく發揮せるもの、將た子夏、子張、子游の徒が孔子を追慕して措かず、有若を以て僅に其の渴仰の情を慰藉せんとする其の痛切の情を知らる。

あゝ孔子仰ぎ慕ふこと子の如き門人の手に遊いてより今に至つて悠々二千三百八十有七年その徳教は洋々乎として尙ほ能く東洋を光被す於戲聖者の徳も亦盛ならずや。

一四 孔子の人格

生まれて一世の儀表となり死して百代の木鐸となる是れ豈に聖人にあらざんば焉ぞ之を能くする所ならむや昔者孟軻氏謂へるとあり聖人は百世の師也と盡心然り孔子は百世の師表也その人格の絶大なるその性情の圓滿なる世に聖賢の人に乏しからずと雖も古來未だ孔子に比倫すべきものはあらざる也あゝ常識透徹の偉人として圓滿なる發達を遂げし孔子の若きは眞に古今獨歩と謂ふべきか。

由來世に偉人と云はれ賢才と稱せらるゝ者は身多く奇蹟を伴ひ行亦危険なる點甚だ鮮からざるを常とす然るに獨り孔子に至つては何等の奇蹟なく亦何等の危険もなく唯だ尋常の道を踏み循々然として序を追ひ次第に發展して夫の絶大なる人格を築き上げしもの即ち孔子自らが謂へりし下學して上達せりとは蓋し此の謂ひにして是れ吾人が特に孔子を推稱して措かざる所以のものも實に此に存せずんばあらざる也。